

# 掛川市遺跡分布調査報告

I

1984

掛川市教育委員会







# 掛川市遺跡分布調査報告

I

1984

掛川市教育委員会



# 序

本報告書は、掛川市教育委員会が実施した市内遺跡分布調査事業に伴う遺跡資料調査研究の成果を収録したものです。

掛川市域には、縄文時代の遺跡をはじめとして多くの遺跡が分布しておりますが、このたびの調査研究を通じて遺跡の保存と活用等について有益な示唆を得ることができたと思います。

調査の実施にあたって御協力いただいた研究委員の諸氏の外、関係の方々に対し謝意を表すものがあります。

昭和 59 年 3 月 吉日

掛 川 市 教 育 委 員 会  
教育長 伊 藤 昌 明

# 凡 例

1. 本書は、掛川市教育委員会が行った市内遺跡分布調査事業に伴う、遺跡資料調査研究の報告である。

2. 本書の執筆分担は、次のとおりである。

第1章 瀬川 裕一郎

第2章 瀬川 裕一郎

第3章 加藤 賢二 ・ 松本 一男

第4章 佐藤 由起男

第5章 吉岡 伸夫 ・ 渡辺 康裕

第6章 吉岡 伸夫

3. 本書に挿入の実測図、撮影図、写真等の作成は、各章の執筆者が行なった。



# 目 次

第1章	掛川市遺跡分布調査の成果と展望	1
第1節	はじめに	1
第2節	成果と展望	1
第2章	先土器時代	10
第3章	縄文時代	13
第1節	縄文時代遺跡の分布	13
A	上内田遺跡群	
B	原野谷川流域南遺跡群	
C	原野谷川流域北遺跡群	
D	倉真川流域遺跡群	
E	逆川上流域遺跡群	
第2節	主要遺跡の概要	17
1	五百済（ようずみ）遺跡 五百済	
2	王子（おおじ）遺跡	
3	岡津原（おかつはら）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡 岡津	
4	中原遺跡	
5	下ノ段遺跡 吉岡下ノ段	
6	瀬戸山（せどやま）Ⅰ・Ⅱ遺跡	
7	萩ノ段遺跡 寺島	
8	上ノ段遺跡	
第3節	ま と め	31

第4章	弥生時代の遺跡の概要	35
第1節	分布	35
1	はじめに	
2	遺跡の時代的分類	
3	遺跡の空間的分類	
4	遺跡の動態	
5	弥生社会の形成と崩壊	
6	おわりに	
第2節	遺跡の概説	50
1	はじめに	
2	各遺跡出土の土器	
第3節	まとめ	57
第5章	古墳時代	58
第1節	中期古墳の分布	58
1	主要古墳の概要	
2	まとめ	
第2節	古墳時代後期	63
1	分布	
2	年代	
3	まとめ—遺跡の動態と集団関係	
第6章	奈良・平安時代	73
第1節	奈良・平安の遺跡分布	73
1	主要遺跡の概要	
2	まとめ	

# 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡地の所在地	7
第 2 図	縄文・弥生・古墳の各時代遺跡分布図	8
第 3 図	円墳・前方後円墳・横穴分布図	9
第 4 図	尖頭器（左・堂山遺跡、右・庵ノ下遺跡）	12
第 5 図	縄文時代の遺跡分布図	15
第 6 図	縄文時代土器拓影図(1)	24
第 7 図	“ (2)	25
第 8 図	“ (3)	26
第 9 図	“ (4)	27
第 10 図	“ (5)	28
第 11 図	“ (6)	29
第 12 図	“ (7)	32
第 13 図	弥生時代遺跡分布図	40
第 14 図	弥生時代時期別遺跡分布図(1)	42
第 15 図	“ (2)	43
第 16 図	“ (3)	43
第 17 図	“ (4)	43
第 18 図	“ (5)	44
第 19 図	弥生時代土器拓影図(1)	52
第 20 図	“ (2)	53
第 21 図	“ (3)	54
第 22 図	“ (4)	55

第 23 図	築造企画図	.....	62
第 24 図	遺物実測図	.....	64

## 表 目 次

第 1 表	縄文時代遺跡地名表	.....	14
第 2 表	1 弥生時代遺跡地名表	.....	37
	2 “	.....	38
	3 “	.....	39
第 3 表	各和原台地に分布する中期大形古墳の築造企画一覧表	.....	61

# 第1章 掛川市遺跡分布調査の成果と展望

## 第1節 はじめに

人口約6万5千、総面積約186 km<sup>2</sup>を有する掛川市は、静岡県中部西端に位置し、東遠地域の中核都市として発展途上にある。

掛川の名の起りは「源平盛衰記」などにみられる「懸川の宿」とするのが一般で、それによれば、既に平安末～鎌倉初頭から宿駅として発展していたことが知られる。

また、和田岡に存在する和田岡古墳群は、それを根拠のひとつとして、古くから大化前代の素賀国と結びつけて考えられている。現在の地名によれば、市西南部一帯を含む「曾我」を中心とする地域ということであろう。

中世になると小高荘、大池荘、西郷荘、曾我荘、原田荘、懸河荘、内田荘などが現在の市域にみられたはずであるし、さらには、伊勢神宮の領地である御厨が、小高、小高下、山口などに存在していた。

また、承久3年(1221)以前に最勝光院領として成立していたであろうとされる原田荘には地頭として原氏が蟠踞していた。そしてその一族がやがて武田方に属し、徳川方に属する久野宗能によって元亀4年(1573)に攻略されるまでの永い間は、原田荘を領していた原氏の活躍した時期であった。

明応から文亀年間(1492～1504)には、今川氏親によって掛川城が築城され、今川氏による遠江支配の拠点となった。

天正18年(1590)石川康通の後を継いだ山内一豊以後、掛川城は江戸幕府により家門、譜代大名の配置城主の移動はめまぐるしい程よく行われた。

そして慶長6年(1601)家康が東海道の宿駅を定めた際に、この掛川宿もそのひとつに加えられ、近世宿駅として整備されていった。

このように、掛川市域とそこに活躍した人々は、古代から中、近世そして近、現代に至るまで、ある時には歴史の中心(地)となるなどして発展してきた。

それではそれらの人々が残してきた生活の痕跡—遺跡—がどのようなになっているかをたどってみることにしよう。

## 第2節 成果と展望

この掛川市域に最初に人が住みはじめたのは、一体いつごろのことであつたろうか。現状ではそのことが明らかになるのは、縄文時代になってからのようである。確かに掛川市域においても先土器時代の遺物と称するものが二、三紹介されてはいるが、後述するように、確実にそれらを先土器時代のものであるとはいいきれない面もある。従って、掛川市域に人々が住み始めるのは縄文時代のことであり、放射性炭素による年代観に従へば、約7～8000年以前のことということになる。

掛川市域の多くには掛川層群と称される、新第3系鮮新統ないしは更新統初期に形成されたと考えられる層準に覆れている。その掛川層群を原野谷川、垂木川、初馬川、逆川等が開折して掛川の市街地が形成されたものとされている。しかし、通常はその新第3系鮮新統の層準の上にはのるはずの、いわゆる第四紀の層準は掛川市域には非常に少ないようである。場所によっては、それらの第四紀層の堆積していない所もあるかもしれない。

掛川市域の中央部をほぼ南北に流下する倉真川の上流域には、かなり良質な頁岩が産出する。そして〇〇〇の仲屋栄一氏の所蔵する龐大な量の石器群も、その石材の産出地を倉真川の上流域にもっている

ようである。倉真川の上流域に産出する頁岩は、淡い茶色を呈する珪質頁岩のようで、硬い石で叩くと幅狭な長い美事な石片ができる。こうした良好な石材に恵まれた地域であるならば、石器を主たる生産用具としていた先土器時代に人々が生活していても、別になんの不思議もないはずである。しかし、現状では例えば磐田原台地にみられる先土器時代の石器群ひは、この倉真川の頁岩にみられないようである。倉真川の頁岩はどちらかといえば縄文時代の石器として使用される例が多いようである。④そして、磐田原台地にみられる先土器時代の石器材料に用いられる頁岩は、愛知県の津具村方面にその産地をもつとされている。そのことも理由のひとつとなって、掛川市域の先土器時代遺物に対して、そう判断するのになお躊躇せざるを得ないのである。

従って、掛川市域において先土器時代遺跡の確認をするには、まず定形化された先土器時代石器の発見に努めるべきであり、合せてその石器の含まれる層準について確認すべきであると思われる。

掛川市の西端を南北に流れる原野谷川の流域は、掛川市内で最も遺跡の多い地域のひとつである。原里に集中する一群と原田に集中する一群、さらには南に下って和田岡の一群と大きくは3群に分けて捉えることも可能である。原里に集中する一群が縄文時代遺跡を多くもつの対し、倉真川下流域左岸にはそれと対照的に、弥生時代から古墳時代のものが多い。桜木飛鳥の丘陵には横穴と円墳が集中している。

その原里に集中する遺跡群のなかに萩、段遺跡は存在する。そして、その萩、段遺跡から掛川市域で最も古いと考えられる押型文土器が発見されている。押型文土器は他には和田岡丘陵の瀬戸山遺跡と五百済の五百済遺跡にみられるのみである。それらにみられる押型文土器は、山形文と格子目文を含み、その組み合わせの上からは、より古式であると考えられるようであるが、加藤も指適するように、長野県の樋沢式とはいきれないようである（本文34頁参照）。しかし、樋沢式に近い時間的位置付けを考えても良いであろう。また、萩、段と瀬戸山は原野谷川右岸の段丘上に、五百済遺跡は五百済川流域の段丘上にそれぞれ位置し、共に南に開く小さな狭い丘陵上に所在する。それぞれが決して、拠点的な遺跡とはなりえないような小規模なものようで、それぞれがキャンプサイトの性格をもっていたと考えられる。それ故、縄文時代形成期の掛川は極く僅かな員数の人達が時たま訪れるキャンプ地であったと考えられる。

掛川の地に人々が定着しはじめるのは、縄文時代発展期になってからのことのようにである。

掛川市域における発展期に人降成熟期、終末期に至る人の動きを、和田岡の中原遺跡をとおしてみると、次のようになろうか。

中原遺跡は原野谷川の段丘上に位置し、周囲には吉岡大塚古墳もみられる。

この中原遺跡に最初に人が住みはじめたのは、五鈴ヶ台Ⅰ式期の頃であると考えられる。そこで発見された土器は、五鈴ヶ台Ⅰ式に対応するものには違いないが、そこには東海地方的な要素を強くとどめているようである。また、それに後続すると思われる五鈴ヶ台Ⅱ式とされる土器や岐阜県方面によくみられる北裏CⅠ式土器も含まれている。周辺の遺跡で五鈴ヶ台Ⅱ式に対応するとされている鷹島式土器といわれている近畿から瀬戸内地方に多い土器（関西系の土器）がみられるが、この中原遺跡には現状では鷹島式はみられないようである。そこには、関東的な色彩をもつとされる五鈴ヶ台Ⅱ式土器のみのものである。しかし、五鈴ヶ台Ⅱ式に続く土器には近畿・瀬戸内の船元Ⅱ式（関西系の土器）が相伴するようで、五鈴ヶ台Ⅱ式に続く時期に、近畿・瀬戸内となんらかの形で係わったことが知られる。同じ頃の土器群として、袋井大畑具塚で注目された大畑CⅡ式とよばれる土器やより関東的な阿玉台式、勝坂式土器などもみられ、その勝坂式には関西的な北屋敷式土器が伴うようである。

その後、成熟期を迎えると中部山岳地方の土器や関東地方の土器が多くみられるようになり、中原に住いていた人にもどことなく移動していったようである。中原遺跡は一旦終末を迎えるということである。

中原遺跡に初めて人が住みはじめた頃、中原から東へ600m程行った吉岡下、段遺跡でも人々の活動がみられた。しかし、下、段では中原ほど連綿として生活が続いていない。下、段での最初の段階は中原と同じように、東海的な五鈴ヶ台式土器と北裏C I式土器をもった人々であった。その後、発展期の終末になって、僅かに北屋敷式土器をもった人々の痕跡がみられ、そこは一坦無人の地となったようである。

そして、再び下、段に人々が舞い戻って来たのは縄文時代も成熟期を迎える頃である。そして彼等は中部山岳や関東地方と係わる曾利式土器や加曾利E式土器をもった人々であった。そこにはほんの僅かではあるが瀬戸内の土器等もみられた。ようするに、下、段では最初に住みはじめた人々は中原と同じ土器をもった人々であったということであり、その終末に住んだ人々もまた、中原と同じ土器をもった人々であったということである。このことは中原に住いた人々と下、段に住いた人々は、実は同じグループ（集団）の人々であったということを示しているのかもしれない。それでは何故、中原では連綿として生活が営まれたのに、下、段ではそうならなかったのだろうか。

中原や下、段で最初の人々の生活が始った頃、中原から北へ約7km離れた萩、段にも人々の姿がみられたはずである。尤も萩、段では縄文時代形成期の頃から人々は住み始めていたようである。しかし、萩、段は一時は、どうも明らかな住居をつくるという、いわゆる定住的な生活を営んだ場ではなく、狩猟等のための一時的なキャンプ地のようにであった。萩、段では発展期になると、「定住」があったのかもしれない。

そのころ五百済にも彼等の生活の痕跡が残されている。しかし、五百済の例は中原や吉岡下、段、萩、段の例と比べて、一時期新しいようである。その五百済には近畿、瀬戸内の土器（関西系の土器）のみがみられるようで、いわゆる関東系の土器は含まれていないようである。そうすると、この五百済の例は中原や吉岡下、段、萩、段の例とは一時期異ってはいるが、そこに住いた人々は中原等に住いた人々とグループ（集団）を異にしていた人々であるかもしれない。現状で掛川市域では五百済で発見された関西系の土器——鷹島式——はここでのみしか発見されていないようである。尤も、それに後続する土器は中原や萩、段でも発見されているので、集団を異にしていたとは単純にいきれないかもしれない。

縄文時代発展期から成熟期、終末期にかけての掛川市域での遺跡の動態をみると、中原遺跡という拠点的な遺跡があって、そこを中心に人々は活動していたようである。

まず、発展期の終り頃、中原で何人かの人々が生活をはじめ、そのなかのいくつかのグループ（家族）が、主たるグループ（中原の集団）から分れて、吉岡下、段と萩、段を生活拠点とした。その時の吉岡下、段と萩、段の人々は土器でみる限り、異った土器をもっていた。すなわち、吉岡下、段と中原には北裏C I式とよばれる土器がみられるのに対して、萩、段ではそれがみられない。その差を拡大解釈して、集団の差とみるか、嗜好の差ないしは土器の用途の差とみるかは明らかでない。

その後、吉岡下、段や萩、段には人々はみられなくなり、代って岡津原Ⅲ地点や上、段に人々が住みはじめる。中原には相変わらず何人かの人々は生活を繰り返している。

その後、成熟期を迎えるまで、中原を拠点として、吉岡下、段や萩、段、上、段などに点々と彼等の生活の痕跡は残されるが、一時期1箇所が確認されるのみである。従って、中原を含めて、各期に2箇所程度の生活の拠点が拡散したということになる。

成熟期になると、特にその初期の段階には激しく拡散している。それは、中原を中心に安定した生活を送り得た彼等の上に、やがて人口増がみられそれを賄うために、より広範な拡散をした結果であるかもしれない。中原を中心として五百済の王子、岡津原Ⅰ地点、吉岡下、段、上、段という拡い方、さらには中原から岡津原Ⅱ地点、吉岡下、段、萩、段という拡い方などみられ、4～5箇所に拡散している

ことが読みとれる。そこには中部山岳の曾利式土器や関東地方の加曾利E式、瀬戸内の里木式とよばれる土器をもった人々が生活していた。拠点となったであろう中原からみると岡津原で4.5 km、上、段、萩、段で7 km、五百済の王子で14 kmという直線距離をもってはいるが、それぞれの情報が一日で確実に伝わる距離でもある。

その原因は良く判らないが、おおよそ1000年の間続いた中原の集落も、成熟期になるとやがて終焉を迎えるようになる。中原を含めて、岡津原Ⅰ地点と上、段で関東的色彩の強い堀ノ内Ⅰ式土器を用いた人々を最後に、生活の拠点は上、段に移ったようである。

この段階以降掛川市域の縄文時代遺跡は激減する。こうした状況は掛川市域にのみみられる訳ではなく、おそらく全国的な規模でのことであると思われる。以後、縄文時代終末期まで、現在までの知識では上、段遺跡が存在するのみで、そこにみられる土器も、関東的色彩の強いものから、東海的色彩をもつものへと変っているようである。

遺跡の数が激減するという事は、単純に判断すればそこで生活する人々が減ったということでもある。それは同時に食生活の変換を余儀なくされたということをも意味するであろう。反対に遺跡数が増えたということは、人口の増大を意味するであろうし、食料の窮乏による生活地の分散をも意味するであろう。掛川市域で中原に住んでいた人々が、やがて上、段に居を構えた頃は、気象学の上からすれば現在より平均気温で2～3度は低くかったとされている。昨今の異常低温が長年の平均気温からの偏差値からすればせいぜい1度前後の差しかないようなので、それが2～3度の差があるとなるとかなりの違いがあったことになる。

気温が低くなり、それによって動物相や植物相にも影響が現われ、そのことが大きな力となってやがて集落がなくなり、さらには人の数までが減少した。要するに自然環境の変化により、立どころに生活をおびやかされるという程度に、当時の人々は自然から自立していなかったということである。その上人口増加率が動物や植物の繁殖率を上まわるといふ現象もおこったに違いなく、結果として食料不足となる。そうすると上、段で生活していた僅かな員数の人々も、食料を求めてさらに分散を余儀なくされる。その結果が掛川市域の縄文時代終末の遺跡が14箇所にも急増する形となって現われているものと考えられる。

その縄文時代終末期の遺跡は掛川市域に14箇所残されている。原野谷川流域に10箇所集中していて、他は倉真川流域の2箇所、逆川流域及び小笠川と五百済川に挟まれた個所に1箇所みることができる。そのうち、縄文時代でのみ完結してしまう遺跡が五百済の五百済遺跡、東山口の木下遺跡、里在家の山崎新田、山崎寺中の4箇所である。また、縄文時代終末から弥生中期まで継続しているものに岡津の向山遺跡、幡鎌の黒比志遺跡、原里の萩遺跡がある。原里の松下遺跡と萩、段遺跡はさらに弥生後期まで継続しているようである。さらに、古墳時代前期まで引き続いて営まれたものに原里の上、段遺跡、和田岡の瀬戸山Ⅱ遺跡、岡津の岡津原Ⅰ、Ⅲ遺跡があり、和田岡の吉岡下、段については古墳時代後期まで継続している。

このようにみえてくると、縄文時代終末期から継続して生活の営まれたのは原野谷川流域の遺跡群であったことが知られる。

しかし、土器型式による具体的なより細かな時間幅での遺跡の動態をみると、必ずしも上記のようにはないようである。例えば、原里地域を中心とする原野谷川流域をみても、中期後葉で一坦断絶するものもみられるようであるし、なかには、中期後葉で開始される遺跡もある。そういう意味では弥生後期とされる時期もさらに細分されるはずであるが、詳しくは検討していない。

そうした状況のなかで、掛川市域に展開された弥生時代遺跡の動態について考えてみたい。

掛川市域を原野谷川流域、倉真川流域、逆川流域等に大きく区分し、なかでも原野谷川流域に位置す



る原里地域の動態を通して、掛川市域の弥生時代遺跡の動態をみることにする。

原野谷川流域の縄文時代終末期は上、段遺跡に始まると考えとられる。それは縄文時代成熟期の中原遺跡に引き続いて、上、段では終末期初期に生活が営まれており、その末期にも生活の痕跡をみることができるからである。

縄文時代終末期は一時現在より温暖な時もあったようであるが、おしなべて現在より次涼な時が長かったようである。そのことが原因のひとつになったのかもしれないが、原野谷川の上、段に居を構えた人々も、そのうちの何人（何家族）かは他所へ移らなければならなかった。従って、かなりの小人数による移動が考えられ、掛川市域で同期の遺跡と考えられる14箇所も、それぞれがさして規模の大きくない遺跡であったと考えられる。上、段と同じ原野谷川流域にも松下や萩、萩、段などに小人数（小家族）が移動していった。また、同時に倉真川流域の山崎新田や山崎寺中、逆川の木、下五百済などにも移動の跡がみられるが、それらはいずれも縄文時代終末期で完結してしまい、以後に継続していない。しかし、逆川の木下で約13km、五百済で16km程上、段から離れており、やや離れすぎの感がないでもない。

原野谷川流域の縄文時代終末期の遺跡は、どれもが長い間継続しているようである。最も短いものでも縄文時代終末期から弥生時代中期まで続いている。しかし、それが連綿として続いていたかというところにも記したとおり、弥生時代中期後葉で多くの遺跡が一旦断絶してしまうようである。原野谷川流域で中期後葉の土器が確認できるのは吉岡下、段のみである。現状では中期後葉の土器は吉岡下、段と大文山、御所原、欽家位にしかみられず、一旦分散していった人々が再び集結した結果かもしれない。あるいは一時的に生産が向上し、数箇所もムラムラで掛川市域の人々を賄えることができたためかもしれない。

それが弥生時代後半になると再び分散して行くようになる。原野谷川流域原里地域でも上、段や吉岡下、段を中心に上、平、和田、大縄、松下、花、木沢、堂山、萩、段、平Ⅰ、平Ⅱ、雨垂等に分散がみられ、それらはことごとく丘陵上に占地している。

縄文時代終末期で完結した山崎新田や木、下には、およそ1kmの範囲内に弥生時代中期の遺跡が開始される。それは縄文時代末に彼等の先祖がそこに住んでいたことを知っていた人々によったにちがいない。しかし、それらも弥生時代中期で完結してしまい、長くは継続していないようである。

弥生時代の後期といえば、現在に比してかなり寒冷であったと考えられている。また、「弥生時代後期から古墳時代にかけて、住居を破壊したり泥炭地を埋めるような洪水が各地で起ったことが明らかに」されているようでもあり、（坂口・1984）、それをすぐに掛川市域での当時の状況であるとはいわないが、いずれにしても弥生時代後期から古墳時代にかけては、寒冷でその上雨の多い状態がみられたようである。そうすると現在に比べて、かなり低いレベルにあったであろう水田耕作技術をもってしては、そのような自然環境にどこまで堪え得たかということも問題となろう。弥生後期になって小規模な遺跡が爆発的に増えて行くことと、このような自然環境のあり方が有機的に関連しているとも考えられよう。掛川市域の弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡の多くは丘陵上に残されており、いわゆる低地に残された遺跡は少ない。あるいはそのことも先の坂口の見解を考慮すれば割り合い理解しやすと思われる。そうした目で掛川市域の弥生後期の遺跡を見直すと、領家、篠場等の低地に展開する遺跡と天王山を筆頭とした丘陵上に位置する遺跡が見事に対置していることに気付くであろう。

天王山等の丘陵上に住いた人々は、生活の場と狭義の生産の場を違えていたのかもしれない。とはいっても、例えば天王山の場合、100mも下れば（天王山は標高50m位の丘陵上に位置する）30m程の比高差をもつ沖積地に到達できるし、さらに100mも南下すれば北池（人工の池なのか、自然のものなのか、あるいは人工ならばいつつくられたかは知らないが……）と称する池もあり、水田耕作には適していたものと思われる。

いずれにしても、掛川市域の弥生後期の遺跡は、従前から継続して営まれたものよりも、後期になってあらたに開始されたものが多い。掛川市域の128箇所(128)の弥生時代後期の遺跡のうち、99箇所(77%)は弥生時代後期に開始されたものである。そして、128箇所の弥生時代後期の遺跡で古墳時代まで継続しているものが63箇所(49%)を数え、さらに古墳時代中期まで継続しているものは6箇所(5%)を占める。単独で存在するものを含めても、古墳時代中期の遺跡は10箇所となり、弥生時代後期の遺跡数に比して約8%という少ない数になってしまう。それは、それぞれのムラが統合し、集約した結果だろうか。ほぼ掛川市域全域に広がった古墳時代前期の遺跡の69箇所が原野谷川流域の安里山、高田上、段、後藤ヶ谷、城、腰、東原、吉岡下、段、高田、花、腰等の10箇所へ統合されたのだろうか。

それに対して、古墳時代後期の遺跡—ムラーは現状ではほとんどみられない。

掛川市域には古墳時代中期—5世紀代—に築造されたと考えられる大型古墳が何基か存在する。そのうち、春林院古墳、瓢塚古墳、行人塚古墳、各和金塚古墳、吉岡大塚古墳の5基はことごとく和田岡丘陵に立地している。径30mの大型円墳である春林院を除くと、他は50m~60数mの規模をもつ前方後円墳である。他には西郷地域に下山古墳とよばれる150mに達するとされる前方後方墳が所在するとされているが、その下山古墳については果して確実に前方後円形を呈するか否か疑問とする意見もある。

現状では古墳時代中期の遺跡は原野谷川流域に集中してみられ、僅かに家代川流域の桶田遺跡と倉真川流域の次郎丸遺跡の2箇所が他地域にみられるのみである。そして、桶田については古墳時代前期から継続してみられるが、次郎丸についてはそこが集落址であったのか、墳墓であったのかよく判らない。

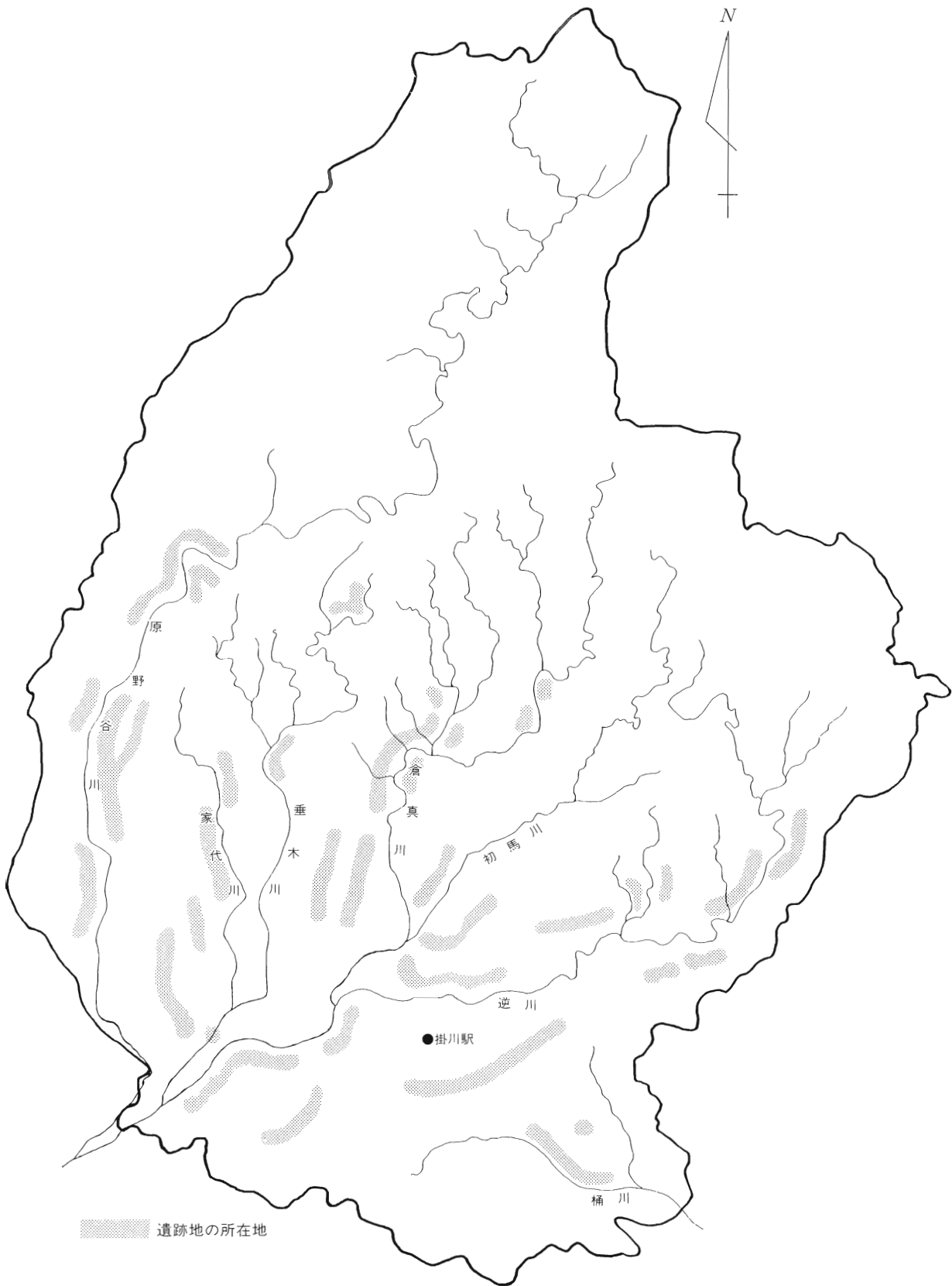
先に古墳時代中期の遺跡が弥生時代後期のそれに比して約8%に激減してしまうと記した。その原因が何に求められるかは一まず置くとして、あるいは、未発見の遺跡もあるかもしれないが、それらを含めても現状の倍になるとは考えられない。このことはまた、弥生時代後期に比して著しく人口が減少したことも意味しよう。弥生時代後期128箇所あった遺跡が、古墳時代前期で69箇所に減少し、さらに古墳時代中期では10箇所に減少してしまう。その原因が何にあったかは良く判らないが、その原因のひとつに古墳時代は現在に比しておしなべて寒冷であったということもあげられようか。弥生時代後期という時代はおおよそ7000年以前までの間で、最も寒さの落ちこんだ時期であるとされており、そのことが原因となって、人々が分散したとも考えられる。そうした分散によっても、あるいは分散によればこそ、生産性もさして向上せず、人口が激減し再び集約しなければならなかったのだろうか。

だとすれば、原野谷川流域に残された僅か8箇所の遺跡を支えた人々によって、長さが70mにも達する大古墳か、僅か1世紀の間に5基も造営することが可能であったろうか。もちろん、これらの古墳に係わった人々は原野谷川流域の人々のみではなかったにちがいないが、そういう意味では人口が減少するという現象も決して掛川市域にのみみられたことではないはずである。僅かな数の人々が総力を結集して、これらの古墳の造営にあたらざるを得なかったということであろうか。

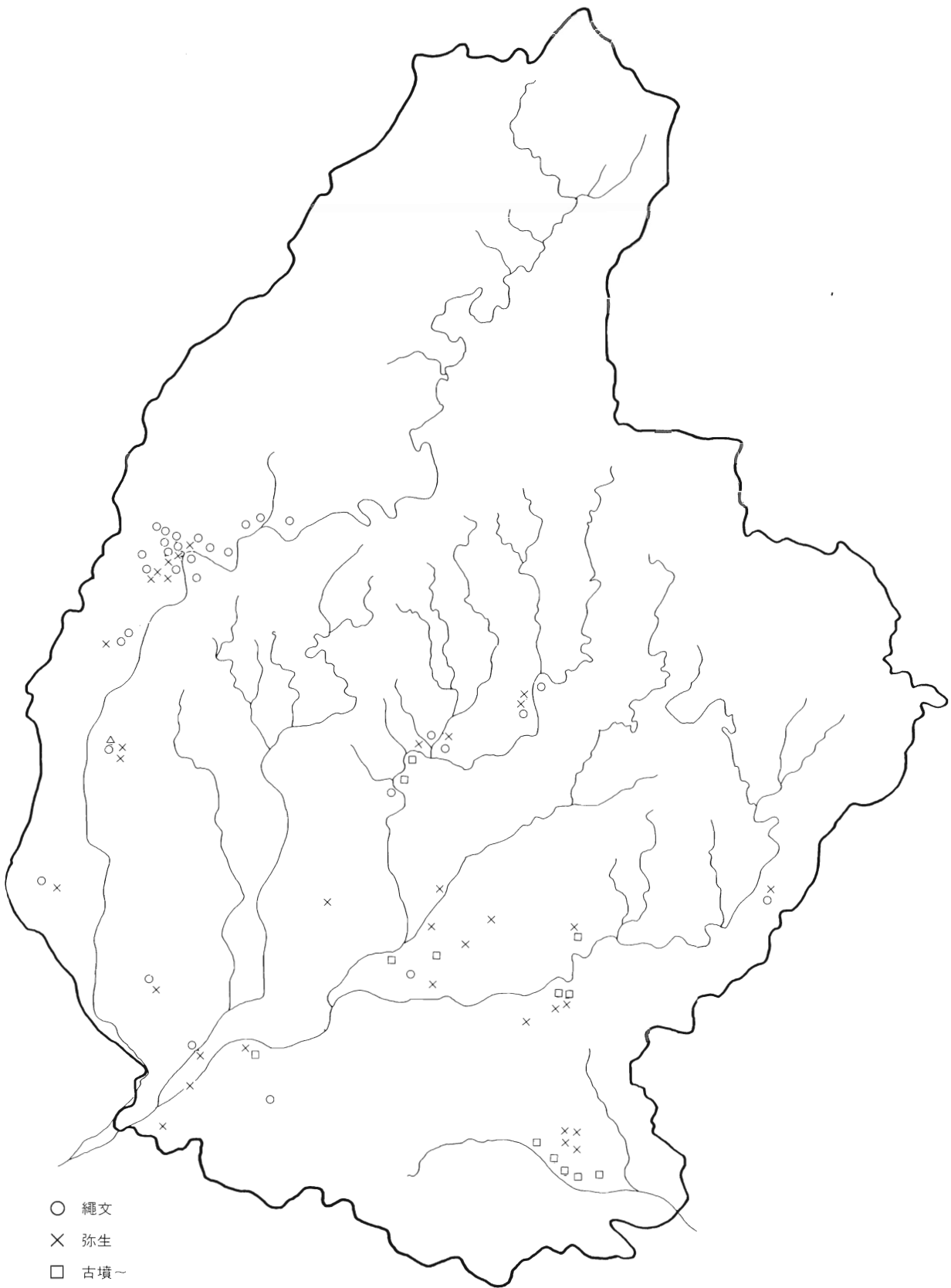
また、掛川市域には800基近い横穴墳と地名表によれば200基に達する円墳が存在するとされている。それらの古墳や横穴墳はいずれも6世紀から8世紀にかけて造られ、また追葬に用されたものもある。

しかし、現状では該期の遺跡は極く最近確認された原川遺跡のみのようである。例えば800基に近い横穴墳を築いた人々、さらにはそこに埋葬された人々は一体どこに住んでいたのだろうか。200基に達する円墳を築き、また埋葬された人々についても同じ疑問が浮んでくる。

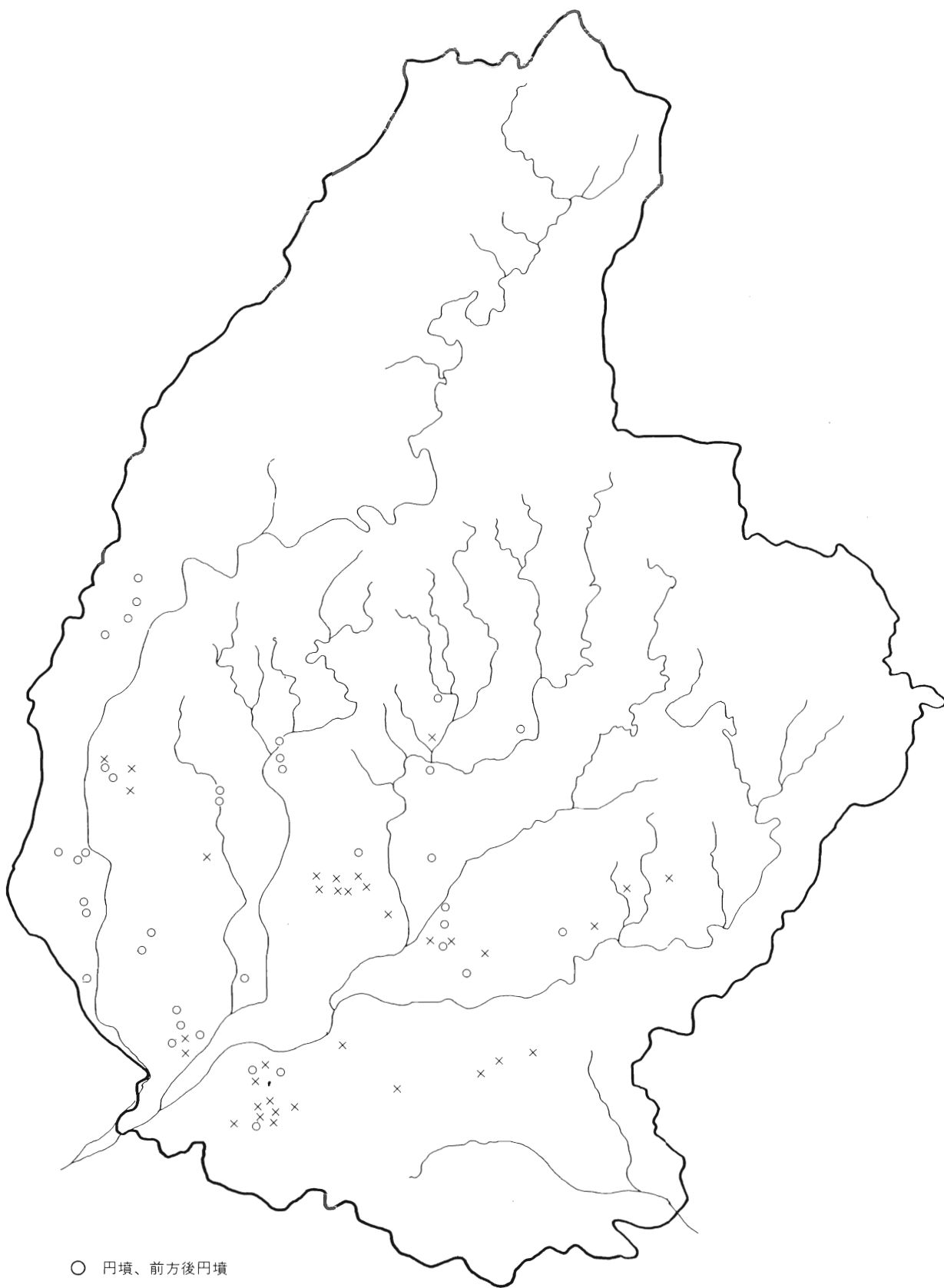
紙数に限りもあって、掛川市域の遺跡の動態について詳しく記すことが出来なかった。その上、日常掛川とは馴染みの少ない所で生活しているので、事実の談認等多々あるものと思われる。それは筆者の勉強不足によるものと了解されたい。



第1図 遺跡地の所在地



第2図 縄文・弥生・古墳の各時代遺跡分布図



第3図 円墳、前方後円墳・横穴分布図

## 第2章 先土器時代

掛川市誌では庵ノ下、上ノ段の2箇所、掛川市遺跡地名表では萩、上ノ段、中原の3箇所が先土器時代遺跡として記録されている。

そのへんから検討を加えていこう。

まず市誌にみられる庵ノ下の有舌ポイントというのは単なるポイントの誤りであろう。それは既に森町考古3号（森町考古学研究会・1971）誌上に足立順司、向坂鋼二の両氏により紹介されているものではなくである。森町考古誌上で足立、向坂の両氏による細かな記述もされているので、それについては後に多少補足しておきたいと思う。

従って、ここでは上ノ段、萩、中原の遺物について検討を加えて行くことにする。なお市誌の上ノ段と市地名表の上ノ段と同地点のようであると思われる。

上ノ段の仲屋栄一氏は掛川市内の縄文、弥生、古墳時代にわたる資料を多数蒐集保管されている。そのなかに上ノ段周辺から発見されたという剥片類が2～300点はあるように思う。なかには縁辺部に僅かな加工の加えられた削器と思われるものも含まれているが、総じて定形化された石器は見当らないようである。仲屋栄一氏によれば、それらは黒色土の下層の黄色土層中に礫を伴って発見される場合が多いという。そして、その黄色土層は掛川市では多くの場所によくみることのできるもので、多分、掛川層群を形成する一部に違いないと思われる。そうするとそれが形成されたのは新第三紀鮮新統ということになり、ここで問題にしようとする先土器時代よりもはるかに以前の時代のことである。

そういう意味では、その層中に先土器時代の遺物が含まれていても、別に不思議ではないが、以下いくつかあげる理由によって、仲屋栄一氏が蒐集された、主として剥片類を先土器時代の遺物であるとするには躊躇せざるを得ない。

周辺地区の先土器時代の状況を見ると、例えば磐田原台地の例では、石材として盛んに頁岩が使われている。確かに上ノ段の剥片類にも頁岩は多くみられるが、磐田原のものとは明らかに区別できる程の差がある。その上、磐田原にみられる先土器時代の頁岩は、それぞれ適当に風化しているものもあるが、上ノ段のものはいずれもシャープであり、風化の痕跡も余りみられない。

また、上ノ段ではこれらの剥片の剥がした石核にいわゆる定形化されたものはみられなく、石核と考えられるものはことごとく、チョッパーないしはチョッピング状のもので必ず自然面を多く残している。これらは石核というよりもむしろチョッパーないしはチョッピングとして使用されたと考えられる。また沼津、愛鷹山麓の第Ⅲスコリア層内の石核には5cm前後のチョッピング状のものがみられるが、それとも細かな点で特徴が異っている。磐田原では沼津、愛鷹の第Ⅲスコリアほどの古さ（27000～28000年前）をもつ石器群は確認されていないようである。従って、上ノ段の例がもしより古い時代の例であるとしても、石器群の組み合わせや定形化された石器のないこと、さらに出土した土層の明確な地質学上の位置付けがなお不明なことなどあって、それらを単純に先土器時代のものであるとも断定はできない。

剥片に限ってみれば、例えば条痕文土器をだした沼津、元野遺跡からはピット内に保存された状態で安山岩製の剥片が100点以上発見されており、それらの個々の剥片は、先土器時代の剥片と区別できない程である。また、距離的にかなり離れるが、東北北部から北海道中央部にみられる見殻文土器群に含まれる剥片は、一点ずつ取り出せば、先土器時代のものとは区別できない程のものである。そしてそれらに見事な石核も伴っており、剥片と石核だけからでは、先土器時代のものとは判断したくなる程のものである。

従って、剥片だけを取りだして、その特徴だけから、それを先土器時代のものであるとは単純には判

断できないであろうと思う。それには伴出する定形化された石器も含めて検討することはもちろんであるが、なによりも発見された土層の地質学上の位置付けが必要となろう。

そういう意味では、仲屋氏が蒐集保管されている。主として上ノ段の剥片類をただちに先土器時代のものであるとはいいきれないものと考えている。

それよりも一緒に発見されたという石鏃類が気にかかる。それらの石鏃の型式学上の特徴をよく検討すれば、縄文時代晩期とされる袋井、大畑遺跡の石鏃と共通するものが多い。あるいは上ノ段は縄文晩期の石鏃製作址であったのかもしれない。

この上ノ段の剥片類については、そういった別の角度からの検討も必要となるように思われる。従って、それを先土器時代の剥片と判断することについては留保しておきたい。

また、中原遺跡から発見されたという黒曜石製の小石刃様の石器についても、それを確実に先土器時代のものであるとはなかなかいいきれないように思う。

ひとつには何年前か、奈良国立文化財研究所の松沢亜生氏に人頭大の原右を半割したものから、ナイフ形石器等約10点の石器を実験的につくっていただいた時の判断がそれに加わっているからである。

その実験では10cm程の長さのナイフ形石器等を10点つくるのに、いわゆる剥片とか碎片とかいわれるものが約22000点つくられ、そのなかのいくつかは、従って何%かはいわゆる小石刃と見違えるほどのものであった。それは松沢氏が意識してそのような形状にした訳ではなく、定形化されたナイフ形石器等を10点つくるのに、原石を打ち欠いた結果、22000点におよぶ剥片類が作出され、そのなかにたまたま小石刃状のものが10点程含まれていたということである。

縄文時代の石鏃をつくる場合にも、時には原石を打ち欠いて剥片として、それを原材として製作したはずである。そうすると小石刃状の剥片がいくつか作出される可能性があることになる。

従って、石核をもたない中原の例もそれだけでただちに先土器時代の小石刃ないしは剥片であるとはいいきれないものであると考えられる。

また、仲屋氏の蒐集品のなかに原里字堂山から発見されたという長さ5.26cmの有舌尖頭器がある。(第4図A)

それは最大幅で2.23cmを計り、均勢のとれた二等辺三角形に舌部をつけたようなプロポーションをしている。そして、石材は安山岩によっているようで、入念に丁寧につくられている。

こうした形状をもつ有舌尖頭器は東北大学におられた芹沢長介氏の分類によれば、Ⅲ類ないしはⅣ類に含まれるはずで、それには、隆線文土器と呼ばれる最古の縄文土器が伴っている場合が多い。従って原里堂山の有舌尖頭器も芹沢氏の分類に従う限り、縄文時代初期のものであり、先土器時代のものであるとはいいきれない。

また、かつて森町考古誌上に紹介された庵ノ下の尖頭器は先土器時代でも最も新しい段階のものである可能性がある。(第4図B)

例えば、沼津、愛鷹山麓では27000年～28000年を数える古い頂からの石器群が、何段階かにわたって確認されているが、現状で最も新しいと考えられる休場遺跡の段階まで尖頭器は余りみられない。休場遺跡の東側に位置する尾上イラウネ遺跡の一つのブロックのなかに尖頭器を含むものが確認できているが休場遺跡との新旧の問題は解決していない。

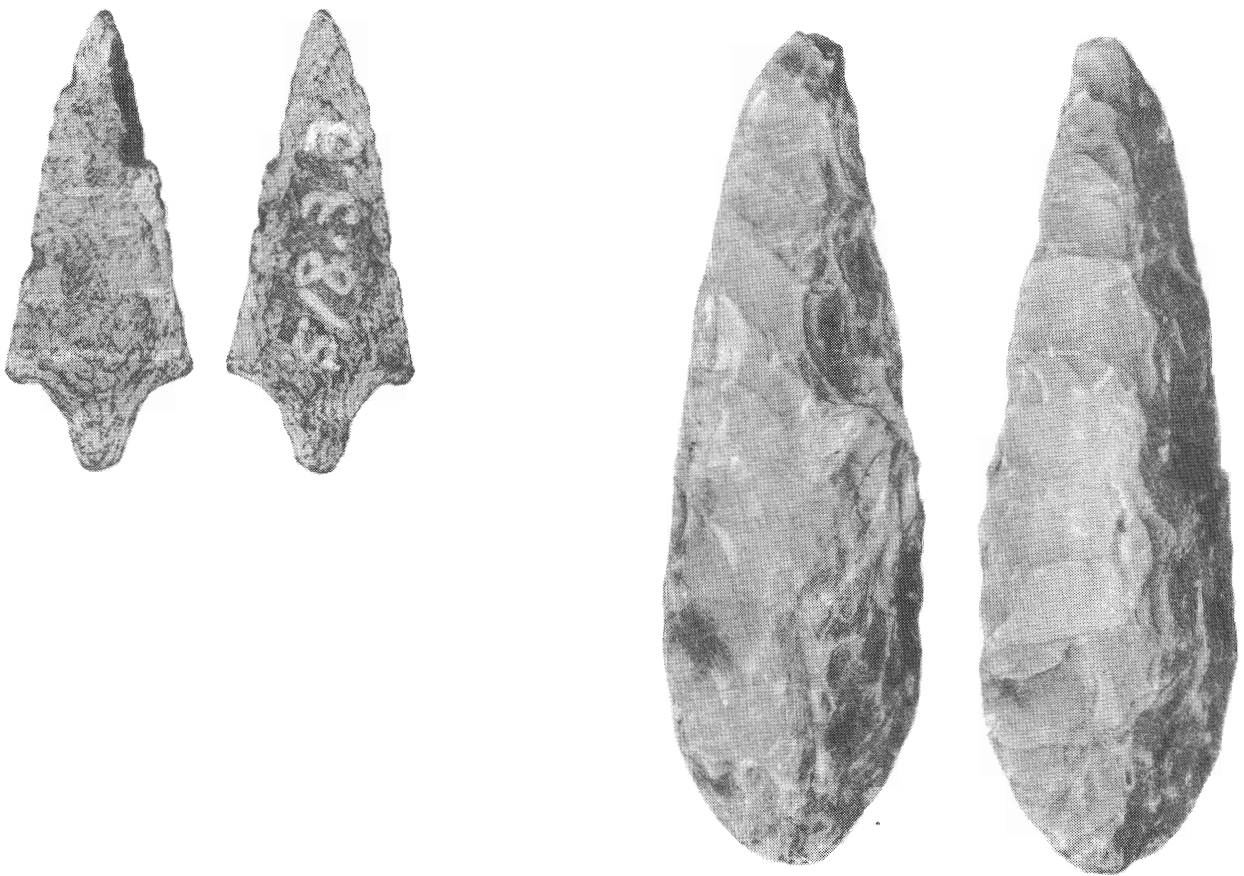
さらに、最近磐田原の勾坂遺跡で尖頭器を含む石器群が確認されているようであるが、具体的時期判断はなされていないようである。

既に森町考古誌上でも指摘されているが、この庵ノ下の尖頭器は、長野県御子柴遺跡や横倉遺跡のように先土器時代の最も新しいものであろうと思う。最近の成果では新潟県田沢遺跡や青森県大平山元遺跡、茨城県後野遺跡では庵ノ下例とよく似た尖頭器がある種の土器と伴に発見されている。但し、それ

らの例では庵ノ下の例とは異って、例えば田沢遺跡の例では尖頭器の下半部が膨んでいて、庵ノ下のものほどスナリはしていない。その違いに重きをおいて、庵ノ下の例を先土器時代終末のものとしておこうと思う。

しかし、先の堂山の有舌尖頭器と同様、本来は土器を持っているはずであるが、庵ノ下ではたまたま土器が発見されていないのかもしれない。もし、そうだとすれば、これも縄文時代初頭のものということになり、掛川市には本来の意味での先土器時代の遺物—遺跡—はみられないということになる。

尖頭器 1 点だけでは細かな判断は不可能である。



第4図 尖頭器 (左・堂山遺跡、右・庵ノ下遺跡)



# 第3章 縄文時代

## 第1節 縄文時代遺跡の分布

掛川市内の縄文時代遺跡は1984年1月現在49遺跡が発見されており、それを第1表及び第5図に示した。

この49遺跡という数は掛川市遺跡地名表（掛川市教育委員会1982、以下掛川地名表と略す）の56遺跡より単純に計算しても7遺跡の減少となる。それに新に加えた7遺跡も含めれば実に14遺跡の減少となるが、それは次の様な理由による。

先ず掛川地名表では小字ごとに別遺跡として取り扱っており、今回はそれをできるだけ訂正し、実数の把握に務めた。又、遺跡の内容が不明確なものも今回は除外し、縄文時代遺跡と断定できるものにとどめた。それには筆者らの採集遺物に縄文期の遺物がないのにもかかわらず、縄文時代とされた遺跡が含まれている。以上の結果、現在の遺跡数は49となった。

又、静岡県遺跡地名表（静岡県教育委員会19、以下県地名表と略す。他の静岡県遺跡地名表もそれに準ずる。）より静岡県遺跡地図に転記する際、範囲・地点等が間違えられたものについても訂正を加えておいた。それが掛川地名表に踏襲されたものについても同様に訂正を加えた。

それに加えて掛川地名表を作成する際に生じた転記ミスと考えられるものについても数は少ないがあるので訂正を加えた。

今回示した49遺跡については、できる限り現地において表採等を行い、範囲を確認するとともに隣接する地点と同一遺跡であるか否かを判断する基準とした。

又、今回の遺跡単位で一遺跡とは遺物散布又は包含が連続するか、もしくはそれが予想されるものをそれとみなした。従って段丘崖や谷等で遺物散布又は包含が中断するものについては別遺跡として分離させた。その逆に慣例的に別遺跡とされてきた遺跡でも、連続するとみなして一遺跡とした場合もある。

遺跡名はできる限り掛川地名表に近づけるように努力したが、一部の遺跡は従来の名称を復活させた。今回は公図との照合は時間の余裕がなく行わず、掛川地名表を信頼し、それに準じた。

このように縄文時代遺跡は49となったが、現在でも一部に未踏査の地域を残している。例えば小笠山麓や垂木川・原野谷川上流部、掛川市東端の牧ノ原台地の一部等があり、この49遺跡という数がかかなり増加する可能性もある。事実、掛川市の面積は186.15 km<sup>2</sup>からしてもこの数は少なく、今後の開発には充分の注意がはらわれることを希望したい。ちなみに東南に隣接する菊川町（面積63.50 km<sup>2</sup>）では縄文時代遺跡が現在58遺跡確認されている。

掛川市における縄文時代遺跡の分布は次の5地区に集中しており、それぞれが独立した領域をなすと考えられる。

### A 上内田遺跡群

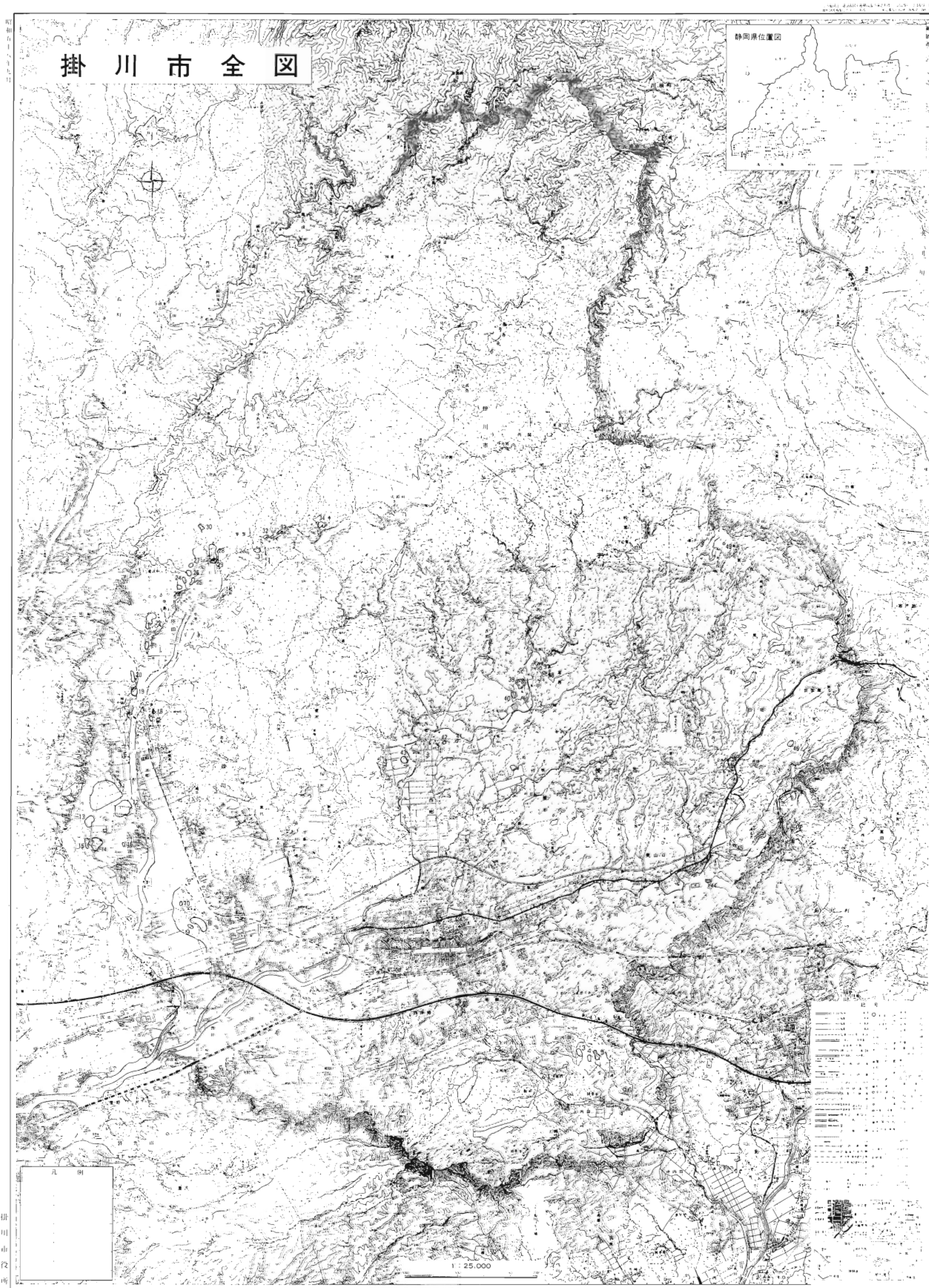
当群は菊川平野の西側に位置しており、水系からは菊川流域に含まれる地域である。

上内田地区の遺跡は静岡県史第1巻（静岡県1930、文献1）等に一部の遺跡が紹介されているが、県地名表では何故か全く遺跡のない地域となっている。この地域には発掘調査された遺跡（和田横穴群）も存在する。

当群には6遺跡が含まれるが、その数は少なく、隣接する菊川町中内田・下内田地区の各遺跡（例えば東平尾、段平尾等の遺跡）も当群に含めて考える必要があろう。

遺跡の規模については各遺跡とも小さく、遺物の出土量も少ない。





第 5 図 縄文時代の遺跡分布図

当群中最も古い遺物を出土している遺跡は五百済遺跡であり、縄文早期押型文土器が出土している。又、縄文期として最も新しい遺物を出土しているのも同遺跡であり、当群中あえて中核遺跡をあげれば五百済遺跡ということになる。

時期の判明している他の遺跡はその全てが縄文中期であり、その後葉に集中している。その時期に遺跡が急増するという傾向は周辺地域でも一般的な現象であり、急激な人口増加を意味する可能性が強い。

当群の各遺跡とも前述の様に小規模である。

### **B 原野谷川流域南遺跡群**

原野谷川の中・下流域の各遺跡を当群とする。主要遺跡は原野谷川右岸の通称和田岡台地と呼ばれる河岸段丘群に集中する。その他に岡津原、安里山等の小規模な遺跡が同左岸の河岸段丘上に散在している。

当群は遺跡数が多く、一部が袋井市内にまで及んでいる。（「袋井市史通史編 第二編一原始時代の袋井」吉岡伸夫 1982 文献2）

縄文早期の遺跡としては瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡や向山遺跡があり、押型文土器や繊維を含む条痕文土器が少量出土している。又、文献2の袋井市陣屋北遺跡からも繊維を含む土器が1片出土しており、縄文早期の土器と考えられる。これらは早期中葉より後葉にかけての小遺跡であり、短期間のキャンプサイトと考えられる。

縄文前期の遺跡としては前述の陣屋北遺跡があるが、他に縄文前期の土器を出土した遺跡はない。

（遠江考古学研究会「静岡カントリークラブ袋井ゴルフ場建設工事への提言」文献3）この陣屋北遺跡からは北白川下層ⅡC式土器に近似したものが数片出土している。当地方の縄文前期後葉では関西系土器が主体を占め、関東系土器が客体として伴出する。遠江地方では縄文前期の遺跡は少なく、早期の遺跡と比較してもその数は著しく少ない。しかもその大半は後葉に属するものであり、前・中葉の遺跡は御前崎町星の糞遺跡を除けば全くその存在が確認された遺跡はない。

中期には急激に遺跡が増加する。その前葉では中原・下ノ段等から土器片が出土しており、その総量が多いが集中する遺跡はなく、移動性の強い時期と考えられる。但し遠江地方では当期の集落と考えられる遺跡が各地にあり、今後当群の中でも確認される可能性が強い。特に中原遺跡はこれに続く中葉は初め頃の生居址が確認されており、その可能性が強い。

当群中、中核となる遺跡は中期前・中葉においてはこの中原遺跡と考えられる。中期中葉の遺物は中原遺跡から比較的まとまった量が出土している他は下ノ段、和田岡原、岡津Ⅲ等からごく少量の遺物が出土しているにすぎない。

中期後葉では集落と考えられる遺跡が増加する。ことに関東地方の土器編年という加曾利EⅡ期以降に遺跡数が急激に増し、当群の大半の遺跡から該期の土器が出土している。その中で中核となる遺跡は中原・瀬戸山・下ノ段等の和田岡遺跡群が考えられる。

後期前葉では遺跡数が急減し、遺跡数・遺物量とも極少なくなる。中期後葉の集落と考えられる下ノ段・岡津原Ⅰ等の遺跡から称名寺式土器や堀ノ内Ⅰ式土器がわずかに数点以降では更にその傾向は強くなり、当群では遺跡が皆無に近い状態となる。わずかに幡鎌Ⅰ遺跡がその可能性を持つ遺跡であるが、遺跡の規模も小さく、出土遺物の量も少ない。

### **C 原野谷川流域北群**

原野谷川上流の各遺跡を当群とする。主要遺跡は原野谷川と西ノ谷川の合流点北側の河岸段丘上に集中する。当群は遺跡数が多く、原野谷川流域南遺跡群と並んで市内最大の縄文時代遺跡群と考えられる。

早期の遺跡としては萩ノ段遺跡があり、押型文土器が出土している。

前期の遺物としては平遺跡や萩ノ段遺跡で諸磯B式土器と考えられるものや十三菩提式土器が各1点

出土しているに過ぎない。又、萩ノ段遺跡で粗雑な造りであるが玦状耳飾りが1点出土しており、前期後葉に属するものかもしれない。

中期前葉では各遺跡から少量の土器片が出土している程度である。その中萩ノ段遺跡では五領ケ台系土器とともに鷹島式土器が出土しており、当期の土器の量も他の遺跡に比較すればやや多い。中期中葉でも前葉と同様に遺物量は多くなく、まとまった量の土器を出土した遺跡はない。中期後葉では急激に遺跡数、規模ともに増大する。上ノ段遺跡はその中でも最大の遺跡であり、縄文中期の遺跡としては遠江地方でも屈指の遺跡と言えよう。遺物の量も豊富で大型石棒や石皿等の大型石器も多く、鯉節型大珠を含む玉類等が出土している。その他の遺跡でも当期の遺物は多く、中期後葉が当群では最も繁栄した時期と言えよう。

後期前葉では前述の上ノ段遺跡で継続して集落が営まれているが、他の遺跡ではこの時期をもって終結している遺跡が多い。上ノ段遺跡は後期中葉以降より晩期に至るまで存続していく。又、平Ⅲ遺跡、鳥淵遺跡等も後期中葉以降の小規模な遺跡と考えられる。

当地域も縄文時代遺跡＝茶畑の公式が成り立つ地域である。

#### **D 倉真川流域遺跡群**

倉真川流域の各遺跡を当群とする。いずれも倉真川によって形成された段丘上に位置しており、里在家遺跡を除けば小遺跡が多い。

里在家遺跡は後・晩期の遺跡としては市内で最も規模の大きな遺跡であり、多数の石器を出土している。特に石鏃が多く、掛川市内では上ノ段遺跡と並ぶ量が採集されている。土器は後期前葉のものが少量あるだけであるが、石鏃の量やその他の石器から見ればそれより少し下の時期に繁栄した遺跡と考えられる。遠江地方では後期後葉より晩期前葉に至る遺跡より石鏃が多量に出土しており、当遺跡もその頃の遺跡と考えられる。

その也の遺跡では牛丸西谷田遺跡が中期とされているが、残る遺跡は時期の明確なものはない。

当地域の山間部は未踏査地区が多く、河岸段丘の発達している所もみられるので今後新遺跡の発見される可能性が高い。

#### **E 逆川上流域遺跡群**

掛川市の東端、金谷町との境に近い地域に分布する各遺跡を当群とする。

最近になって発見された夜泣松神社・自津倉等の遺跡(46～49)はいずれも標高160～270m程の上位段丘上に位置している。現在のところそれらの遺跡からは時期を示すほどの資料は出土していない。

それに対して、従来より知られている影森遺跡や狐鼻遺跡は標高50m程の低位段丘上に位置している。この中、影森遺跡は縄文晩期の遺跡と考えられ、石剣・玉類等が出土しているという。又、狐鼻遺跡からは縄文中期中葉の土器が少量出土している。当地域は未踏査地区が多く、今後遺跡数が増加する可能性が強い。

以上、各遺跡群について述べてきたが、各遺跡とも内容の把握が充分行われておらず、今後の研究の進展に期待したい。

(加藤賢二)

## **第二節 主要遺跡の概説**

当節では第一節で述べた遺跡群のうち主要遺跡及びその出土遺物を概説することとする。図示した土器はいずれも表採資料であり、小破片が多い上に器面保存が悪いものが多い為に所蔵遺物の極一部を紹介できたに過ぎない。又、できるだけ絵になるものを選択した為、底部や無文部破片は図示しなかった。

分類できなかった資料も省略した。石器については一部を写真図版で紹介したが、残る大半は文中で種別・量等を述べるにとどめた。

当稿で図示した遺物のうち上ノ段・萩ノ段の各遺跡出土の資料は仲屋栄一氏所蔵遺物であり、残る資料は加藤の所蔵遺物である。

尚、土器型式名を用いると文章が煩雑になるので使用頻度の高い縄文中～後期の土器については次の様に分類し、それを文中に用いた。

## 中 期

- I 群 前葉（五領ケ台期）の土器を当群とする。
  - a 類 五領ケ台Ⅰ式に併行する東海系土器
  - b 類 北裏CⅠ式類似の土器
  - c 類 五領ケ台Ⅱ式土器
  - d 類 鷹島式土器
  - e 類 鷹島式直後の土器。五領ケ台Ⅱ式併行と考えられる。
- II 群 中葉（勝坂期）の土器
  - a 類 阿玉台Ⅰ・Ⅱ式土器
  - b 類 大畑CⅡ式土器
  - c 類 船元Ⅱ式土器
  - d 類 大畑CⅡ式に後続する土器（北屋敷式の祖形を含む）
  - e 類 勝坂式土器
  - f 類 北屋敷式土器
- III 群 後葉（加曾利E期）の土器
  - a 類 曾利Ⅰ・Ⅱ式土器
  - b 類 曾利Ⅲ式土器
  - c 類 曾利Ⅳ・Ⅴ式土器に類似する県東部の土器
  - d 類 加曾利EⅡ式土器
  - e 類 加曾利EⅡ式土器の影響を強く残しながら曾利式の要素等を含んだ土着の土器。加曾利EⅢ式に併行する土器と考えられる。
  - f 類 かつて広野C式と呼ばれた結節縄文を特徴とする土器。
  - g 類 里木Ⅱ式に近似した土器
  - h 類 里木Ⅱ式の撚糸文が櫛描文に置き換えられた土器。里木Ⅲ式の一部に近似する。
  - i 類 咲畑式土器に後続する土器
  - j 類 加曾利EⅢ・Ⅳ式類似の土器

## 後期

- I 群 前葉（称名寺式～堀ノ内Ⅱ期）の土器
  - a 類 称名寺式土器
  - b 類 堀ノ内Ⅰ式土器
  - c 類 堀ノ内Ⅱ式土器
- II 群 中葉（加曾利B期）の土器
  - a 類 加曾利BⅠ・Ⅱ式土器
  - b 類 元住吉山Ⅰ式土器

c類 蜷塚式土器

Ⅲ群 後葉（安行期）の土器

a類 宮滝式及び寺津下層式土器

b類 上ノ段式土器

1. 五百済（ようずみ）遺跡 五百済

当遺跡は1980年頃に隣接する王子・平郷・板沢山の各遺跡とともに筆者が確認した遺跡である。遺跡は五百済川によって形成された中位の河岸段丘上に立地している。西に隣接する王子遺跡も同じ段丘面を利用しており、同じ遺跡とすべきかもしれないが両遺跡の範囲が連続していない為、別遺跡として取り扱うことにする。

現在遺跡周辺は、一部がみかん畑となっている他は茶畑となっており、その改植に伴う作業により遺跡の約半午程度がすでに破壊されていると考えられる。その際に今回紹介する資料等を採集したが、遺物の散布は東半では比較的密であるが西半では薄い。

採集土器の大半は縄文中期後葉に属するものであるが、その他に縄文早期・中期前葉・晩期前葉あるいは中葉等があり、土器初頭（五領期）のものもある。

1-1は格子目の押型文土器である。

1-2は節の太い縄文を施文した土器であり、周辺遺跡の例から押型文土器に伴出するものと考えられる。いずれも繊維の混入はないように思われる。この他に図示はしなかったが山形押型文土器の破片1点がある。

1-3は鷹島式土器の口縁部破片であり、口唇及び内面にも施文がみられる。

1-4は3に類似するが、縄文の節が細く、連続爪形文を加えた隆起線もやや高いのでそれに後続する土器ではなかろうか。

1-5は波状口縁をなす土器で、内面に蓋受状の張り出しを有する。

1-6も蓋受状の張り出しを有する土器である。この様な蓋受状の張り出しを有する土器は中東遠ではかなり類例が増加しており、各種の変化がある。時期的にも関東地方の加曾利EⅢ式併行期より始まって後期初頭にまで下ると考えられるものもある。当遺跡の5は施文より考えれば中期後葉に位置付けられると考えられるが、6はあるいは後期のものかもしれない。

1-7～10は細い櫛状あるいは半截竹管様施文具による細条線を地文とし、半截竹管による連弧文を加えたものであり、中期Ⅲ群h類土器である。

1-9及び10については半截竹管による刺突を加えたものであり、同一個体と考えられる。

1-11は口唇の上端を削り、平坦にした無文土器で縄文晩期の粗製土器と考えられる。

石器は数量的にも少なく、石鏃・打製石斧・横型石匙・磨石・礫器等があるだけである。

2. 王子（おおじ）遺跡

前述のように五百済遺跡に西側に隣接した遺跡である。当遺跡も農道以外はほぼ100%茶畑の為、その改植に伴う破壊が著しい。当遺跡は主に土師初頭の遺跡であり、縄文時代遺物の散布は段丘の東縁沿いの南北に細長い範囲に限られている。

採集した縄文時代遺物は20片余りの土器と石鏃・打製石斧のみであり、この中4点の土器を図示する。2-1～2は同一個体であり、中期Ⅲ群g類に含まれるもので地文のRの撚糸文の上に半截竹管により連弧文を主体とする文様を加えたものである。

2-3はそれに後続する同Ⅲ群h類土器で斜位の細い条線を地文とし、細い丸棒様な施文具による沈線と刺突文が加えられている。

2—4は加曾利EⅡ式土器かそれに続く土器の胴部破片である。

この他に嶺田式土器の壺胴下半の破片1点がある。

尚、当遺跡は五領期の集落であり、段丘上の広い地域に遺物散布がみられ、北端に近い地点ではその時期と考えられる焼土が茶園改植の際にみとめられた。

### 3. 岡津原（おかつはら）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡 岡津

掛川地名表では岡津原Ⅰ（段丘中段）が同Ⅱ、岡津原Ⅱ（段丘下段）が同Ⅲ、岡津原Ⅲが同Ⅰとされているが、岡津原Ⅰ・Ⅱについては既に県地名表でそれが用いられているのでそれに従い、岡津原の段丘最上段を岡津原Ⅲとして加えることにする。蛇足ながら既成の遺跡名を何故変更するのか筆者には理解できない。新たな混乱をわざわざ引き起こす必要があるとも思えないし、遺跡の名称自体が歴史遺産と考えられるので変更する必要のあるものを除き、その変更は最小限にとどめるべきであろう。

岡津原Ⅰ遺跡は県地名表によれば縄文後期の遺跡とされているが、筆者らの採集土器は同中期後葉のものが大半を占め、それに少量の後期前葉の土器が加わる程度である。\*1

3—1は縄文を地文とし、沈線に施文が加えられている。中期Ⅲ群d類である。

3—2は口縁部文様帯が消失しており、中期Ⅲ群d類と考えられる。

3—3～5は後期前葉の土器であり、堀ノ内Ⅰ式土器と考えられる。

石器としては打製石斧・礫石錘・切目石錘等を採集している。

岡津原Ⅱ遺跡は県地名表によれば弥生後期の遺跡とされているが、筆者らの採集遺物の中には縄文中期後葉の土器が数十点ある。それらは茶園改植に伴う天地返しが行なわれた際狭い範囲より採集したものであり、焼土を伴ったもので縄文中期後葉の住居址に伴う一括資料の可能性が高い。事実時期的にも異なると考えられるものは含まれていない。

3—6～7は加曾利EⅡ式土器に併行する土着的な土器（中期Ⅲ群e類）と考えられる。

石器には打製石斧・礫石錘各1点がある。

岡津原Ⅲ遺跡は弥生中期を主体とする遺跡であるが、わずか1点のみ縄文中期中葉の土器（3—8）がある。中期中葉でも比較的古い時期の所産と考えられるものであり、後述の中原遺跡群で多量に出土しているものである。中期Ⅱ群a類と考えられる。この岡津原Ⅲ遺跡からは打製石斧や剥片も出土しているので、今後縄文時代遺物が増加する可能性も強い。

\*1「森町考古17—磐田群豊田町広野遺跡—広野遺跡採集の縄文土器」の中で大橋保夫氏が「第Ⅱ群A類について」としてその分布する遺跡を紹介している。その中に「8岡津」として仲屋栄一氏採集の土器3点を図示している。これは当遺跡より採集されたものと思われる。又、「加藤君の採集品には早期の資料も含まれている」との記述があるが、筆者の資料には早期の遺物はないので訂正しておく。

### 4. 中原遺跡 (高田)

吉岡大塚のある段丘面は俗称上ノ段と呼ばれている。掛川地名表では東原・溝口・中原・高田上ノ段等の遺跡名で呼ばれているが、いずれも遺跡の境界線が接しており、同一遺跡として取り扱うべきものと考えられる。ここではそれらを総称して中原遺跡として取り扱うことにする。

遺跡面積は20万㎡を越すと考えられ、掛川市の縄文時代遺跡中最大の遺跡と考えられる。その中でも遺物散布の濃い地点が4地点あり、それぞれ時期を異にしている。

#### a地点 大塚古墳西側

発掘調査された地点であり、中期前葉より中葉にかけての遺物を多量に出土している。面積は比較的狭く、100m×100m程度の広さである。採集した土器の量は比較的多いが、それに比較して石器の量は少ない。



#### b地点 大塚古墳北側

大塚古墳の北に広がる地点であり、a地点の北側に位置している。a地点との間には遺物の散布量の少ない地域がある。又、後述のc地点の東端と当地点の北端が接しており、一部重複する地域がある。面積は150 m × 150 mとa地点の倍以上の広さである。遺物量はa・c地点のそれと比較すると少ない。時期は中期中葉の後半より後葉の始め頃の短期間に限られている。特に中葉後半の土器が多い。石器は打製石斧を除けば少ない。尚、1点だけであるが石皿がある。弥生時代以降の遺物は全く出土しない。

#### c地点

b地点の北西に位置する地点である。面積は200 m × 200 mと広い。出土遺物の量は多く、その中の石器も多い。土器は中期前葉及び後葉のものが多く、同中葉はほぼ皆無に等しい。弥生時代以降の遺物は全く出土しない。

#### d地点 上ノ段

中原遺跡の東端に位置する地点である。面積は150 m × 150 m程度と考えられる。土器の中には中期I群a類と後期I群b類が含まれているが、その主体は中期III群土器である。弥生後期及び土師初頭の集落の一部と重複する。

前述の第一次発掘に続き第二次発掘が今年度実施され、中期中葉の住居址が発見されている。それらについては調査者の報告に待つとして、今回は第一次の概報及び筆者らの採集遺見を中心に述べてみたい。尚調査地点は中原遺跡の南端に位置し、北に広く散布地が広がっている。

#### 遺物

出土土器は数量的に掛川市内で最も多く、上ノ段遺跡のそれをしのぐ量である。それを分類すると次の4群に分類できる。

#### 中期

第I群 中期前葉の土器を当群とする。

##### a類 (4-1)

4-1はd地点より採集したもので波状口縁頂部の把手と考えられるものである。

##### b類 (4-2 ~ 17・52~60)

北裏C I式土器に近似するものを当類とする。後述の第II群b類と区別の出来ないものもみられるが、次の様な基準で分類した。

口唇及び口縁に施される連続爪形文は幅が狭く、間隔が密なものは当類に含め、幅が広く、間隔が粗のものは第II群b類に含めた。尚 の如く連続爪形文は密でも連続爪形文の各条の間にその他の刺突文が加えられるものがあり、それは第II群b類とした。

次に隆起線の形状であるが、当類では半月状の断面を持ち、幅が狭いものが多いのに対し、第II群b類では幅広で低いものも多く、幅が狭いものでは断面が半月状とならず、下に垂れ気味なものが多い。

又、三角形の刺突文は当類では顕著であるが、第II群b類ではそれが簡略化され、線状の刺突となるものが多い。

縄文は当類では磨り消し縄文として半截竹管の区画内に施される場合が多い。

#### c類

五領ケ台II式土器を当類とする。数量的には少なく、いずれも小片のみで、今回は図示しなかった。尚、「中原遺跡発掘調査概報」において第11図5を調査者は当類に含めているが、筆者はむしろ第II群a類に含めるべきものと考えている。

第II群 中期中葉の土器を当群とする。次の類に分類する。

##### a類 (4-18~29・63~67)

阿玉台Ⅰ式土器あるいは神谷原遺跡で第Ⅱ群土器として分類されたものに酷似する土器を当類とする。胎土に雲母を比較的多く含み、在地の土器とはかなり異質な土器であり、この種の土器が多く分布する静岡県東部以東の地域よりの移入ではないかと考えられる。\*1

数量的にはⅡ群b類に次いで多い。

b類(4-30~38・61・62・68~74)

特徴については第Ⅰ群b類の項ではぼ述べてきたので省略するが、第Ⅰ群b類の系譜を引きそれに後続すると考えられるものを当類とする。当期において主体を占め、前・後述の第Ⅱ群a類及びc類を客体として伴出すると考えられる。

c類(4-39~48、75~77)

船元Ⅱ式土器の一部に該当すると考えられるものを当類とする。粗い縄文を地文とし刻みを加えた隆起線、あるいは爪形文・円文等を施文している。第Ⅱ群a類同様移入土器と考えられるが、主体分布圏の在り方より推察すれば三重県以西より搬入されたものと考えられる。

d類(4-49・50・51・78)

第Ⅱ群b類の系譜を引くと考えられるもので、現在断定し得るものは少ないが、第Ⅱ群b類より爪形文が消失し、半截竹管による平行線文を主に施文した土器がみられる。この平行線文の末尾を4-51のように連結するのがこの当類のメルクマールとなるように考えられる。

又、北屋敷式土器の祖形とも考えられるものもあり、当類に含めておく。

e類(4-79~101・106)

勝坂式土器を当類とする。当期の主体を占める土器である。第一次発掘区の北端寄りからその北側の比較的狭い範囲に当類の分布が認められた。

f類(4-102~105)

北屋敷式土器を当類とする。数量的にはあまり多くない。

### 第Ⅲ群

当群の土器は主にc地点d地点より採集したものであるが、その他のa・b地点でもわずかながら散布が認められる。又、a~d地点以外に極小規模なものが各所にあり、全体の土器の総量は多い。

a・b類(4-113)

c地点より少量出土しているが図示しなかったものが多い。

c類(4-107・112)

やはりc地点より少量出土している。

d類(4-108~110)

c地点より集中的に出土している。

e類(4-111・114~116)

d類と同様にc地点に多く、d地点にもある。

f類

c地点及びd地点より少量出土しているが図示しなかった。

h類(4-117~119)

各地で少量出土している。4-117・118は中原遺跡の西端より採集したものである。

i類(4-120~122)

c地点より胴部の連弧文の破片が数点出土している。

後 期

第Ⅰ群

b類(4-123・124)

d地点より採集した土器の中にわずか2点の口縁部破片があるだけである。

当遺跡は掛川市内最大の縄文時代遺跡である。

#### 5. 下ノ段遺跡 吉岡下ノ段

春林院古墳の所在する段丘面は下ノ段と呼ばれ、多数の地点で縄文時代以降の遺物が採集されている。

図に示した通り、遺跡の範囲は広いが、縄文期の遺物は段丘の東縁部に多く、b地点(後述)を除きその他の地点では散布量が少ない。筆者がかって庵ノ下遺跡(a地点後述)と呼んだ地点も当遺跡の南東端にあたる地点である。

尚、春林院古墳の周辺部では縄文・弥生の遺物が出土しない地域があるが、春林院古墳を築く際にその周辺の土を削り取り、盛土として用いた為と考えられる。実際に春林院古墳の墳丘から筆者は縄文期の遺物を採集している。

##### a地点

庵ノ下遺跡とかって呼んだ地点である。下ノ段遺跡の東南端に近いところで比較的縄文時代遺物が集中的に出土する。

土器には中期Ⅰ群より後期Ⅰ群の土器がみられ、当遺跡中最も年代幅が広い地点である。石器も比較的多く採集されている。

かって真黒坂と呼ばれる地点より縄文土器等が採集されたことになっているが、当地点の可能性が高い。

弥生後期及び土師初頭の集落址と考えられ、該期の遺物が多い。

##### b地点

春林院古墳の北側に続く地点である。当地点では農道が段丘の東縁沿いにはほぼ南北に走っているが、縄文時代遺物はその農道沿いより東側に多く、西に行くに従い少なくなる。出土土器には中期Ⅲ群土器が多い。

当地点も弥生後期より土師初頭の土器が大量に出土しており、該期の大集落の可能性が高い。

##### c地点

大塚古墳の東南に位置する径10mほどの小地点で、段丘崖の直下に位置している。

当地点では100点程の縄文土器及び少量の石器を採集した。土器のほとんどは中期Ⅲ群e類と考えられ、該期の住居址の可能性が高い。その他に畑一枚を隔てた地点で中期Ⅰ群b類を1片採集しており、その周辺で五領期と考えられる壺形土器1点を採集している。

当地点では弥生後期以降の遺物はその壺形土器しかなく、その時期の墓域と考えられる。

遺物

中期

第Ⅰ群

b類(5-1)

北裏cⅠ式土器に近似する土器が数点採集されている。

第Ⅱ群

e類(5-2・3)

深鉢の胴部と浅鉢の口縁部が各1点a地点より出土している。

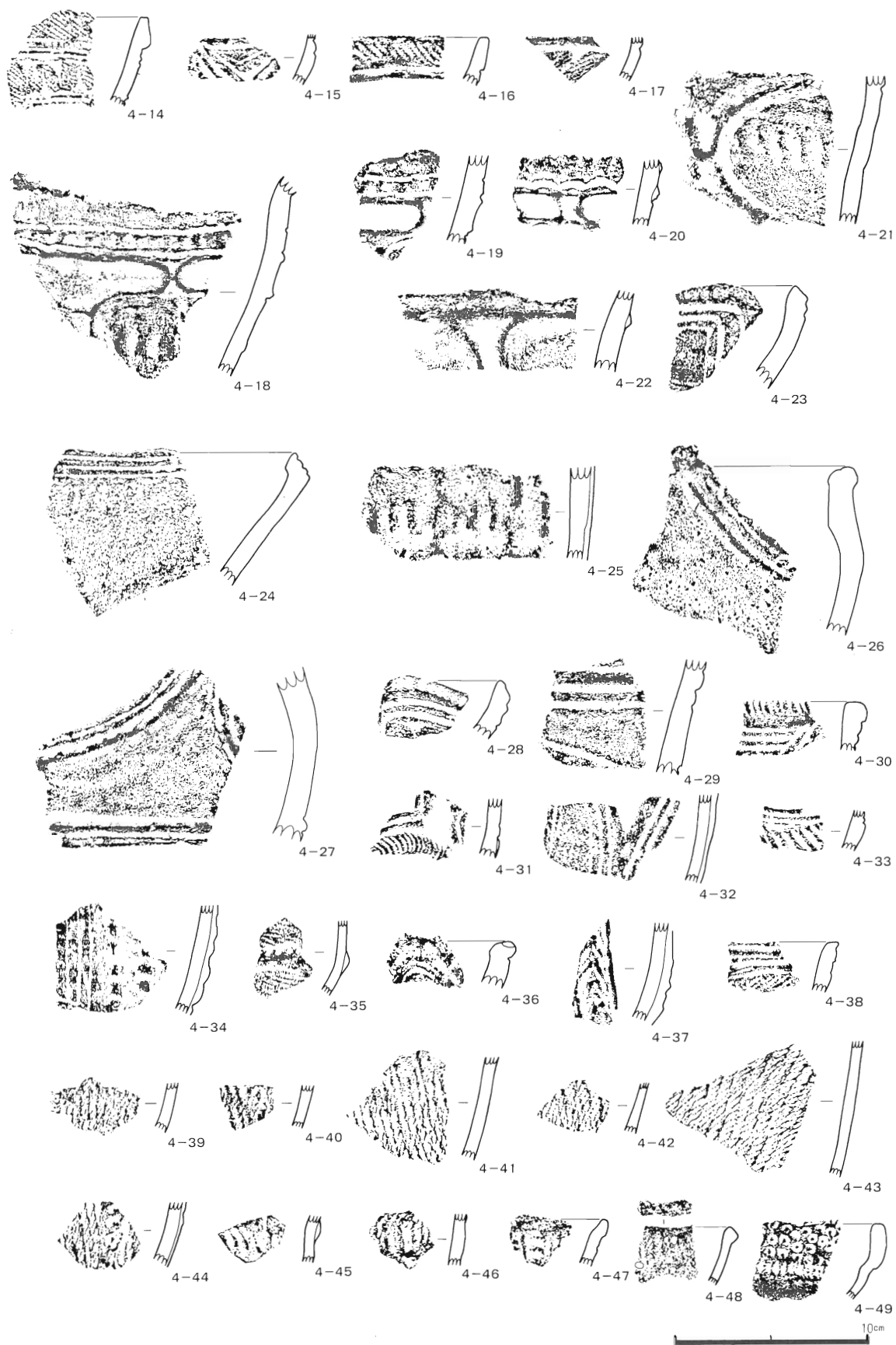
f類(5-4・5)

a地点とb地点で各1点出土している。

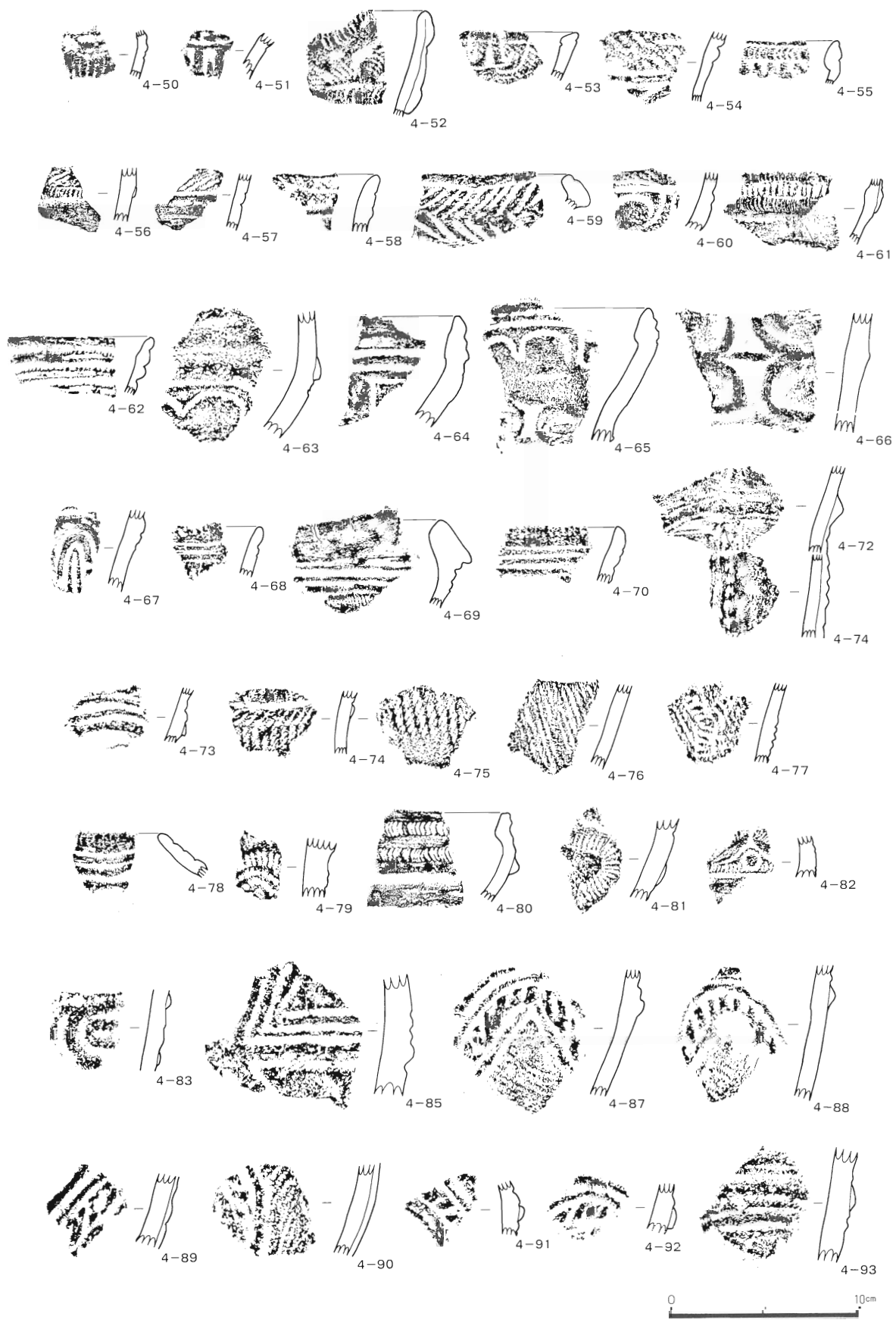
第Ⅲ群 下の段遺跡の縄文土器のほとんどが当群に含まれる土器である。



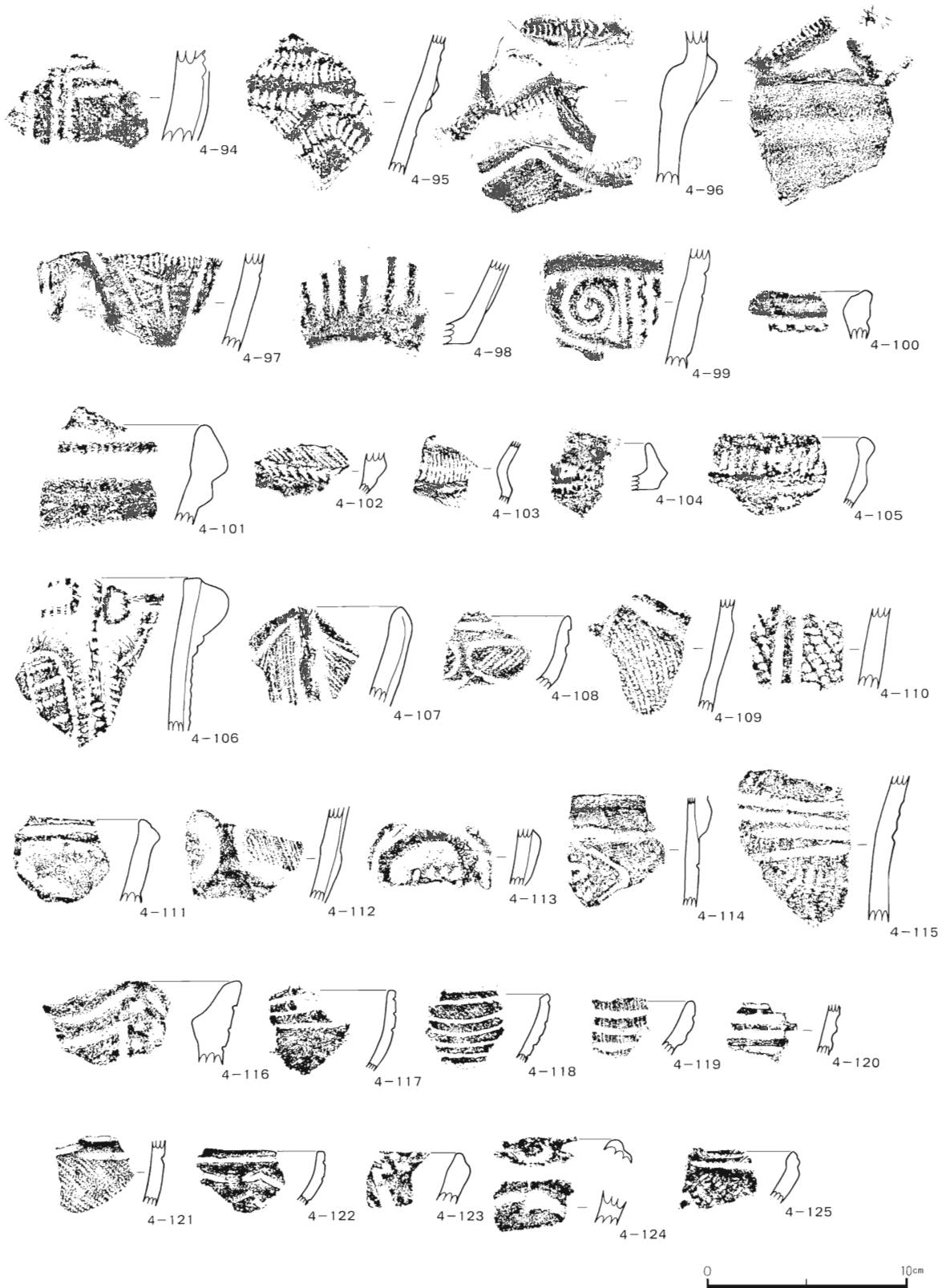
第 6 図 縄文時代土器拓影図(1)



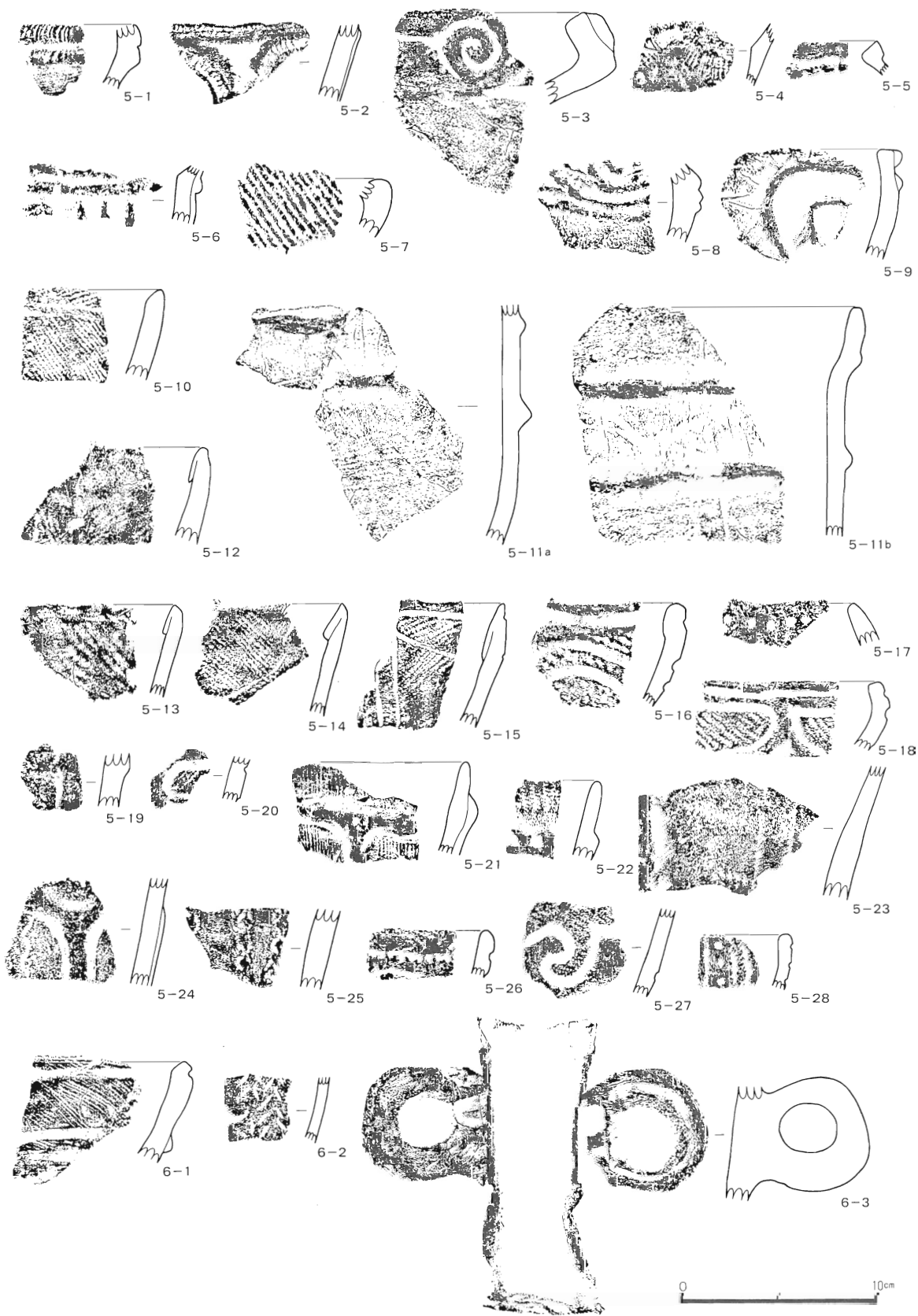
第7図 縄文時代土器拓影図(2)



第 8 図 縄文時代土器拓影図(3)



第9図 縄文時代土器拓影図(4)



第10図 縄文時代土器拓影図(5)



a類(5-6~8)

曾利Ⅱ式土器と考えられるものが数点あり、うち3点を図示した。

d類(5-9)

加曾利EⅡ式土器に近似したものが少量出土している。

e類(5-10~23)

5-10は口縁部文様帯を欠くので当類に含めた。5-11 a・bは当遺跡の東北端に近い地点より採集したもので、焼土塊中に混在して散布していたので埋甕炉として利用したものと考えられる。同一個体で図示していないものに橋状把手が離脱したものがあるので、口縁部の2条の隆起線は把手により連結していたと考えられる。この土器が第Ⅲ群のどの類に属するか明確ではないが、周辺より採集した土器が当類に限られるのでこれに含めた。

5-12~15はc地点より採集したもので、いずれも口縁内面に折り返しの段を有する。

f類(5-24・25)

庵ノ下地点を主に数点を採集している。

h類(5-26)

春林院古墳の墳丘より採集したものである。

中期

第Ⅰ群

a類(5-27)

a地点より1点採集している。

b類(5-28)

a地点より1点採集している。

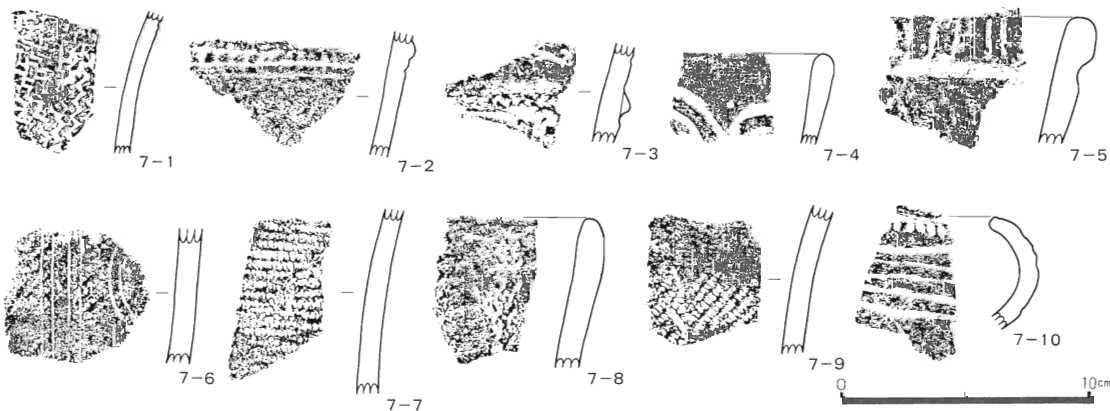
下ノ段遺跡も一面が茶畑となっている。

当遺跡は弥生後期より土師初頭の大集落であると共に縄文時代の遺跡としても貴重な存在である。

### 6. 瀬戸山(せどやま)Ⅰ・Ⅱ遺跡

瀬戸山遺跡は大塚古墳のある段丘面の南端に位置しており、浸食谷の東側を瀬戸山Ⅰ遺跡、同じく西側を瀬戸山Ⅱ遺跡と呼ぶことにする。

この周辺は弥生後期より土師初頭にかけての大集落であり、段丘先端部より県道掛川山梨線の近くにまでその時期の遺物の散布がみられる。又、弥生中期の集落址でもあり、瀬戸山Ⅱ遺跡を中心としてそ



第11図 縄文時代土器拓影図(6)

の時期の遺物の散布が認められる。

縄文期の遺物は瀬戸山Ⅰ遺跡の中央部と瀬戸山Ⅱ遺跡の中央部より北側にかけての地域に散布が認められる。

この他に周辺では和田岡原遺跡より縄文中期中葉と同後葉の土器片を採集しており、今後遺跡数が増加する可能性も強い。

#### 遺物

遺物は縄文中期第Ⅲ群土器100片余りと打石斧・乳棒状石斧各1点がある。

6-1・2はいずれも第Ⅲ群c類と考えられる。その他に把手部等もある。

#### 7. 萩ノ段遺跡 寺島

当遺跡は1977年1月掛川市教育委員会によって発掘調査がなされている。（「萩ノ段遺跡調査概報」1977文献4）

（加藤）

次に仲屋栄一氏所蔵資料を見てみると、断続的ではないが、萩ノ段遺跡はほぼ縄文時代早期中葉から中期末葉にかけて長く居住された遺跡であることがわかる。（第11図参照）

早期の資料として7-1があげられるが、これは胎土暗褐色、石英・金雲母粒を含む山形押型文土器片である。時期としては、掛川市教育委員会が発掘調査によって得た時期と同時期のものであろう。

つづいて前期後半の資料として7-2がある。竹管状工具内皮面使用による爪形が文様を構成するものであり、諸磯式土器においても末葉に近いものである。胎土は極めて特徴的であり、砂質性が非常に高く器面全体が非常にザラザラしている土器片である。

次に中期中葉期に入ると西域の土器が観られる。7-3は、器面に半截竹管状工具による押引沈線文、隆帯上に同一工具による刺突が施される。胎土は黄褐色を呈し、長石粒を含有する。これらの特徴から船元Ⅱ式縄文時代中期Ⅱ群c類に属するものである（以下分類表現は、前掲の分類表（P21）に従う。）

中期後葉の土器群としては、7-4～10が掲げられる。このうち4～6は中期Ⅲ群e類に属する土器で関東の加曾利E式の影響を強く受け曾利式の要素をもつ土器群である。7～9は、中期Ⅲ群f類に属する土器である。本類の土器群の特徴は結節縄文の施文にあるが、8のように縄文地が磨消されるものもある。10は、中期Ⅲ群h類に属する土器で、外唇部に半截竹管状工具により刺突（刺圧）が施され、口縁部には同一と思われる工具外皮面により浅い沈線文が施される。胎土は、黄褐色を呈し石部・長石粒を含むものである。

以上概観したものは、表採した資料のうちの極く一部であり、時期毎の比率もそれに合せたものではない。したがってストレートに萩ノ段遺跡を表現し得たものではない。しかし萩ノ段遺跡が、早期中葉以降中期後葉にかけて営まれた集落遺跡であることがわかる。

この萩ノ段遺跡は、原野谷川が右岸に形成した河岸段丘上に占有する遺跡で、周辺部は舌状に突出した地形を成している。また遺跡の北東部には、縄文時代の大遺跡である上ノ段遺跡が西之谷川を挟んで位置している。次に掲げる上ノ段遺跡は、縄文時代中期後葉から後、晩期に最盛期をむかえる遺跡で、この萩ノ段遺跡の最盛期が中期中葉から後葉期であることを考え合せると、両遺跡間での移動がうかがわれる。

#### 8. 上ノ段遺跡

上ノ段遺跡は、原野谷川と西ノ谷川が合流する辺に位置し、南に広がる舌状の河岸段丘上に占地する遺跡である。西ノ谷川を間に挟んで対岸段丘上には、前掲の萩ノ段遺跡が存在している。

現在遺跡周辺には、市立原田小学校、市立原田幼稚園建ち並んでいる他多くの民家、さらには茶畑が広がっている。こうした現況下にあって表採された資料が次に掲げる土器群である（第12図8-1～26）。

これら資料も地元在住の仲屋栄一氏が長年採集された資料であり、その極一部を紹介するものである。尚、ここで使用する分類もP21に記した分類法に従うものである。

上ノ段遺跡は、中期中葉から晩期にかけて長い期間営まれた大集落遺跡である。

中期中葉の土器は8-1～4で、このうち1はⅡ群a類、2、3はⅡ群b類、4がⅡ群d類に属するものである。1は、施文法において関東の阿玉台式であるが、胎土において在地的な土器である。2、3は、半截竹管状工具内皮面使用による連続爪形文が隆帯上に施されることを特長とする土器群である。4は、それらに後続する土器群であり、隆帯上の爪形文の幅も広がる。

中期後葉の土器は8-5～17で、このうち5～7はⅢ群b類、8・9はⅢ群d類、10～14はⅢ群e類、15はⅢ群h類、16・17はⅢ群j類に属するものである。このうち5は、ヘラ状工具による八字状文及び半截竹管状工具によるU字状区画が施される。6は、半截竹管状工具による平行沈線により地文形成後、隆帯貼付により文様形成が施される。7は、やはり地文に平行沈線を施した後隆帯貼付、蛇行懸垂文が施される。8・9は同一個体で、縄文地文に半截竹管状工具により楕円区画が施されるものである。この土器は、胎土、整形の磨きの状態等が在地的でなく注目される土器である。10～14は、8・9と対象的な土器群で、関東の加曾利E式の影響を強く受けながらも曾利式土器の要素をもつ極めて在地的な土器群である。15は、地文に楕描文を施した後、棒状工具による沈線区画及び交互刺突による印刻文及び連弧文がその下部に施されるものである。16・17は、いわゆる加曾利E式土器の末ともいえる土器群であり、これらをもって中期から後期へと変化していくものと思われる。

後期前葉の土器群は8-18～20である。これらを含め後期Ⅰ群の土器群は当地方において極めて関東的な土器が多く検出される。18はその例外ともいえるものであるが、堀之内Ⅰ式に併行するものと思われる。したがって19と共に後期Ⅰ群b類として分類する。20は、磨消縄文による文様施文が観られるものであり、これなどは関東地方に多く観られる土器群の例である。後期Ⅰ群c類に属す。

後期中葉の土器群には、8-21～25があり、21～24は後期Ⅱ群a類に属される。25は、後期Ⅱ群b類に属するものである。a類の内24は同じ加曾利B式に属される土器であるが、極めて在地的要素をもつものである。この他、後期中葉の土器群には、図示していないが、貼付隆帯上に板状工具により被圧し断面が波状となるいわゆる蜆塚式に属する土器も採集資料の中に存在している（後期Ⅱ群c類）。

後期後葉の土器群は、8-26の1点のみ図示したが、採集資料の中には上ノ段式（後期Ⅲ群b類）も観られる。26は、宮滝式に属される土器群（後期Ⅲ群a類）である。

この他、上ノ段遺跡採集資料中には、晩期大洞式土器群の範鑄に入る土器もあり、上ノ段遺跡が晩期まで継続して営まれていたことが知られている。

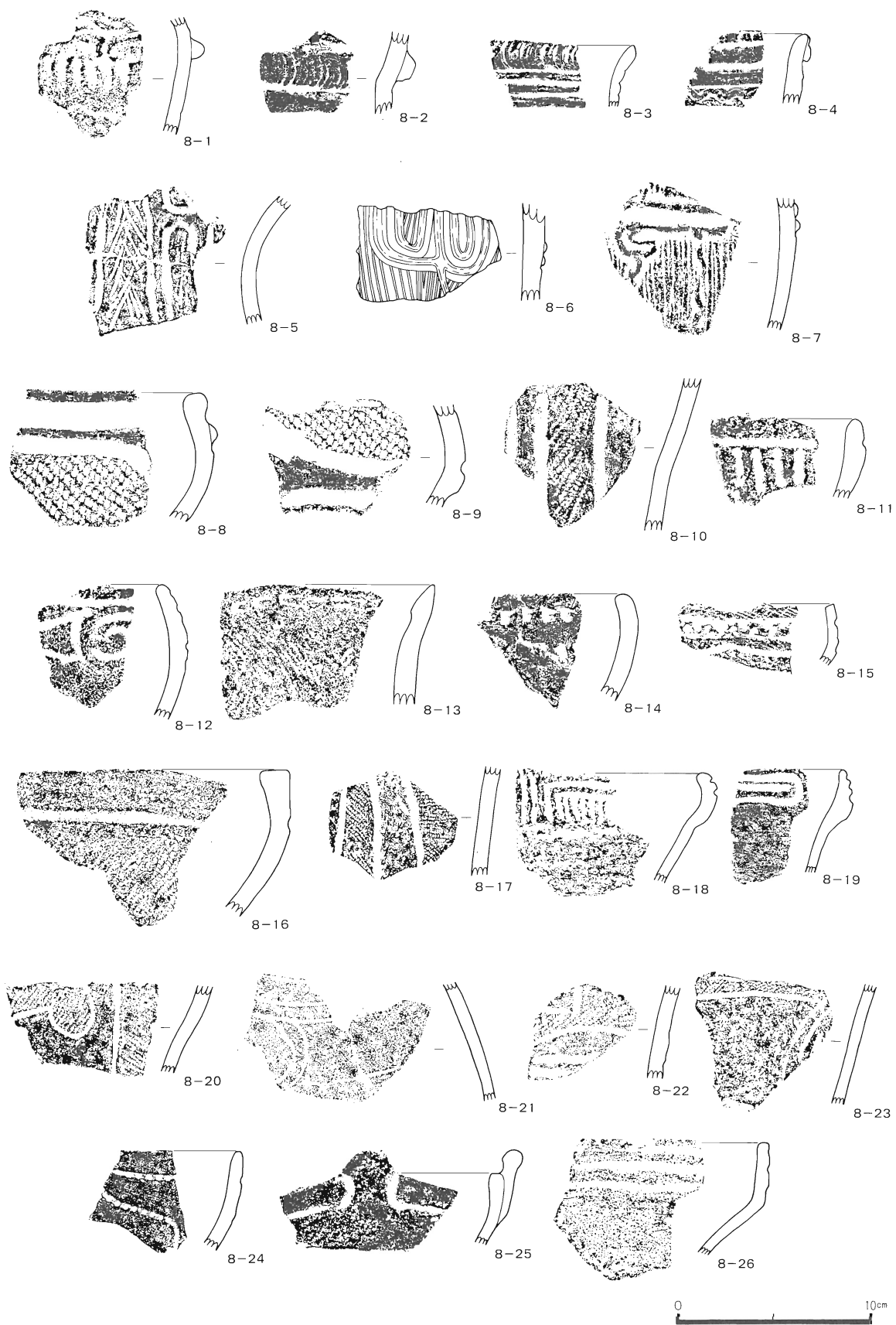
採集資料のうち石器の類では、図示しなかったが、各時期の石鏃・打斧・定角磨製石斧・石錘・石匙・錐・石皿・磨石・石棒等があり装身具としての大珠、块状耳飾が採集されている。

これら採集された石器の類から類推してもわかるとおり、上ノ段遺跡は、縄文中期において爆発的な大集落を形成後、周囲の自然環境に適合した生業により長期間の生存を可能にしていたものと思われる。

（松本一男）

### 第三節 ま と め

第一・二節で述べた通り、掛川市内では数多くの縄文時代遺跡が発見されているが、その大半は表採資料によるという段階であり、未だ多くの不明な部分を残していると言わざるを得ない。それらの不明部分については今後待つとして、現在の時点で時期の判明している延べ52遺跡について時期別に遺跡



第12図 縄文時代土器拓影図(7)

数を捉えれば次の様になる。(尚、晩期後葉については弥生時代で記述することになっているので割愛する。)

早 期	押型文	3	4	7.7 %
	条痕文	1		
前 期	前 葉	0	2	3.8 %
	中 葉	0		
	後 葉	2		
中 期	前 葉	6	35	67.3 %
	中 葉	9		
	後 葉	20		
後 期	前 葉	6	9	17.3 %
	中 葉	2		
	後 葉	1		
晩 期	前 葉	1	2	3.8 %
	中 葉	1		
		計 52		99.9 %

この数を隣接する菊川町の縄文時代遺跡と対比すると次の様になる。

	掛 川 市		菊 川 町	
遺跡数	49		58	
早 期	4	7.7 %	9	17.3 %
前 期	2	3.8 %	3	5.8 %
中 期	35	67.3 %	32	61.5 %
後 期	9	17.3 %	5	9.6 %
晩 期	2	3.8 %	3	5.8 %
	計 52	99.9 %	計 52	100.0 %

この様に中期の遺跡が多く、他の時期の遺跡が少ないのは掛川市・菊川町とも共通している。この傾向は東中遠の全域ではほぼ共通したものであり、掛川市もその例に漏れない。又、中期に急増した遺跡が後期に激減するという点も共通してこの地域に見られる現象である。

その原因を推定する為に上ノ段遺跡と中原遺跡を対比すると次の様になる。

まず上ノ段遺跡は前述の如く、中期より晩期にかけての歴代遺跡である。それに対して中原遺跡は中期の大遺跡であるが、後期前葉以降ではほぼ消滅に近い状態となる。

この両者の違いを何に求めるか、筆者はそれぞれの石器の組成及びその量に求められると考えている。上ノ段遺跡では多量の石鏃・石匙等の狩猟具とともに打製石斧・石皿・磨石等の植物採集に関連すると考えられる石器が多い。それに反して中原遺跡では狩猟具は多いものの植物採集に関連したと考えられる石器はさほど多くない。

この違いこそ両遺跡の消長を運命づけたと考えられる。言い換えれば両集落の生産形態の違いが起因となり、狩猟型の中原遺跡は消滅し、狩猟採集型の上ノ段遺跡は後・晩期まで継続したと考えられる。

中期の遺跡数の急増の原因はともかく、その結果各領域内の人口が過飽和状態となり、従来通りの狩猟依存の集落はその維持が不可能となったのではなかろうか。遠江地方の主要な貝塚の開始期が縄文後期前葉である点についても、急増した人口により枯渇した食料資源を他のものに求めた結果だと考えてよかろう。

隣接する袋井市の大畑遺跡と長者平遺跡でも同様な現象が認められる。大畑遺跡は後期以降貝塚を形成することにより晩期まで残存し、長者平遺跡は後期前葉で終結している。

又、後期以降では領域の面積が拡大する可能性があり、それが中期の人口急増の結果生じた資源の稀薄化とも言い得る状態より発生した事象とも考えられる。

こうして減少した掛川市内の縄文時代の遺跡は再度増加することなく縄文時代が終り次の弥生時代に移行していく。

(加藤)

#### 参考文献

1. 「静岡縣史第1巻」(静岡県 1930)
2. 「袋井市史通史編」(袋井市 1982)
3. 「袋井カントリークラブ袋井ゴルフ場工事への提言」(遠江考古学研究会)
4. 「掛川市向山古墳(第1号・第2号)発掘調査概報」(日本道路公団 1969)
5. 「菊川町遺跡地図」(菊川町教育委員会 1982)

## 第4章 弥生時代の遺跡の概要

### 第1節 分布

#### 1 はじめに

##### ① 分析の方法

掛川市教育委員会から依頼されたテーマは、「掛川市遺跡地名表」やその他の資料を基に、掛川の弥生時代についてまとめてほしいという事であった。掛川市においても、近年では各種の開発行為に伴う事前調査によって、弥生時代の集落や墓域が調査されているものの、集落や墓域の構造を解明できるものは少なく、また、そのための資料整理も十分成されているとは言い得ない現状である。したがって、分析・考察の方法は、おのずと遺跡の動態や分布を基礎に行う事となる。たとえば、遺跡を全掘し、集落や墓域の構造が十分解明され様とも、それは一集落、一墓域の形態（景観）であって、集団や共同体の本質とは限らない。一集落を越える集団も想定され、また、一集落がいくつかの集団に分割される事もある。それらは一見複雑ではあるものの、法則性をもって有機的に結びついている。遺跡の動態や分布、すなわち時空的な分析から、それを具体的に実証することは到底不可能であろうが、集団や社会の変化をマクロ的に把握する事は可能と思われる。遺跡の動態や分布に、いくつかの画期を見だし、その意義を検討する中から、集団や社会の各種の変化が少しでも見えてくるものと確信している。

##### ② 分析の前提

小論で扱う年代幅は、縄文時代晩期末の檜王、水神平式期から古墳時代中期までとする。弥生時代の幅を大きく逸脱しているが、水稻農耕の導入時期や、古墳の出現へ向かう集団関係の変化を検討する必要上、扱わざるを得ない。

土器様式は各種の意義を内包しているが、小論では「時間の物差し」という一側面のみで扱う。なお、檜王式、水神平式の時期を縄文時代晩期末、丸子式を弥生時代中期前葉、嶺田式を中期中葉、白岩式を中期後葉、二之宮式を後期前半、菊川式を後期後半とする。丸子式を弥生土器と断定する事には問題があり、白岩式については、その一部が後期に下る可能性が高く、菊川式についてもその終末は古墳時代に入る可能性がある。したがって上記の時期区分は、あくまで小論記述上での便宜的なものであり、実体とは異なる。また、二之宮式と菊川式は小片では分離不可能なものも多く、後期として一括する事が多い。菊川式と古式土師器についても、個体では分離不可能な事もあり、後期と表現する中には古式土師器の段階（古墳時代前期）まで含む可能性がある。

各土器様式の認識は、檜王式、水神平式、丸子式は佐藤 1983 による。二之宮式、菊川式は佐藤 1981 と鈴木 1983 による。嶺田式、白岩式については、内容に不確定な部分があり、筆者自身の認識も流動的である。嶺田式については、山下遺跡、馬坂遺跡、嶺田遺跡、西川遺跡出土土器等を参考に、白岩式については、白岩遺跡、鶴松遺跡出土土器等を参考に、極めてアプリオリに認識している。したがって小論の記述も、今後変更の余地が大きい。古墳時代前期や中期の土器についても同様である。

小論で扱う地域は、掛川市を中心に、隣接する袋井市の一部（永源寺原、及びその周辺）を含む。また、掛川市ではあるものの、水系的には菊川水系に属する上内田地区（第2表、139～143の遺跡）は分析の対象から除外する。したがって分析の対象は138遺跡である。

その138遺跡のうち、少しでも性格が判明しているのは、集落が確認されている天王山遺跡、墓

域が確認されている山下遺跡、御所原遺跡、集落と墓域の双方が確認されている大六山遺跡等の15遺跡にすぎない。したがって、全体の統一性を保つため、原則的には遺跡の性格を捨象して分析を進める事とする。

小論では前述の如く、遺跡の動態と分布を分析、考察の基礎とする。動態、分布の変化には、社会的政治的条件によって規定される部分と自然的条件による部分とが考えられるが、自然的条件に関しては、検討不十分の理由をもって捨象する。したがって小論は、独断、偏見の部分を一時的に内包している。

## 2 遺跡の時間的分類 (第2表)

遺跡地名表を基に、遺跡の出現時期と消滅、断絶時期についての分類を行い、弥生社会の変化を考える基礎データとしたい。ただし、ここでは主に地名表を基に分類するため、時期区分が縄文時代晩期、弥生時代中期、後期、古墳時代前期、中期と概括的であり、詳細な分類は不可能である。筆者の観察等により、詳細な分類が可能な部分もあるが、遺跡地名表掲載のデータのうち、筆者が確認し得たのは全体の約5分の1にすぎず、データ処理に統一性を欠く結果となるため、その部分については後述の「遺跡の動態」で記述する事とする。なお分類の数字の部分は主に出現時期を表わし、アルファベットの部分は消滅時期を表わしている。

1類、縄文時代晩期末の檜王式、水神平式期には成立している遺跡である。弥生時代中期前葉もしくは中葉まで継続し、以後廃絶する1a類と弥生時代後期まで継続する1b類、古墳時代前期まで継続する1c類、古墳時代中期以降まで継続する1d類に細分される。1b類～1d類について地名表では連綿と各時期にわたって継続する如く看取されるが、その多くは、弥生時代中期中葉から後葉に断絶する。したがって1b類は1a類と後述する3a類、1c類は1a類と3b類、1d類は1a類と3c類の組み合わせのことが多い。

2類、弥生時代中期に成立する遺跡である。中期のみの2a類、後期まで継続する2b類、古墳時代前期まで継続する2c類に細分される。

3類、弥生時代後期に成立する遺跡である。後期のみの3a類、古墳時代前期まで継続する3b類、古墳時代中期以降まで継続する3c類に細分される。

4類、古墳時代前期に成立する遺跡である。前期のみの4a類、中期以降まで継続する4b類に細分される。

今回、分析の対象とする138遺跡(第13図、第2表参照)のうち、1類は13遺跡、うち1a類6遺跡、1b類2遺跡、1c類4遺跡、1d類1遺跡である。1b類～1d類は1a類と3類との組み合わせが多いため、それを分解すれば、13遺跡すべてが1a類であろう。1類には廃絶型と断続型のみが認められ、継続型の遺跡が欠如している。

2類は27遺跡であり、うち2a類7遺跡、2b類13遺跡、2c類7遺跡である。したがって廃絶型が7遺跡、継続型が20遺跡である。

3類は98遺跡であり、うち3a類47遺跡、3b類48遺跡、3c類3遺跡である。1類の1b～1d類の分解した部分を加えると105遺跡であり、3a類50遺跡、3b類52遺跡、3c類3遺跡となる。したがって廃絶型が50遺跡、継続型が55遺跡である。

4類は3遺跡であり、4a類2遺跡、4b類1遺跡である。廃絶型2遺跡、継続型1遺跡である。

## 3 遺跡の空間的分類 (第13図、第2表)

掛川市域には、原野谷川、逆川、その支流として垂木川、家代川、倉真川、初馬川等が流れ、各水系単位や同一水系内においても、峡谷部分、谷底平野部分、扇状地部分、自然堤防地帯等の把握が可能である。また原野谷川沿いの段丘は、原谷地区以南の扇状地部において特に発達し、吉岡原・高田原、永



番号	群	遺跡番号	遺跡名	分類	弥生					備考	番号	群	遺跡番号	遺跡名	分類	弥生					備考
					晩	中	後	前	中							晩	中	後	前	中	
1	A	441	大畑	2 a		○					30	D	230	高田上ノ段	3 a			○		○	
											31	D	231	吉岡下ノ段	1 d	○	○	○	○	○	
2	B	427	小谷沢	4 a				○			32	D	234	吉岡原	3 b			○	○		
3	B	428	和田	3 a			○				33	D	235	瀬戸山 I	3 b			○	○		
4	B	429	大縄	3 b			○	○			34	D	236	瀬戸山 II	1 c	○	○	○	○		
5	B	417	上ノ段	1 c	○	○	○	○			35	D	237	瀬戸山 III	3 b			○	○		
6	B	418	松下	1 b	○	○	○				36	D	239	花ノ腰	3 b			○	○		
7	B	431	花ノ木沢	3 a			○				37	D	243	高田	3 c			○	○	○	
8	B	430	堂山	3 a			○				38	D	244	女高	2 c		○	○	○		住居跡
9	B	419	中瀬	2 a		○					39	D	242	平田ヶ谷	3 b			○	○		
10	B	416	萩	1 a	○	○					40	D	362	殿ノ台	3 a			○			
11	B	414	萩ノ段	1 b	○	○	○			住居跡 周溝墓											
12	B	412	平 I	3 a			○				41	E		石原沢	3 a			○			袋井市
13	B	412	平 II	3 b			○	○			42	E	107 108	金鑄原	2 b		○	○			住居跡
14	B	420	上ノ平	2 b		○	○				43	E		久野山	2 b		○	○			袋井市 住居跡
15	B	423	雨垂	3 a			○				44	E		東山	2 c		○	○	○		袋井市 住居跡
											45	E		陣野北	2 c		○	○	○		袋井市 住居跡
16	C	396	黒比志	1 a	○	○					46	E	39	松ヶ谷	3 a			○			
17	C	395	幡鎌峰山	3 b			○	○			47	E	42	山下	2 b		○	○			周溝墓
18	C	397	裏門	2 a		○					48	E		浅間裏	3 a			○			袋井市 住居跡
19	C	338	後藤ヶ谷	3 c			○	○	○		49	E		宇佐八幡内	3 a			○			袋井市
20	C	339	中山	3 b			○	○			50	E		国本	3 a			○			袋井市
21	C	401	八海山	2 b		○	○														
22	C	400	又太郎	2 b		○	○				51	F	261	山崎	3 b			○	○		
23	C	399	安里山	3 a			○		○		52	F	117	二反田	2 a		○				
24	C	343	長福寺西	2 b		○	○				53	F	110	岡津原 I	1 c	○	○	○	○		
25	C	346	古城	3 a			○				54	F	110	岡津原 II	3 a			○			
											55	F	110	岡津原 III	1 c	○	○	○	○		
26	D	341	城ノ腰	3 c			○	○	○		56	F	110	岡津原 IV	3 b			○	○		
27	D	226	東原	3 b			○	○													
28	D	227	溝ノ口	3 b			○	○			57	G	126	森平	3 b			○	○		
29	D	228	中原	3 a			○				58	G	282	赤渕	3 b			○	○		

第 2 表 一 ① 弥生時代遺跡地名表

番号	群	遺跡番号	遺跡名	分類	弥生					備考	番号	群	遺跡番号	遺跡名	分類	弥生					備考
					晩	中	後	前	中							晩	中	後	前	中	
59	G	277	桶田	4 b				○	○		89	I	130	源ヶ谷 I	3 b			○	○		
60	G	271	鱒原北	3 b			○	○			90	I	130	源ヶ谷 II	3 b			○	○		
61	G	272	鱒原南	3 b			○	○			91	I	131	六ノ坪	3 b			○	○		
62	G	283	小島	3 b			○	○			92	I	85	人出ヶ谷	3 a			○			銅鐸出土地
63	G	293	飛鳥	3 a			○				93	I	80	元下俣	2 a			○			
											94	I	146	下西郷	3 b			○	○		
64	H	292	小市	2 b		○	○				95	I	150	城内	3 a			○			
65	H	372	平塚山	3 a			○				96	I	170	子角山	3 a			○			
66	H	374	川久保	3 b			○	○			97	I	141	岩谷	3 a			○			
67	H	370	石畑 I	4 a				○			98	I	142	原	3 b			○	○		
68	H	370	石畑 II	2 b		○	○				99	I	298	次郎丸	3 a			○		○	周溝墓
69	H	370	石畑 III	2 b		○	○				100	I	144	原新田	3 b			○	○		
70	H	406	山崎鎮守	2 a		○					101	I	152	天王山	2 c		○	○	○		住居跡
71	H	409	山崎新田	1 a 3 a	○		○				102	I	156	御所原	2 c		○	○	○		周溝墓
72	H	410	山崎寺中	1 a 3 a	○		○				103	I	313	宝田	3 b			○	○		
73	H	408	藪下	2 a		○					104	I	157	内籠	3 b			○	○		住居跡
74	H	307	日守田	3 a			○				105	I	315	大多郎	3 a			○			住居跡
											106	I	158	大平山	3 a			○			
75	I	5	徳泉	3 a			○														
76	I	7	梅橋	3 a			○				107	J	172	三条久保	3 b			○	○		
77	I	6	篠場	3 a			○				108	J	164	西田	3 a			○			
78	I	8	平野	3 a			○				109	J	178	掘ノ内	3 b			○	○		
79	I	55	領家	2 b			○	○			110	J	166	山郷山	3 a			○			
80	I		向山	1 a	○	○					111	J	311	山口	3 a			○			
81	I	49	黒田	3 a			○				112	J	182	大六山	2 c		○	○	○		住居跡周溝墓
82	I	56	沢田	3 a			○				113	J	183	元屋敷	3 b			○	○		
83	I	57	細田	3 a			○				114	J	185	峰山	3 b			○	○		住居跡
84	I	59	前坪	3 a			○				115	J	189	古明	3 b			○	○		
85	I	58	大池	3 a			○				116	J	190	寺峰	3 b			○	○		
86	I	132	小山平 I	3 b			○	○			117	J	191	下川原	3 b			○	○		
87	I	132	小山平 II	3 b			○	○			118	J	198	天神	3 b			○	○		
88	I	132	小山平 III	3 b			○	○													

第 2 表 一 ② 弥生時代遺跡地名表

番号	群	遺跡番号	遺跡名	分類	弥生					備考	番号	群	遺跡番号	遺跡名	分類	弥生					備考
					晩	中	後	前	中							晩	中	後	前	中	
119	J	199	中西	3 b			○	○			132	J	326	宮ノ前	3 b			○	○		
120	J	197	神子地	3 b			○	○			133	J	195	吉松	3 a			○			
121	J	213	畑中	2 b		○	○				134	J	223	中屋敷	3 a			○			
122	J	214	日影谷	3 b			○	○			135	J	224	新田	3 a			○			
123	J	218	原山	3 b			○	○			136	J	222	狐鼻	2 b		○	○			
124	J	204	池向	3 a			○				137	J	334	権現原	3 b			○	○		
125	J	196	原ノ前	3 a			○				138	J	330	木ノ下	1 a 3 a	○		○			
126	J	205	踊原	3 b			○	○													
127	J	208	大久保	3 b			○	○			139		3	田島	3 a			○			
128	J	211	大藪	3 b			○	○			140		36	宝住寺前	3 b			○	○		
129	J	322	郷下	3 a			○				141		33	小林Ⅱ	3 a			○			
130	J	194	住環北	3 b			○	○			142		22	五百済	1 a 4 a	○			○		
131	J	323	後沢	2 c		○	○	○			143		21	王子	4 a				○		

第 2 表 一 ③ 弥生時代遺跡地名表

- ・ 群は遺跡の空間的分類を示す。
- ・ 遺跡番号は掛川市遺跡地名表の遺跡番号である。
- ・ 分類は遺跡の時間的分類を示す。
- ・ 本表は掛川市遺跡地名表を基に、その後得た資料を加え、また誤りを訂正したものである。

源寺原、岡津原の3つの段丘が認められる。その様な地形的条件であるため、地理的にまとまった小地域を抽出し、遺跡を空間的に分類する事も可能である。ただし小地域間の境界部分については微妙なところがあり、便宜的である事は否めない。以上の方法で遺跡を分類すれば、10群に細分される。以下、順に説明していく。

A群(1)、原野谷川支流の西谷川の中、上流域の遺跡である。弥生中期とされる大畑遺跡のみが分布している。

B群(2~15)、原野谷川が峡谷部をぬけ出し、谷底平野を形成する原田地区に分布する一群である。段丘上に立地する遺跡が多く、他群に比べ1類の遺跡が多い点が目につく。

C群(16~25)、原野谷川が扇状地相当部分を形成する原谷地区の遺跡である。なかでも長福寺周辺の5遺跡(21~25)がまとまって立地し、川西の遺跡と川東の遺跡とに細分される可能性がある。

D群(26~40)、和田岡地区の吉岡原・高田原の段丘上の遺跡と原野谷川東岸の殿ノ台(40)を含め、D群とする。殿ノ台については本来、別群にすべきであるが、一遺跡のみの単独立地であるため、一群を立て得ず、便宜的にD群に含めた。吉岡原は高田原より約5m標高が高く、また高田と瀬戸山との間



第13図 弥生時代遺跡分布図

には小谷が入り込んでいるため、和田岡地区の遺跡はさらに三群に細分することができる。一つは吉岡原に立地する城ノ腰(26)、東原(27)、溝ノ口(28)、中原(29)、高田上ノ段(30)、吉岡下ノ段(31)の一群である。吉野下ノ段遺跡以外は後期に出現する遺跡(3類)である。もう一つは瀬戸山及びその周辺の吉岡原(32)、瀬戸山Ⅰ(33)、瀬戸山Ⅱ(34)、瀬戸山Ⅲ(35)、花ノ腰(36)の一群である。瀬戸山Ⅱ以外は後期に出現する遺跡(3類)である。いま一つは、高田原に立地する高田(37)、女高(38)の一群である。なお、吉岡原の西側には、宇刈川が開析する谷が入り込んでおり、東原(27)、溝ノ口(28)の吉岡原西端の遺跡については、宇刈川流域の遺跡として別群にすべきかもしれない。

E群(41~50)、永源寺原の段丘上及びその南方の低地に立地する遺跡である。永源寺原は東側の掛川市各和地区の低地とは40m~20mの比高差をもち、斜面の傾斜も急である。それに比べ西側には袋井市国本方面へ向かって開析する谷が幾本か入り込み、それに向かう傾斜もゆるやかである。したがって永源寺原上の遺跡はこれらの開析谷を生産地として生活していた可能性が高い。ゆえに開析谷の南方に立地する国本(50)も便宜的にE群に含めておいた。

F群(51~56)、岡津原の段丘上、及びその周辺に立地する遺跡である。

G群(57~63)、家代川、垂木川中流域の遺跡である。すべてが弥生時代後期以降に成立する遺跡(3類、4類)である。

H群(64~74)、倉真川、初馬川の中流域の遺跡である。その中でも平塚山(65)、川久保(66)、石畑Ⅰ(67)、石畑Ⅱ(68)、石畑Ⅲ(69)の5遺跡が一つのまとまりをもっている。また、山崎鎮守(70)、山崎新田(71)、山崎寺中(72)、藪下(73)の4遺跡もまとまりを示している。

I群(75~106)、逆川が扇状地相当部分を形成する市街、大池、曾我地区を中心に立地する遺跡である。他群との接点部分に立地する遺跡の群別には、前述の如く、便宜的な要素が強い。段丘、丘陵上の遺跡と低地の遺跡があり、低地では今のところ中期の遺跡の確認は少ない。三遠式銅鐸が出土した入出ヶ谷(92)もI群に含まれる。倉真川、逆川合流点を境に、より上流の遺跡とより下流の遺跡とに細分が可能かもしれぬが、判然としない。

J群(107~138)、逆川が谷底平野を形成する、東山口、西山口地区を中心に立地する遺跡である。大六山(112)、踊原(126)、大久保(127)、大藪(128)など低地と50~60mの比高差をもつ、高地性の集落がいくつか認められる。

上述の概観から、遺跡の立地についてここで触れておきたい。138遺跡のうち低地に立地するのは、約40遺跡であり、他の約100遺跡は段丘や丘陵上に立地している。段丘、丘陵上の遺跡が多い点の特徴である。その中で、後述する「高地性集落」の可能性が高い、比高30m以上で、孤立性の遺跡は、前述のJ群の4遺跡のみである。なお高地性集落の可能性のあるものとしてはB群では上ノ平(14)、C群では後藤ヶ谷(19)、中山(20)、I群では次郎丸(99)、原新田(100)、天王山(152)、内籠(104)、大平山(106)、J群では山郷山(110)、峰山(114)、日影谷(122)、後沢(131)、宮ノ前(132)等があげられる。しかし、前述の4遺跡との差は歴然としている。

以上の如く、遺跡を空間的に分類した。前述の時間的分類と合わせ、これらを基本に次では遺跡の動態について論じていく事としよう。

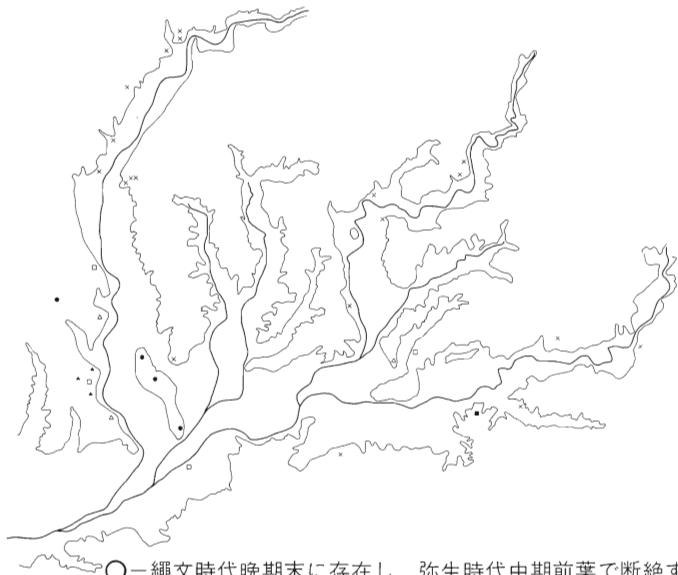
#### 4 遺跡の動態(第14図~第18図)

##### ① 縄文時代晩期末(第14図)

1類として分類した13遺跡が縄文時代晩期末の檜王、水神平式期に確認される。掛川市域におけるこれらの遺跡は断続型が多い。該期直前の五貫森式や馬見塚段階の遺物は、掛川市域では管見にふれず、また弥生時代中期後葉以降まで連綿と継続する遺跡も皆無である。これらの事実は、生産方法の採取から農耕へという変化と深くかかわっていると思われる。また13遺跡中、筆者が何らかの



第14図 弥生時代時期別遺跡分布図(1)



- 縄文時代晩期末に存在し、弥生時代中期前葉で断絶する遺跡。
- 縄文時代晩期末に存在し、弥生時代中期中葉で断絶する遺跡。
- △—中期中葉に成立するが、中期後葉まで継続しない遺跡。
- ▲—中期前葉に成立するが、中期後葉まで継続しない遺跡。
- 中期後葉に成立する遺跡。
- 中期中葉に成立し、中期後葉まで継続する遺跡。
- ×—中期の遺跡という事のみで詳細不明の遺跡。

第15図 弥生時代時期別遺跡分布図(2)

は中期中葉の遺物も出土していない。また中期中葉に成立し、後葉に断絶のある遺跡(△)として女高、山下、天王山が知られる。一方、中期中葉に成立し、後葉に断絶する事なく継続する遺跡(■)としては大六山、中期後葉に成立し、継続する遺跡(□)としては吉岡下ノ段、御所原、久野山、領家が知られている。大きくは中期後葉の断絶の有無をもって分類する事ができる。断絶のあるものが6遺跡、ないものが5遺跡である。初期水稻農耕の技術的到達度と関係するのだろうか。

なお、16遺跡中、中期前葉に存在するものが8遺跡、うち1類が5遺跡、2類が3遺跡、2類は

形で確認したのは6遺跡にすぎない。そして晩期末の遺物のみを確認したのが、上ノ段、松下、弥生時代中期前葉までの遺物を確認したのが、萩ノ段、中期中葉までの遺物を確認したのが、岡津原I、III、向山である。これらの違いも水稻農耕導入時期の微妙な差を表わしているであろう。

分布においては、B群とF群及びその周辺に比較的遺跡が多い。原野谷川及びその支流の流域(以下、原野谷川流域と略す)と逆川、及びその支流の流域(以下、逆川流域と略す)とを比較すれば、前者に9遺跡、後者に4遺跡と原野谷川流域の遺跡が多い。また、谷底平野部分より上流に立地する遺跡が多く、原野谷川流域に5遺跡、逆川流域に3遺跡の合計8遺跡が知られる。なお、低地に立地する遺跡は皆無である。

② 弥生時代中期(第15図)

2類の遺跡と1類のうち、弥生時代中期まで継続するとされる遺跡とを合わせ37遺跡が知られている。そのうち筆者が確認したものは16遺跡である。1類の5遺跡(○●で表示)と2類の11遺跡とは水稻農耕の導入と関係して異なる性格が想定される。また2類の中も細分が可能である。中期前葉に成立するが、中期後葉に断絶がある遺跡(▲)として東山、陣野北、金鑄原がある。なお金鑄原では

すべて中期後葉に断絶する。中期中葉に存在するもの10遺跡、うち1類が4遺跡、2類が6遺跡、2類のうち5遺跡は後葉に断絶する。中期後葉に存在するものは5遺跡である。中期前葉と中葉の間で1類の遺跡と2類の遺跡の比率が逆転している。しかし、中期中葉においても依然として1類の比率が比較的高い事は、他の地域との比較において重要である。なお、後葉の遺跡数が中葉に比べ半減しているが、2類の遺跡のみで比較すれば、前葉3遺跡、中葉6遺跡、後葉5遺跡となる。注目すべきは遺跡数の減少より遺跡の断絶であろう。

遺跡の分布は、F群及びその周辺には1類が集中すること、E群は2類のみであり、かつ後葉に断絶する遺跡が多いこと、D群には1類の遺跡が1、2類のうち後葉に断絶する遺跡1、断絶しない遺跡1、が分布し、群としては継続性があり、比較的安定した地域であること、がわかる。また、原野谷川流域の遺跡数と逆川流域の遺跡数を比較すれば、前者に22、ないし23遺跡、後者に14ないし15遺跡と原野谷川流域に多い。これは晩期末の傾向を継承している。

### ③ 弥生時代後期（第16図）

3類の98遺跡に1類及び2類のうち、後期に再現もしくは継続する遺跡を加え、125遺跡が知られている。うち後期になって成立もしくは再現する遺跡（●▲）が110、中期から継続することが明らかな遺跡（○）が5、不明（△）が10、である。なお125遺跡中、筆者が確認しているものは27遺跡（●○）にすぎない。中期との遺跡数を、それぞれ成立もしくは再現する遺跡で比較すれば、中期の27に対し、後期では110と4倍以上に増加している。なお、中期後葉に確認される遺跡はすべて後期に継続する事にも注意しておきたい。

分布では、中期には遺跡が確認されなかったG群の低地に遺跡が進出すること、また、中期には



- 弥生時代中期から継続する遺跡
- △—地名表では中期から継続する事となっているが詳細不明の遺跡
- 弥生時代後期に成立もしくは再現する遺跡
- ▲—地名表では後期に成立もしくは再現する事となっているが詳細不明の遺跡

第16図 弥生時代時期別遺跡分布図(3)



- 弥生時代後期から継続するとされる遺跡
- 古墳時代前期に成立、もしくは再現するとされる遺跡

第17図 弥生時代時期別遺跡分布図(4)

1 遺跡しか知られていない I 群、J 群の低地にも進出していることが知られる。なお、原野谷川流域の遺跡が49、逆川流域が76と縄文時代晩期末、弥生時代中期の傾向が逆転している。低地に立地する遺跡も、逆川流域の方が圧倒的に多い。

なお、後期にいたると地理的な小地域の一群単位等で、遺跡がまとまりをもち、「遺跡群」として把握できそうである。特にD群の吉岡原・高田原上の遺跡で顕著である。他の群においては、空間的分類の一群が、促、遺跡群に相当するとは限らないが、いくつかの遺跡群を想定する事は可能である。B群やE群中の永源寺原上の遺跡、J群のうち弥生地名表の110～135までの遺跡などは遺跡群として把握できるかもしれない。それ以外の遺跡についても、何らかのまとまりを想定する事は可能であるが、明確な抽出ができないため保留する。

#### ④ 古墳時代前期（第17図）

4 類の3遺跡（●）に弥生時代後期から継続する遺跡（○）を加え、66遺跡が知られる（うち筆者確認は10遺跡のみ）。古墳時代前期に成立する遺跡が3遺跡にすぎない事が注目される。なお、弥生時代後期の125遺跡が66遺跡に半減した様に看取されるが、前述の如く、弥生時代後期の土器と古式土師器では特徴的な器種以外では個体での区別は難しく、特に小片では困難である。したがって弥生後期とする中には古墳時代前期を含む可能性やその逆の可能性も高く、数字上の遺跡数の減少をそのまま信頼、使用する事はできない。むしろ、遺跡の継続性を重視して、弥生時代後期との間に画期を認めない事が必要であろう。

遺跡の分布についても、第17図を見る限りでは、I群の低地の遺跡が消滅するなどの特徴が読みとれるが、前述の理由をもって、弥生時代後期の分布と大差ないと判断したい。

#### ⑤ 古墳時代中期（第18図）

弥生時代遺跡地名表には古墳時代前期から継続する5遺跡（○）と中期に再現する3遺跡（●）しか表示してないが、それ以外に、林、西村、岡津原V、絹張塚、北袋、構江、中下の7遺跡（●）

を加え、15遺跡が知られる（うち筆者確認は1遺跡のみ）。前者から継続する遺跡が5遺跡と極めて少ない点が注目される。それは、前期の66遺跡のうち61遺跡が中期に継続する事なく消滅した事を示し、前述した古式土師器と後期弥生土器との関係を参考にすれば、125遺跡のうち120遺跡が消滅したとも想定される。また遺跡数も激減している。これは極めて「異常」な事態である。人々はどこへ移動したのであろうか。人口が急減したのであろうか。古墳時代中期の土器が無紋であり、小片では時期の特定ができないという事情とも関係するのかもしれない。この時期には低地の遺跡が多く、地中深く埋没し、かつ小規模（散居形



- 古墳時代前期から継続するとされる遺跡
- 古墳時代中期に成立もしくは再現するとされる遺跡

第18図 弥生時代時期別遺跡分布図(5)



態)であるが故に未発見という事かもしれない。15遺跡中10遺跡が新たに成立、もしくは再現する遺跡である事を重視し、遺跡数の減少よりも、前代からの継続性の欠如に注目し、意義を見出したい。なお、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は遺跡群を形成し、集落の多くは集住形態であったと推定されるのに対し、該期では遺跡群が解体することにより、散居形態に変化したと推定される。

分布についてはD群とH群に若干密な分布が認められる程度である。

## 5 弥生社会の形成と崩壊

縄文時代晩期末から古墳時代中期までの遺跡を時間的、空間的に分類し、その動態をみてきた。それによれば、弥生社会の発展の様相をいくつかの段階に分けて考える事ができる。Ⅰ期—縄文時代晩期末、Ⅱ期—弥生時代中期前葉から中葉、Ⅲ期—弥生時代中期後葉、Ⅳ期—弥生時代後期から古墳時代前期、Ⅴ期—古墳時代中期、の5段階である。Ⅰ期とⅡ期との間は2類の遺跡の出現を、Ⅱ期とⅢ期の間は1類の消滅と2類の不継続性を、Ⅲ期とⅣ期の間は遺跡の爆発的増加を、Ⅳ期とⅤ期の間は遺跡の不継続性を、それぞれ重視して区分した。中でもⅣ期とⅤ期の間には大画期が認められる。それ以外の画期は比較的漸移性が強い。なお、Ⅳ期についてはより詳細な段階をいくつか設定すべきであるが、今回は主に資料的な制約によって成し得なかった。

Ⅰ期は、採取を生活の基盤としていた時期であるが、すでに尾張以西の地においては、食糧生産を基盤とする生活=弥生時代が始まっており、その影響を受けはじめている。当地のⅠ期の遺跡に晩期後葉からの継続性がない事はすでに指摘した。近隣地域の該期の遺跡をみると、磐田市見性寺貝塚(平野1974)では晩期後葉からの継続性がなく、三ヶ日町殿畑遺跡(佐藤1984)では継続性はあるものの、該期に遺跡の拡大があり、豊橋市貫森遺跡、小坂井町稻荷山遺跡(杉原、外山1964)では規模が縮小している様であり、遺跡の動態のうえでも小画期があるのかもしれない。しかし、この時期の大半の遺跡は縄文時代の歴代遺跡の最上層を形成している事も事実であり、当地も例外ではない。また、該期の遺跡に弥生時代後期以降まで一貫して継続するものは皆無である。土器の面でも、この時期から壺形土器が一般化し、弥生社会の影響を受けているが、該期の壺形土器は貯蔵形態として確立していない(佐藤1984)。最近では該期を弥生時代とする意見が多数を占めているが、あくまで弥生社会の影響を受けはじめた段階であり、時代区分上は、縄文時代の終末に位置づけるべきである。

そもそも水稲農耕は、単なる人間集団の移動や習俗の伝播によって開始されるものではなく、労働組織、生産関係、集団関係等の共同体の諸関係や共同体成員の世界観までが変化して、はじめて成し得るものである。したがって、弥生社会の影響を受け初めてから、水稲農耕を本格的に導入するまでには、いくつかの段階を経ている事が考えられ、決して一朝一夕に開始されたものではない。その様相を具体的に示しているのがⅡ期である。Ⅱ期では縄文時代晩期末から継続する1類の遺跡と、弥生時代中期になって成立する2類の遺跡とが並存する。1類の遺跡はⅠ期の延長で理解され、水稲農耕を導入していない、もしくはそれを生活の基盤と成し得ていない遺跡である。それに比べ2類は水稲農耕を導入した遺跡である。初期の水稲農耕集落は、技術的な幼稚さ故か、分散して小集落を営む事が多く、E群の永源寺原上の諸遺跡<sup>(註3)</sup>のあり方などは、谷水田を開発して、水稲農耕の導入に努める一つのまとまった集団を想起させる。しかし、これらの遺跡は、その技術的到達度が低かったためか、谷水田の生産力の低さ故か、Ⅲ期に継続することなく、消滅してしまう。水稲農耕の本格的導入に失敗したとも、また、より良好な可耕地を求めて移動したとも考えられる。その一方では、減少したとはいえ、Ⅱ期の後半まで1類の遺跡が残存しており、Ⅱ期は採取から農耕への過渡的な段階として位置づけられる。

Ⅲ期にいたると1類の遺跡はすべて消滅し、水稲農耕の確立期となる。しかし、該期が確実視されている遺跡は、Ⅱ期の遺跡と同一の永源寺原に立地する久野山、周溝墓のみが確認されている御所原、該

期については詳細が不明で、単なる墓域かと思われる大六山、同じく詳細不明の領家、吉岡下の段のわず  
か5遺跡のみであり、その実証性に欠く。しかし、IV期における発展の前提として、III期における水稲  
農耕の確立を推定しておきたい。

さて、掛川市域における農耕社会形成の過程を述べてきたが、ここで近隣の地域と比較してみたい。

一般に遠江では弥生時代中期中葉を水稲農耕の確立期とする事ができる。舞阪町弁天島湖底遺跡、浜  
松市伊場、国鉄工場周辺の諸遺跡、磐田市御殿、二之宮周辺の諸遺跡、袋井市鶴松遺跡、小笠町嶺田遺  
跡、榛原町西川遺跡、等がこの時期に低地性の遺跡として出現し、以後弥生時代後期以降まで継続する。  
掛川市域の如く、この時期まで縄文時代晩期末の遺跡が継続するのは、山間部の水窪町向市場遺跡等に  
しかみられない。

弥生時代中期前葉が水稲農耕導入の過渡期であり、磐田市見性寺貝塚、三ヶ日町殿畑遺跡の如く、縄  
文時代晩期末から継続する遺跡がある一方では、菊川町白岩遺跡や都田川下流域の諸遺跡(註4)の如く、この  
時期に低地に進出し、以後への継続性をもつ遺跡がある。

したがって、掛川市域では弥生時代中期前葉や中葉に低地に進出する遺跡が欠如し、また、弥生時代  
中期中葉まで縄文時代晩期末の遺跡が継続することより、弥生時代中期前葉に、早くも水稲農耕を導入  
する集団がありながら、全般的には農耕社会に入るのが、近隣の諸地域より遅れていたと判断される。

IV期になると遺跡数が爆発的に増加し、遺跡群を形成するようになる。また、前代までは遺跡がみら  
れなかった地区にも進出し、農耕社会の大きな発展がみられる。この状況はどう解釈されるのであろう  
か。前述した如く、IV期はより詳細な段階に細分されるべきであり、それを実証性を無視して述べれば、  
一つは母集落が形成される段階であり、いま一つは、それを核にした分村によって遺跡群が形成された  
り、未開発地への進出が行なわれ、さらに新開発地においても遺跡群が形成される段階である。遺跡群  
の核となる母集落についてはIII期の遺跡の延長で考えたい。

水稲農耕の定着による、拡大再生産の飽く事なき指向は、生産力の増大と共に、人口増加や耕地不足  
という内的矛盾を生み出す。そして、それを該期の集団は分村という短絡的な方法で解決する事を図る。  
それが遺跡群の形成という現象である。分村によって成立した個々の集落の関係は、新たな共同体理念  
(紐帯)を基に編成されたものではなく、母集落のもつ血縁的性格や生産諸関係を基礎に集団が拡大、  
膨張したものであり、母集落の拡大再生産にすぎない。ただし、未開発地に進出し、そこで遺跡群が形  
成される場合には、いくつかの出自の異なる集団が結合する事もありえる。そこにおける結合関係は、  
母集落が拡大再生産されたものとは異なり、血縁を紐帯とする集団から地縁を紐帯とした集団へ発展し  
た事も想定される。

さて、遺跡群においては、アジア的な性格から、あくまで遺跡群としてのまとまり(集団)が上位で  
あり、生産手段(特に耕地)の所有主体である。各集落はそれとの相互関係において生産手段を占有し、  
生産、消費を行なっているにすぎない。したがって遺跡群をより発展させるためには、集落間の不均等  
性や群との利害(特に余剰生産物)をめぐる対立は規制される。それは遺跡群の代表者やその出自家族  
等の権限を強化する方向へとつながる。

遺跡群の代表者とは母集落が拡大再生産して成立したものについては、その母集落の代表者であろう。  
一方、地縁的紐帯が想定される遺跡群は、新開発地における利害をめぐる対立する異出自の集落を統  
合したものであり、その代表者とは闘争の勝者であろう。したがって、その権限は前者より強大であ  
ったかもしれない。

これら代表者の権限強化は、墓制においては台状墓の出現として表示される事はすでに述べた(佐藤  
1980)。しかし、掛川市域においては台状墓やそれに相当するであろう大形で単独の周溝墓は未検出で  
あり、この間の事情に関する実証性を欠いている。母集落についても、これを特定する事ができない。

これらの遺跡群がさらに拡大再生産を続けるためには、分村によって、その領域をより拡大する必要がある。それがどのような方法で行なわれ様とも、新耕地の所有権や水利権をめぐって、周辺の遺跡群との間に拮抗関係を生み出すのは必至である。時にはそれが抗争、戦闘状態に発展する事もある。これはまた、生産力の発展に伴う内的矛盾を分村によって解決する方法が限界に近づいている事を示し、闘争が新たな生産諸関係の樹立を目的としている事をうかがわせる。闘争と密接な関係にあるのが高地性集落の動態である。それはIV期の中で廃絶されV期には継続しない。すなわち闘争はIV期の中で終了し、V期には新たな集団原理、生産諸関係に基づく集団が成立しているのである。

闘争によって成立したV期の集団は、強権力（闘争の勝者）によって再編成された集団であり、IV期にも増して、その代表者の権限は強化され、首長権として確立したと思われる。また、闘争を通して集団内の階級分化は進展し、収奪関係や収奪単位も確立したと推定される。生産諸力の発展と生産諸関係の矛盾解決が闘争の目的であり、それによって生産諸関係が変革されたのであれば、当然、それら下部構造のうえに立つ、政治的、観念的、上部構造も変革されたものと考えられる。以上の視点からV期の遺跡をみてみよう。

V期においては遺跡群の消滅が示す如く、従来の集団、生産の諸関係が解体してしまったのは明らかであり、弥生時代後期以来続いた生活基盤は崩壊され、生活拠点の変更がなされている。なお、V期における新たな、ある意味では政治的な集団の成立は古墳の出現（政治的、観念的、上部構造の変革）と帰一の現象と理解される。当地において古墳が出現するのはV期である。古墳が一般成員の墓制から絶対的に隔絶するのと同じく、遺跡群の解体も、首長居住地と一般成員居住地とを区分する方向での散居化とも思われる。また、遺跡群では認められた血縁性は、闘争の中で乱れ、そして完全に一掃され、新たな集団は地縁集団として成立する（ただし、V期の集団の基本単位となる世帯共同体、大家族共同体（エンゲルス 1891）と呼ばれるものは、あくまで血縁集団である。ここでは、その血縁集団間の関係を述べている。）。

なお、V期の集団の成立過程においては、上記の如き内的発展以外に、何らかの形で外的影響も考えねばならぬかもしれない。弥生時代後期前半では東海とか畿内とかという大地域間の交流は不活発であったのが、後期後半から古墳時代前期にかけては活発化し、畿内で東海系の土器が、東海では畿内系の土器が出土するようになる。特に古墳時代前期では、畿内一尾張の影響で土器様式の中に、小形高坏、小形器台、小形鉢、等の新器種が加わり、弥生時代後期後半まで明瞭であった土器における地域性が解体、統一化の方向へ進む。日常生活レベルでの土器の変化と社会的、政治的な変化とは次元が異なる事ではあるが、掛川市域における、ある意味での政治的集団の成立が、土器の変化以降である点には、一応注意する必要があるかもしれない。

なお、掛川市域におけるV期の如き集団は、天竜川下流域や太田川流域では古墳時代前期にみられ、また、それら二地域ではIV期の如き遺跡群も弥生時代後期の中で解体化の方向へ進んでいる。これは、二地域には前期古墳が存在するのに対し、掛川市域にはそれが存在しない事と帰一の現象であろう。農耕社会成立における掛川市域の遅れが、ここまで影響を与えているのかもしれない。

では、ここまで述べてきた諸関係の変化は、歴史概念、歴史理論的にはどう理解されるのであろうか。

強固な血縁を共同体の紐帯とする組織を氏族共同体、血縁関係、婚姻関係で結ばれた氏族共同体相互の関係を胞族、部族（種族）（エンゲルス 1891）と呼びたい。それらにおける所有関係は本源的な共同所有である（マルクス、エンゲルス 1846）。一方、共同所有から私的所有への移行期として、また原始共同体（太古的共同体）の最終の形態としては、農業共同体が考えられている。農業共同体とそれ以前の共同体とを区別するメルクマールとしては、①血のつながりによって束縛されていない、自由な人間の最初の社会的集団（地縁的共同体）であること、②家とそれに付属する屋敷とは農民の個人的な所有

物となっていること（屋敷地の私有＝私的所有の萌芽）、③農地は譲渡しえない、共同の財産であるが、農業共同体の構成員のあいだに定期的に分配され、各人はみずからに割当てられた耕地をみずからの割定において経営し、その収穫を個人的に領有すること（分割地（個別）経営）、の3つがあげられる（マルクス1881）。

すると、血縁を紐帯とするⅣ期の集団までは氏族共同体一部族の概念でとらえる事もできるであろう。しかし縄文時代の共同体も氏族共同体一部族の概念でとらえる事は可能である。したがって、水稻農耕を導入するにあたっての労働組織や生産関係の変化が、氏族共同体一部族の性格に何らかの変化を与えた事が想定されるため、同じ氏族共同体一部族概念ではあるが、縄文時代のそれと、弥生時代のものとは、表層的であろうと、何らかの違いがあったと思われる。その氏族共同体一部族の実際の姿としては、Ⅱ期における永源寺原の諸遺跡のまとまりなどが、一つの氏族共同体、もしくは一つの部族に相当しよう。また、Ⅳ期において遺跡群として表わされる集団（特に母集落が拡大再生産されたもの）もそれに相当しよう。しかし、Ⅳ期における氏族共同体一部族においては、同じく遺跡群として表わされる集団の中に、すでに地縁集団が成立しており、また、集団代表者の権限強化は、成員各人が基本的には平等である、氏族共同体一部族の原理を破壊しつつあり、農業共同体へ発展する要素が胚胎されていると考えられる。

Ⅴ期の集団は地縁集団であり、農業共同体の④の規定があてはまるかもしれない。また、Ⅴ期の集団は散居形態の可能性が高く、散居形態の集落（住居）においては屋敷地（宅地）が萌芽している事はすでに指摘されている（都出1979、1983）。これと②の規定とを関連づける事は、あながち不可能ではなからう。しかし、屋敷地が私的所有であったのか、それとも単なる占有にすぎなかったのかの判断を、考古資料からくさす事は、今のところ難しい。③の分割地（個別）経営については、弥生時代における存在も指摘されている（都出1978、近藤1983）。しかし、その初期の姿を除いては、一般に集住形態の顕著な弥生時代の集落では分割地経営は不徹底とも思われ、Ⅴ期において本格化したとも考えられる。

以上の検討によれば、Ⅴ期の集団は「農業共同体」と呼べるかもしれない。しかし、筆者は氏族共同体一部族と農業共同体との関係やその概念を十分深化できておらず、マルクス、エンゲル概念の安易な導入を避けるため、その断定には、慎重にならざるをえない。

## 6 おわりに

遺跡地名表や、極めて少量の局所的な採集資料を基に、小論は展開されており、小論で限定、断定した事が、不安定である事は、十分承知している。少量の資料と地名表を絶対的に信頼して、あえてここに論を展開しなければならなかった故と、お許し願いたい。

断続型の遺跡が継続型になる可能性や、現在確認されていない時期が、将来の調査で判明するなど、今回の考察の基礎データが今後、大きく変更される事はありえる。特に、無い事をもって立論した部分については「砂上の楼閣」となりえる不安を禁じえない。また、極力多くの情況証拠を蓄積する様、努めたが、それが直接的に歴史的事実を物語っているとは限らず、歴史叙述を可能にする方法論の研鑽により努めなければならない。小論が多くの独断を犯している事を危惧しつつ、今後とも研鑽を続ける事を約して、終わりとしたい。

なお、小論は佐藤1980の延長上にある。併読していただければ幸甚である。

註1 瀬戸山Ⅱは後述の如く、筆者が実見したのは中期前葉、中葉、後期の土器であるが、加藤賢二氏より晩期末の土器を確認しているのご教示を得たため、1類に含めた。

註2 山下遺跡の遺物中には斜格子紋を施した壺形土器片が数片含まれているとの事である。しかし、斜格子紋の上下の区画の部分に欠損しているため、中期中葉か後葉かの判断ができない（松井一明氏ご教示）。他の大多数の遺物は中期中葉であるが、一部には丸子式の特徴をもつ土器も認め

られる。それらは嶺田式（中期中葉）における前様式の残存要素であるのか、それとも丸子式期（中期前葉）の遺構が存在したのか、定かでない。上記2点の判断は、現在整理中であり、近刊予定の報告書に期待したい。したがって、この遺跡の位置づけは、若干流動的である。

註3 永源寺原上の山下遺跡では該期の周溝墓群が検出されている。中期中葉の時期は確実であり、前述の如く前葉まで遡る可能性もある。尾張においては前期の周溝墓が検出されており、それを考慮すれば、水稻農耕技術と周溝墓という墓制とは、関連性をもって、同時に導入されたのかもしれない。

註4 都田川下流域では、丸子式、瓜郷式（嶺田式）が確認されながら、中期後葉の長床式が確認されない遺跡もあり、掛川市域と類似した点も認められる。

註5 ここでいう氏族共同体とはエンゲルス 1891 でいう氏族（特に源初的な）にほぼ相当する。

註6 「ロシアの共同体の型も、こうした型（原始共同体—筆者註—）のなかのひとつで、一般に「農業共同体」と呼ぶ了解のできています。西側諸国において、それと対をなすものはゲルマン的共同体ですが、それはきわめて新しい年代のものであります。すなわちそれはユリウス・カエサルの時代にはなお存在しておりませんでしたし、他方ゲルマンの諸部族がイタリア、ガリア、スペイン等を征服したときには、もはやそれは存在していませんでした。ユリウス・カエサルの時代には一中略一耕作も集団で、共同でおこなわれていたのでしょうか。ゲルマン人の土地自体においては、古代型に属するこのような共同社会は、タキトゥスが書いているように、自然的発展の結果農業共同体に転化しました。しかしタキトゥスの時代以後、それはわれわれの目から消え失せております。」（マルクス 1881）とするタキトゥス時代のゲルマンの農業共同体と、エンゲルス 1891 が述べる、タキトゥス時代のゲルマンの氏族制度との関係が十分整理できていない。それはまた、農業共同体は世帯共同体を基本単位としていたのか、それとも世帯共同体は解体され、個別世帯を基本単位としていたのかの理解とも関係する。原典の整理を進め、近日中に筆者なりの解答を出してみたい。

## 参考文献

- エンゲルス 1891：「家族・私有財産・国家起源（第4版）」『マルクス・エンゲルス全集』21（村田陽一訳）大月書店
- 近藤 義郎 1983：『前方後円墳の時代』、岩波書店
- 佐藤由紀男 1980：「弥生時代後期の集団関係」『静岡県考古学研究』9、静岡県考古学会
- 佐藤由紀男 1981：「広野弥生遺跡をめぐって」『森町考古』17、森町考古学研究会
- 佐藤由紀男 1983：「東海地方東部における畿内第Ⅰ様式・第Ⅱ様式に並行する土器の編年について」『東日本における黎明期の弥生土器』、群馬県考古学談話会
- 佐藤由紀男 1984：「静岡県三ヶ日町殿畑遺跡出土の土器について」『古代文化』近刊号（予定）、古代学協会
- 杉原 荘介、外山和夫 1964：「豊川下流域における縄文晩期の遺跡」『考古学集刊』2—3、東京考古学会
- 鈴木 敏則 1983：「二之宮式土器について」『森町考古』18、森町考古学研究会
- 都出比呂志 1978：「はたして郷戸は最初の個別経営か」『日本史研究』187、日本史研究会
- 都出比呂志 1979：「ムラとムラとの交流」『図説日本文化の歴史』1、小学館
- 都出比呂志 1983：「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29—4、考古学研究会
- 平野 吾郎 1974：『遠江見性寺貝塚の研究』、磐田市教委
- マルクス、エンゲルス 1846：「ドイツ・イデオロギー」『マルクス・エンゲルス全集』3（真下信一訳）

大月書店

マルクス 1881：「ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答の下書き」『マルクス・エンゲルス全集』19、  
(平田清明訳) 大月書店

## 第2節 遺跡の概説

### 1 はじめに

分布の項で扱った遺跡のうち、主たる遺跡の概説を行うべきであろうが、前述の如き資料の量的不足から、それを十分行う事はできない。ここでは今回の執筆にあたって、筆者が採拓、実測した資料を公表し、その責を少しでもはたしたい。

遺物の時期に関する記述は〇〇式という表現以外に、前述の如く、実体とは異なる。弥生時代後期、古墳時代前期等の表現を併用する。特に、ここでいう弥生時代後期には古墳時代前期を一部含む事を承知していただきたい。なお、〈〉は弥生時代遺跡地名表の遺跡番号、( )は拓影、実測図の番号を示している。

### 2 各遺跡出土の土器

#### ① 堂山遺跡〈8〉(1)

弥生時代後期、羽状の縄紋を施した壺形土器の肩部である。

#### ② 上ノ段遺跡〈5〉(2～6)

樫王式期(2～4)、2は突帯上に指頭による押圧紋を施した壺形土器の肩部、もしくは胴部である。3、4は口唇をナデによって面取りした深鉢形土器である。3、4は同一個体であろう。

弥生時代後期(5)、口唇に篋状施紋具による刻み目を施し、頸部は縦位、肩部は横位もしくは斜位の刷毛整形をした甕形土器である。

古墳時代前期(6)、三孔を穿ち、縦位の篋研きをした小形高坏、もしくは小形器台の脚部である。

#### ③ 萩ノ段遺跡〈11〉(7～35)

樫王式期(7～15)、7は口唇が丸味をもち、突帯上に棒状施紋具によって押引き風の押圧紋を施した壺形土器である。8～13は口唇をナデによって面取りした深鉢形土器である。特に9は強くナデたため、凹線状になっている。12はゆるい波状口縁である。14は口唇を丸く仕上げた深鉢形土器、15は口唇を軽いナデによって丸味をもって仕上げ、口縁に棒状施紋具による刻み目を施した深鉢形土器である。15の類例は知られないが、口唇の特徴から樫王式に含めておく。条痕の施紋具は9が半截竹管もしくは櫛Ⅱ種、11が棒状施紋具かと思われる。

水神平式期(16～23)、16、17は口唇に押引き紋(17の施紋具は半截竹管か)を施し、突帯上に指頭による押圧紋を施した壺形土器である。17は内面に櫛Ⅱ種による弧紋を施している。18～21は口唇に押引き紋を施した(20、21は不明瞭)甕形土器である。18は内面に指頭?による弧紋を施している。22は口縁に刻み目を施し、内面に連弧紋もしくは波状紋を施した甕形土器である。23は口唇、口縁とも無紋の甕形土器である。なお、条痕の施紋具は17が櫛Ⅱ種か、19、20が半截竹管、23が棒状施紋具と思われる。

丸子式期(24～26)、24は口唇に条痕を施し、突帯上に指による押圧紋を施した壺形土器である。25、26は口唇に棒状施紋具による押圧紋を施した甕形土器である。条痕の施紋具は26が櫛Ⅱ種と思われる。

27～31は樫王式期～丸子式期の口辺部以外の破片である。30は羽状条痕である事から、水神平式もしくは丸子式と思われる。条痕の施紋具は27、30、31が櫛Ⅱ種か、28が半截竹管、29が棒状施紋具と思われる。なお31の内面には炭化物が付着している。

弥生時代後期（32～35）、32～34は壺形土器の頸部から肩部である。32は櫛描き横線紋と波状紋、33は櫛の羽状刺突紋、34は棒状施紋具による刺突紋と櫛の羽状刺突紋を施している。35は口縁に刷毛原体による刻み目を施した甕形土器である。

④ 上ノ平遺跡<14>（36）

弥生時代後期、櫛の刺突紋と突帯（段）を施した壺形土器の肩部である。

⑤ 平 I 遺跡<12>（37、38）

弥生時代後期、37は櫛の羽状刺突紋、38は棒状施紋具？による羽状紋と縄紋を施した壺形土器の肩部である。

⑥ 吉岡下ノ段遺跡<31>（39～55）

弥生時代後期（39～51）、39、40は壺形土器の口辺部である。39は口縁には刻み目、内面には櫛描き扇形紋を2段と波状紋を施している。40は口唇には刻み目、内面には櫛による押引き紋を施している。41～49は壺形土器の肩部から胴部である。41は半截竹管、もしくは二歯の櫛による押引き紋、42は櫛描き横線紋と刺突紋と楕円形の浮紋、43は櫛の刺突紋、44は櫛の押圧沈線、棒状施紋具による押引き紋、櫛描き波状紋、45、46は櫛描き波状紋、47は三角形の突帯と櫛の羽状刺突紋と結節縄紋、48は結節縄紋、49は羽状の結節縄紋、を施している。50は櫛の刺突紋を施した高环形土器の脚部である。51は口縁に篋による刻み目を施した甕形土器である。

古墳時代前期（52～54）、52は二重口縁の壺形土器である。屈曲部分に突帯をめぐらし、篋状施紋具による刻み目を施している。53、54はS字状口縁甕形土器の頸部である。

古墳時代中期以降（55）、高环形土器の脚部である。中実となっている。

⑦ 高田上ノ段遺跡<30>（56～58）

弥生時代後期（56）、段上に櫛の羽状刺突紋を施した壺形土器の肩部である。

古墳時代前期（57、58）、S字状口縁甕形土器である。57は口唇を面取りし古相を呈す。

⑧ 中原遺跡<29>（59、60）

弥生時代後期、59は櫛描き波状紋と縄紋、60は櫛の羽状刺突紋を施した壺形土器の肩部から胴部である。

⑨ 吉岡原遺跡<32>（61～67）

弥生時代後期（61～66）、61、65は壺形土器の口辺部である。61は口唇には刻み目、内面には縄紋と櫛描き波状紋を施している。65は口縁直下に棒状浮紋を施している。62～64は壺形土器の肩部から胴部である。62は櫛の横位刺突紋と縄紋、63は櫛の羽状刺突紋、64は櫛の刺突紋、を施している。66は口唇に刻み目を施した甕形土器である。

古墳時代前期（67）、S字状口縁甕形土器である。

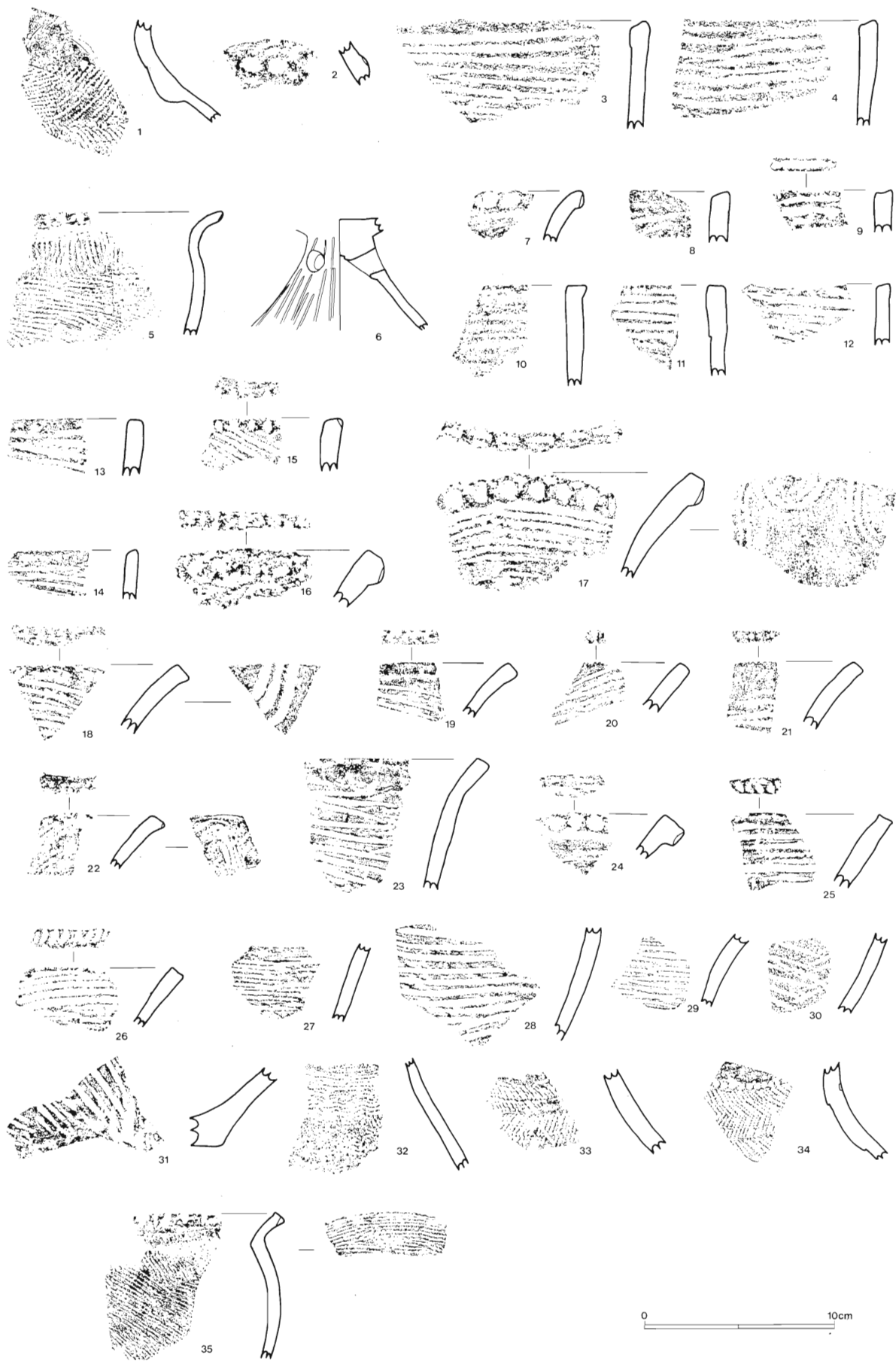
⑩ 花の腰遺跡<36>（68～77）

弥生時代後期（68～75）、68は口唇に縄紋を施した壺形土器であり、赤彩されている。69～74は壺形土器の肩部から胴部である。69は櫛描き波状紋と横線紋、70は櫛描き扇形紋、71は段（突帯かも）と櫛の羽状刺突紋、72は櫛の羽状刺突紋と波状紋、円形浮紋、73は櫛の押圧沈線、横線紋と羽状刺突紋、円形浮紋、74は結節縄紋、を施している。75は口縁に刷毛原体による刻み目を施した甕形土器である。

古墳時代前期（76、77）、S字状口縁甕形土器である。77は器壁が厚く、S字の屈曲も弱く、新相を呈している。

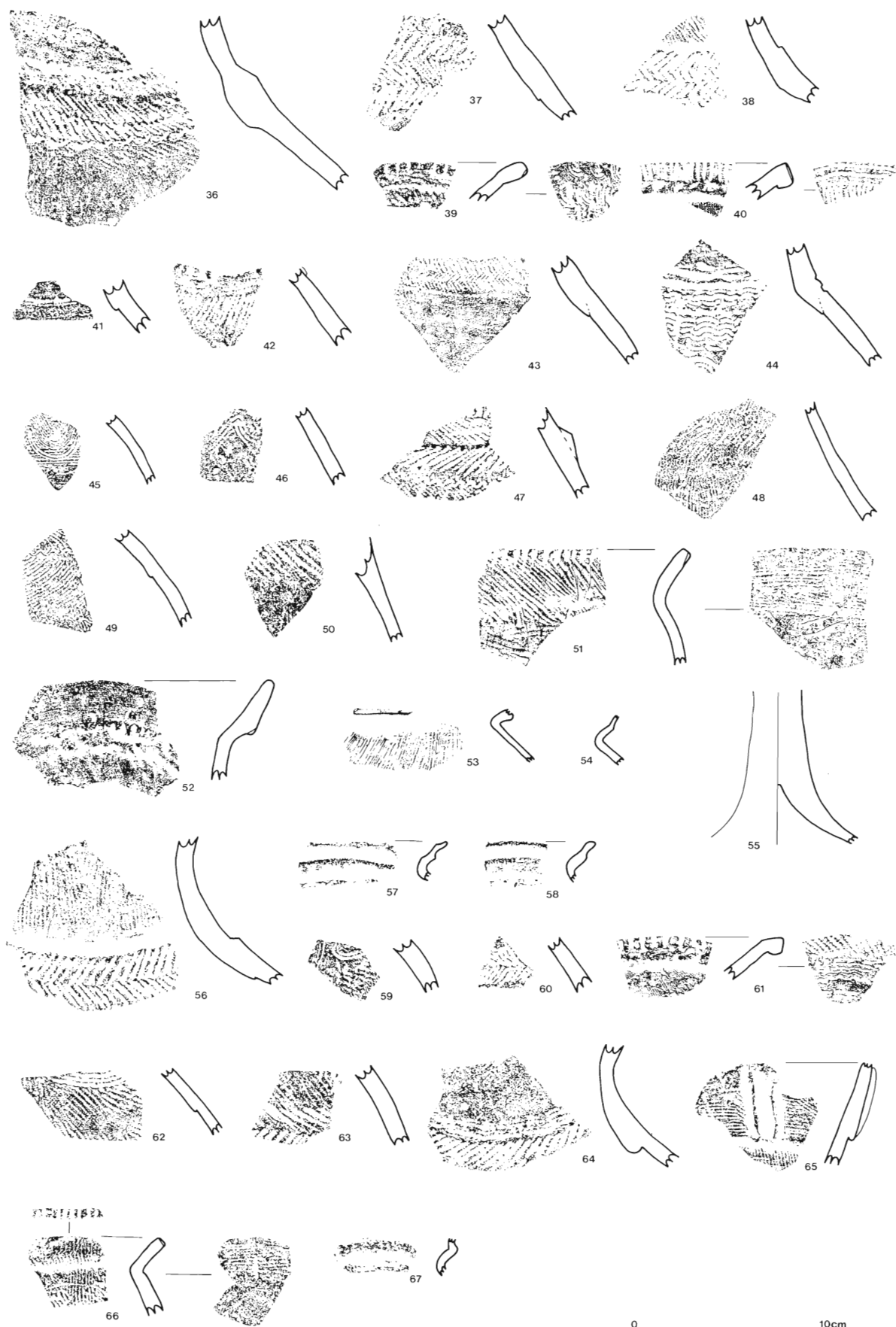
⑪ 瀬戸山 I 遺跡<33>（78）

弥生時代後期、櫛の羽状刺突紋と沈線を施した壺形土器の胴部である。紋様部分以外は赤彩され

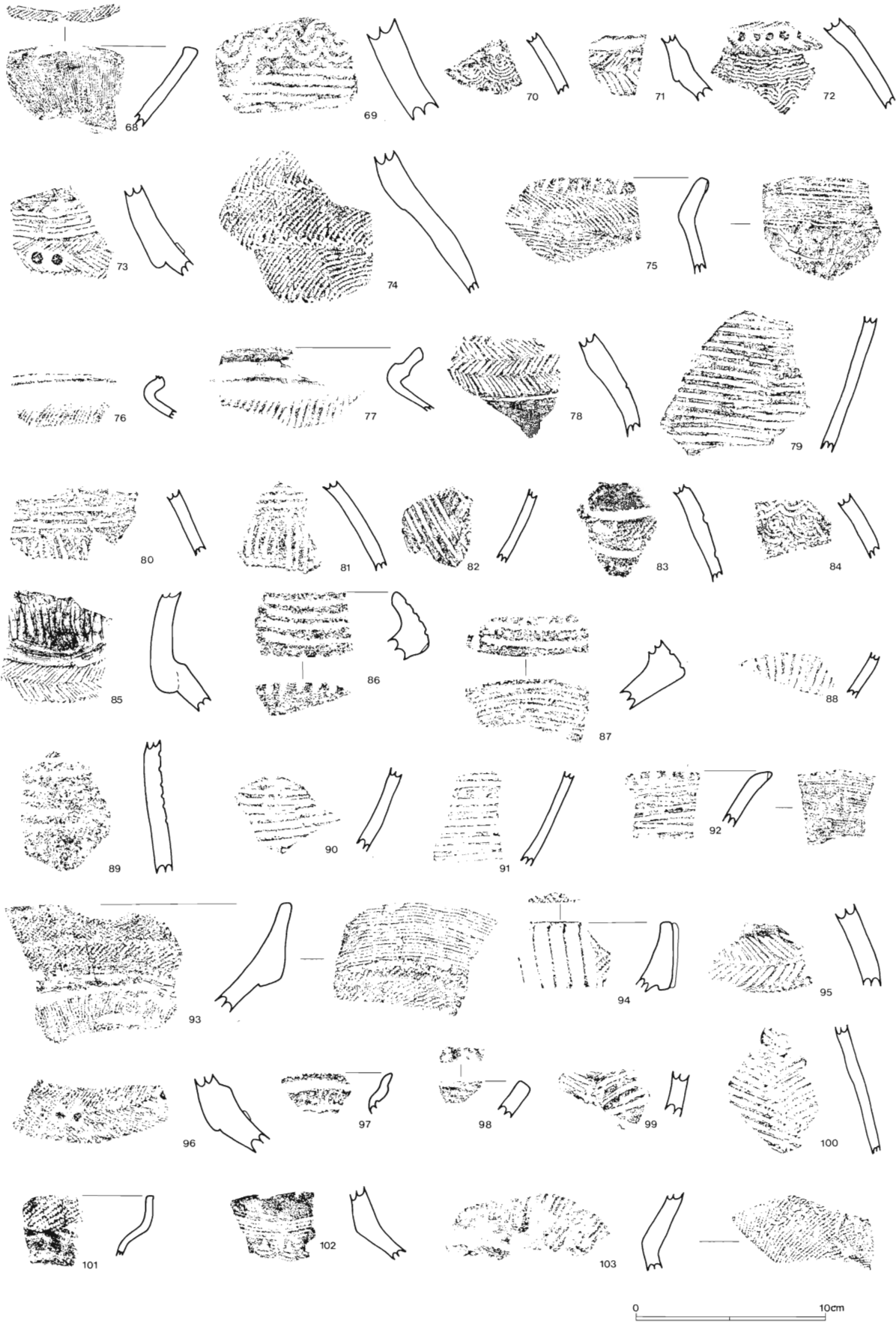


第19図 弥生時代土器拓影図(1)

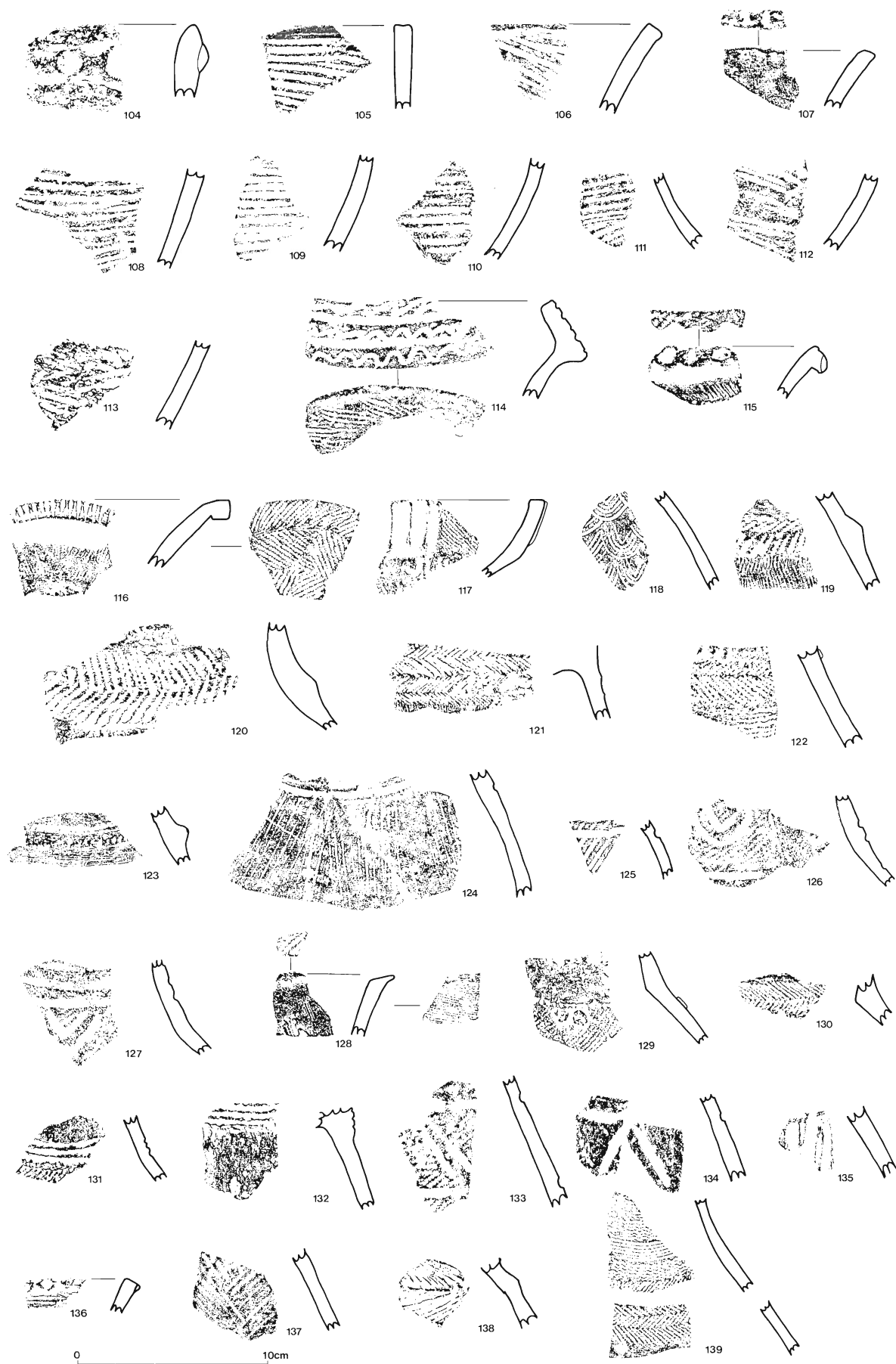




第20图 弥生时代土器拓影图(2)



第21図 弥生時代土器拓影図(3)



第22图 弥生时代土器拓影图(4)

ている。

⑫ 瀬戸山Ⅱ遺跡<34> (79~85)

檜王式期から嶺田式期 (79~82)、条痕を施した土器である。施紋具は79が二枚貝か、80、81が櫛Ⅱ種、と思われる。81は横位と縦位の条痕の組み合わせを紋様としており、丸子式の可能性が高い。他の破片については79、80が丸子式的、82が嶺田式的であるが、あくまで感覚的な判断である。

嶺田式期 (83)、太い沈線と縄紋を施した壺形土器の肩部である。

弥生時代後期 (84、85)、84は櫛描き波状紋と扇形紋、85は段と櫛の羽状刺突紋を施した壺形土器の頸部から肩部である。

⑬ 女高遺跡<38> (86~97)

嶺田式期 (86~92)、86、87は受口状口縁の壺形土器である。86は受口部に断続する横位の沈線、屈曲部に刻み目を施している。87は受口部に断続する横位の沈線と断続部を埋める縦位の沈線を施している。89は棒状施紋具による横位の沈線を施した壺形土器の頸部である。88は壺形土器もしくは甕形土器の口辺部、90、91は下胴部である。92は口縁に篋による刻み目を施した甕形土器である。

弥生時代後期 (93~96)、93、94は壺形土器の口辺部であり、93は、内外面に結節縄紋、94は口唇に縄紋、口縁直下に縄紋と棒状浮紋を施している。95は櫛の羽状刺突紋、96は段(突帯かも)と櫛の羽状刺突紋と円形浮紋を施した壺形土器の肩部である。

古墳時代前期 (97)、S字状口縁甕形土器である。

⑭ 金鑄原遺跡<42> (98~103)

1981年の発掘調査によって出土した資料の一部である。

丸子式期 (98~100)、98は口唇に押し引き紋を施した甕形土器である。99、100は羽状条痕を施した胴部である。口唇に押し引き紋を施す甕形土器は水神平式の主要器種であり、丸子式には僅かに残存するにすぎない。また99、100も丸子式として特定する事はできない。しかし、概報(掛川市教委1982)によれば、丸子式期の溝状遺構が検出されたとの事であり、出土遺物も丸子式以外には条痕紋土器は記載されていない。また、筆者も半截竹管による波状紋を施した丸子式の壺形土器を確認している。以上の様な理由で98~100を丸子式期と判断した。

弥生時代後期 (101~103)、101は口縁直下に縄紋を施した壺形土器である。102は櫛描き横線紋と扇形紋を施した壺形土器の肩部である。103は内面に結節縄紋を施した壺形土器の口辺部である。101は後期の前半であろう。

⑮ 岡津原Ⅰ遺跡<53> (104~121)

檜王式期 (104、105)、104は口唇が丸味をもち、突帯上に指頭による押圧紋を施した壺形土器である。105は口唇をナデによって面取りし、櫛Ⅱ種による条痕を施した深鉢形土器である。

水神平式期 (106、107)、106は口唇をナデによって軽く面取りし、半截竹管による条痕を施した甕形土器、107は口唇に押し引き紋を施した甕形土器である。106は檜王式かもしれない。

嶺田式期 (114、115)、114は受口部に棒状施紋具による横線紋と波状紋を施した受口状口縁の壺形土器である。115は口唇に縄紋を施し、突帯上に指頭による押圧紋を施した甕形土器である。

108~113は条痕を施した破片である。施紋具は110、111が櫛Ⅱ種か、112が半截竹管と思われる。時期は不詳であるが、檜王式から丸子式の間と思われる。

弥生時代後期 (116~121)、116は口唇に刻み目、内面に羽状の縄紋を施し、117は口縁直下に縄紋と棒状浮紋を施した壺形土器である。118は櫛描き波状紋、119は突帯上に櫛の刺突紋、120は突帯上に櫛の羽状刺突紋、を施した壺形土味の肩部である。121は突帯上に櫛の羽状刺突紋を施した高坏形土器の脚部である。

⑯ 岡津原Ⅱ遺跡<54> (122)

弥生時代後期、櫛の羽状刺突紋と波状紋、楕円形の浮紋を施した壺形土器の肩部である。

⑰ 岡津原Ⅲ遺跡<55> (123～132)

水神平式期(123)、突帯上に篋による刻み目を施した壺形土器の肩部、もしくは胴部である。遠賀川式系の土器と思われるが、小片であるため明確ではない。

嶺田式期(124～128)、124、125は沈線と櫛Ⅱ種による条痕、126、127は沈線と縄紋を施した壺形土器の肩部である。126、127は同一個体であろう。128は口唇に縄紋を施した甕形土器である。

弥生時代後期(129～132)、129は縄紋と円形浮紋、130は櫛の羽状刺突紋、131は櫛の押圧沈線と縄紋を施した壺形土器の肩部である。132は櫛の押圧沈線を施した高環形土器の脚部である。

⑱ 大六山遺跡<112> (133～138)

1982年の試掘調査によって出土した資料の一部である。<sup>(註1)</sup>

嶺田式期(133～136)、133は棒の刺突と沈線と縄紋、134、135は沈線を施した壺形土器の頸部である。136は口縁に刻み目施した甕形土器である。

137は櫛Ⅱ種による条痕を施した甕形土器の胴部である。嶺田式であろうが定かでない。

弥生時代後期(138)、突帯(段)と櫛の羽状刺突紋を施した壺形土器の肩部である。

⑲ 狐鼻遺跡<136> (139)

弥生時代後期、櫛描き波状紋、横線紋と羽状刺突紋を施した壺形土器の肩部である。

註1 1983年には本調査が行なわれ、25軒の竪穴式住居と14基の周溝墓や土壇、土器棺等が検出された。住居域と墓域とは分離しているらしい。盛期は弥生時代後期から古墳時代前期であり、弥生時代中期には墓域としてのみ利用されたらしい。土器以外には、石槍の類が出土している。高地性集落としても極めて注目される遺跡であり、詳細な報告書の刊行が期待される。

### 第3節 まとめ

掛川市域の弥生社会について、概括的に述べてきた。〈分布〉で論じた事が本文に相当し、〈遺跡の概説〉で述べた事が資料に相当する。ここで〈まとめ〉として特に述べる事はない。小論が掛川市域での遺跡保護に少しでも役立つ事を願うのみである。小論を作成するにあたっては、関係者以外に、以下の各氏のお世話になった。厚くお礼を申しあげる。

小野真一、加藤賢二、鈴木敏則、内藤次郎、中嶋郁夫、仲屋栄一、前田庄一、松井一明、向坂鋼二  
(五十音順)

(1984年1月10日稿了)

# 第5章 古墳時代

## 第1節 中期古墳の分布

全国的に古墳が大型化するの5世紀代である。連合体制を基礎構造とする古墳時代前期(4世紀代)の地域的政治集団のなかに、5世紀になると専制化をめざす特定勢力が現われてくる。中期大型古墳はこうした専制化・強大化を志向する在地集団(連合体)の首長墓と考えられてきた(石部1981・川西1983)。

原野谷川の西岸に広がる丘陵地(標高約60m)を地元では各和原台地と呼んでいる。台地上には東西0.7km南北2.3kmの範囲内に大型円墳1基(春林院古墳)、全長60mを超える前方後円墳2基(瓢塚・各和金塚古墳)、全長50m前後の前方後円墳2基(吉岡大塚・行人塚古墳)が築造され、その分布は散在的ながら、中遠地域における一大中期古墳群を形成している。春林院・瓢塚・各和金塚古墳の3基は、まさに沖積地を眼下に見おろす台地の縁辺部・突出部に位置しており、前期古墳に類似した立地形態を有している。吉岡大塚古墳は春林院古墳の西方0.5kmほど隔てた台地の内陸部(上位段丘面)に位置し、行人塚古墳は瓢塚古墳に西接して台地縁からやや内側に入った平坦地に築造されている。4基の前方後円墳の主軸方位は瓢塚・各和金塚古墳がほぼ南北方向を呈し、吉岡大塚・行人塚古墳は東西方向を呈する。春林院・瓢塚・行人塚古墳の周辺には小円墳群<sup>\*1</sup>が成立し、各和金塚古墳は前方部側に小円墳1基(金塚2号墳)を伴っている。

掛川市域の有力な中期古墳としては、他に原野谷川東岸の丘陵上に、画文帯神獸鏡を出土した岡津奥の原古墳(前方後円墳?)が築造されていた(静岡県1930)。また倉真川と初馬川の合流点に向い北から張り出す丘陵先端部上には、全長100mを超す大型前方後円墳(下山古墳)が存在したと伝えられる(静岡県1930)が、両墳墓ともすでに削平され詳細は不明である。

\*1 春林院古墳の南西約100mに吉岡古墳群(円墳3基)が立地する。瓢塚・行人塚古墳は近接して築造され、両古墳を取りまくようにして、北側の台地縁に吉岡古墳群(円墳7基)が一行に並び、南側には高田古墳群(円墳3基)が分布する。これら小円墳群の形成時期は明確でない。

\*2 熊本県船山古墳から栃木県牛塚古墳まで広い地域にわたり、総数10基の古墳から同範鏡が出土している(小林1961)。

### 1. 主要古墳の概要

- ① **春林院古墳**—掛川市吉岡字下の段。円墳。径30m高5m。各和原台地に成立した中期古墳群のなかで、原野谷川のもっとも上流域に立地している。1963年静岡大学史学研究室(内藤晃教授)が中心となり、多くの地元の人々が参加して発掘調査が行われ、調査成果は『春林院古墳』(内藤1966)として公にされた。古墳の墳頂部は平坦(径約10m)に造られ、墳丘面には約1.5mの間隔をおいて二段に葺石(幅上下とも約2m)がめぐっていた。墳頂部のやや南に偏して割竹形木棺を被覆した粘土槨(長2.84m幅1.35m高0.95m)が検出され、木棺の両端は小口板でおさえられていたと推定される。粘土槨の主軸はほぼ北東—南西方向を呈し、北側には約1.5m離れて、剣—1、鉈—1、針状鉄製品—3が漆膜に混って直線的に配置されていた。また墳頂部北寄りの小ピット内より壺形土器が1個体分出土し、葺石の間からは壺形埴輪片が採集されている(内藤1966)。

② 瓢塚古墳—掛川市吉岡字女高。前方後円墳。全長63m、後円部径37.8m高5m、前方部幅25.2m高3.5m。台地の東縁に南を向いて立地する。南側に近接して高田古墳群(円墳3基)が成立し、北西約50mには吉岡古墳群(円墳7基)と前方後円墳の行人塚古墳(全長42m)が築造されている。1978年掛川市教育委員会により測量調査が実施され、幅7m前後の周濠を伴うことが明らかとなった(平野他1979)。墳丘全面に葺石が認められ、円筒埴輪列がめぐっていたものと推定される。断定はできないが、葺石は上下2段に葺かれていた可能性が大きい。前方部西側の裾部には、葺石と同様の礫を用いて石堤(=裾石 幅50~60cm高30cm)を築いていた。墳丘は盛土により構築されるが、盛土の順序は前方部が外縁から中央へ、後円部は中央から外縁へと対照的な相違を示している。また後円部墳頂では黄褐色土のみを選択し、盛り上げていたらしいことも観察された(平野他1979)。

明治30年代に後円部墳頂にあった主体部が発掘され、おびただしい量の粘土中より獣形鏡2、勾玉(滑石製)1、管玉(碧玉製)1、刀子柄残欠1が出土している<sup>\*3</sup>(静岡県1930)。『静岡県史・第1巻』の記述によれば、粘土のおよぶ範囲は約2m四方高約1mであったとされ、棺の形態は明らかでないが、主体部は比較的短い棺全体を粘土で被覆した粘土槨であったと考えられる。瓢塚古墳より出土した壺形埴輪は複合口縁を有し、頸の異常に長い器形を呈する<sup>\*4</sup>。和泉期の古段階を大きく降るものではないと考えたい。

\*3 原三郎氏宅には『静岡県史・第1巻』に記載された出土遺物の他に、瓢塚古墳出土と伝えられる大型の水晶製勾玉、碧玉製管玉、剣先、鉄鏃、朱色の残る白色粘土塊が保管されているとのことである(平野他1979の註16)。

\*4 『春林院古墳』(内藤1966)P-37に写真が掲載されている。

③ 行人塚古墳—掛川市吉岡字女高。前方後円墳。全長42m、後円部径28m高不明、前方部幅推定17.5m高不明。瓢塚古墳に近接し、台地縁のやや内側に西を向いて立地する。北側には吉岡古墳群(円墳7基)が分布している。前方部は削平され茶畑となっていたため、従来行人塚古墳を円墳とする考え方が有力であった。1982年後円部周辺で茶園改植が計画され、掛川市教育委員会により緊急発掘調査が実施されたが、その際西にのびる前方部と完周するらしい幅2~6mの周濠が検出されている(松本1983)。後円部周縁は多くを削り取られ、観察できる墳丘規模は現在著しく小型化していた。発掘調査された周濠内の状況から、墳丘面に葺石・埴輪列等を推定するのは難しいとのことであるが、後円部土取り跡の断面には、葺石を思わせるこぶし大礫の集合が認められる<sup>\*5</sup>。

発掘調査も含め、行人塚古墳からの出土遺物は一切知られていない。

④ 各和金塚古墳—掛川市各和金塚。前方後円墳。全長66.4m、後円部径51.2m高6.5m、前方部幅20.5m高4m。台地縁から南南東に向かって突出する小支陵頂部に立地し、南にのびる前方部側に小円墳(金塚2号墳)を伴う。古墳は自然地形を利用して一部急峻な斜面を削り出し、また盛土することで墳丘を築いている。1980年掛川教育委員会により測量調査が実施された。その際の所見によれば、後円部は二段に築成され、中位に平坦面(幅2.5m前後)を有していた。後円部の平坦面・墳頂部をのぞき、墳丘には全面葺石が認められ、後円部上段の裾部および墳丘の末端には人頭大礫により裾石を築いていた。また後円部上段・前方部裾近くから、裾石同様の礫を横位縦列に配置した石列(带状列石)が検出されている。墳頂部と後円部中位の平坦面外縁に円筒埴輪列が確認でき、築造当初前方部には一段、後円部には二段の埴輪列がめぐっていたものと推定される。主体部は後円部中央にあり、いわゆる河原石積みの竪穴式石室である。平面形はほぼ長方形(全長4.75m幅0.75~0.85m高0.4~0.6m)を呈し、壁は同一大の楕円礫を小口積みして構築されて

いる。壁体内には多くの小礫が混り、粘土による隙間の充填も認められた。小円礫が敷かれた床面にはベンガラが塗布され、主体部の構造から埋置されていた木棺は割竹形ではなく箱式木棺であったと考えられる（平野・渡辺 1981）。

1974年の盗掘により多くの副葬品が持ち去られ、出土状態を明確にしうるのは、測量調査時に主体部北壁と接する床面直上から一括出土した剣25以上・鉾1だけであるが、盗掘の後排土中より短甲、大刀、剣、鉾、刀子、鏃等の鉄製武具類と大刀、斧等を模した滑石製模造品が採集されている（岩井 1974）。短甲は三角板皮綴であった可能性が大きく、<sup>\*6</sup>鉄製武具類を主体とする副葬品の組成は、各和金塚古墳の築造時期が比較的遡ることを示している。

\*5 行人塚古墳の記述については渡辺康弘、松本一男両氏から多くのご教示をいただいた。

\*6 渡辺康弘氏の教示による。

- ⑤ **吉岡大塚古墳**一掛川市高田字大塚。前方後円墳。全長55 m、後円部径41.3 m高7.2 m、前方部幅27.5 m高2.5 m。原野谷川の形成した沖積地から0.5 kmほど離れた台地頂部の平坦面に位置しているが、各和原台地には上・中位二つの段丘面が認められ、その立地は上位段丘の縁辺にあたる。西にのびる前方部は著しく未発達でありいわゆる帆立貝形を呈する。後円部周辺は帯状に陥没し周濠を伴うものと推定されてきたが、1979年の測量調査により幅11 m前後の“くびれ型”周濠と外堤（上面幅約6.9 m）をめぐらすことが明らかとなった（植松他 1980）。周濠底面は部分的に幅3～5 mでさらに深く掘り凹められていた。後円部は二段築成され、中位に幅1 m前後の平坦面を有している。墳丘には数条の葺石がめぐり、平坦面より上位の葺石には、人頭大の楕円礫を横位縦列に配した石列（帯状列石）が認められた。また墳丘裾部には人頭大礫により石堤（幅約50 cm）を築いていた。墳頂部に埴輪列があったとされ（内藤 1966）、測量調査においても後円部の平坦面付近から埴輪片が採集されているので、断定できないが築造当初埴輪列をめぐらしていたものと推定される。主体部は未発掘であり出土品は一切知られていない。

## 2. ま と め

行人塚・吉岡大塚古墳の出土遺物がまったく知られていない現在、各和原台地に成立した大型古墳の築造順位を確定するのは難しいが、5基の古墳はすべて5世紀代に築造されたとみて大過ないように思われる。<sup>\*7</sup>壺形埴輪（春林院・瓢塚古墳）や鉄製武具類を主体とする副葬品の組成（各和金塚古墳）は、台地縁に立地する大型古墳の築造期を遡らせる要素である。築造順位については従来の見解に従い、一応台地内陸に分布する行人塚・吉岡大塚古墳を台地縁の3基（春林院・瓢塚・各和金塚古墳）に比べ、相対的に新しくなるものと考えておきたい。

大型円墳や前方後円墳が当時の優れた土木技術に支えられた建造物であることは、その均衡のとれた姿から容易に想像することができる。1978年から掛川市・静岡県教育委員会が継続的に実施してきた大型古墳の測量調査は、各古墳の墳丘規模・外部施設について多くの資料を提示した。本稿では上記の測量調査成果をもとに、各和原台地に分布する中期大型古墳、特に前方後円墳の築造企画について検討してみたい。

後円部直径の $\frac{1}{8}$ を単位（区）として各古墳の築造企画を示したのが第3表・第23図である。<sup>\*9</sup>瓢塚・行人塚古墳の前方部長は後円部径の $\frac{1}{5}$ （5区型）、吉岡大塚古墳は $\frac{2}{5}$ （2.5区型）となるように設計されている。<sup>\*10</sup>各和金塚古墳では盛土により構築された後円部上段径（中位平坦面の内縁径）を基準としていたらしく、墳丘は一見4区型を呈する。実際の後円部は丘陵斜面を削り出した半区分の平坦面と1区分



の墳丘面を有しているのであるから、その直径は11単位、前方部長の比率は $\frac{2}{11}$ となり、変則的ながら各和金塚古墳も2.5区型の前方向後円墳と理解されよう。前方部幅は4基とも5区分に定められており、各和原台地に集合する前方後円墳の平面形は、瓢塚古墳＝行人塚古墳、各和金塚古墳＝吉岡大塚古墳で著しく類似している。また各和金塚・吉岡大塚古墳の外部施設には多くの共通点（外堤の存在、後円部二段築成、墳丘における縦方向石列、石堤＝裾石の存在等）が認められ、1区の実長は約5mと近似している。後出的とされた行人塚・吉岡大塚古墳のもっとも小さな設計単位が、ともに約1.75mであったと推定できることも注目されなければならない<sup>\*11</sup>。

\*7 各和原台地に成立した中期大型古墳の築造順位については、春林院古墳→各和金塚・吉岡大塚古墳（内藤1966）、各和金塚古墳（中期前半）→瓢塚古墳（中期中葉）→吉岡大塚古墳（久永他1970）、各和金塚古墳（5世紀初頭）→瓢塚古墳→吉岡大塚古墳（平野他1979・植松他1980）等の見解がある。

\*8 公的な保護施策の一環として1978年—瓢塚古墳（平野他1979）、1979年—吉岡大塚古墳（植松他1980）、1980年—各和金塚古墳（平野、渡辺他1981）行人塚古墳の測量調査が行われた。

\*9 石部正志、田中英夫、宮川渉、堀田啓一四氏の共同研究による築造企画の表記方法に従った（石部1981）。

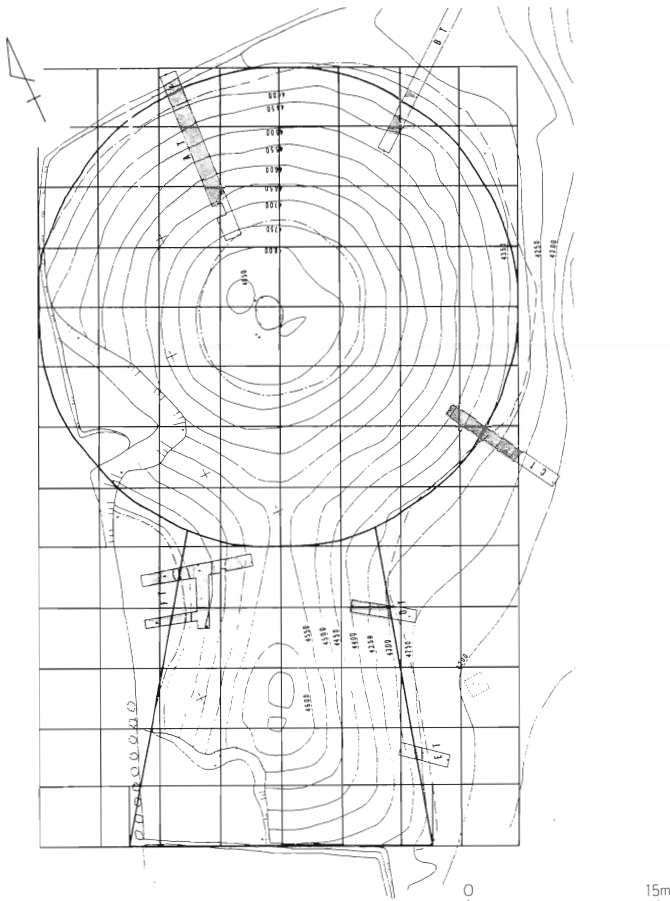
\*10 吉岡大塚古墳の築造企画を詳細に示せば後円部径＝8区、後円部上段径＝5区、くびれ部幅＝4区、前方部長＝2.5区、前方部幅＝5区、周濠幅＝2区（後円部周辺）2.5区（前方部前面）となるように設計されていたと考えられる。

\*11 当時使用されていたと思われる尺には漢尺・晋前尺（23cm）、晋尺（24cm）、晋後尺・宋尺（25cm）があるが、古墳築造に用いられたのは身度尺のうち最大の尋であった（石部1981）と仮定して、最小の設計単位を算出してみた。各前方後円墳の1区が2尋ないしは3尋により定められていたとすれば、瓢塚古墳は1尋1.58mで1区3尋、行人塚古墳は1尋1.75mで1区2尋、各和金塚古墳は1尋1.66mで1区3尋、吉岡大塚古墳は1尋1.73mで1区3尋の数値が得られる。

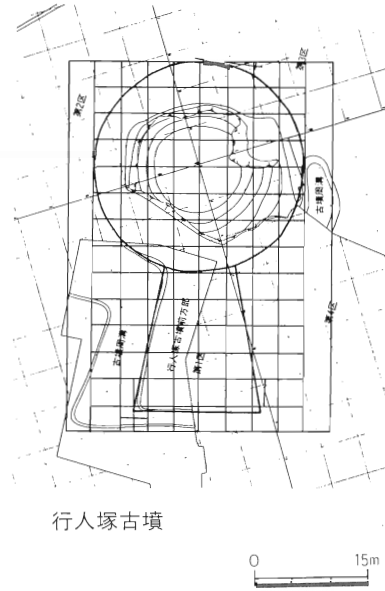
第3表 各和原台地に分布する中期大型古墳の築造企画一覧表

古墳名	墳形	型式	1区の長さ	全長		後円部径		前方部幅		主体部	外部施設	主な出土品
				長さ	区数	長さ	区数	長さ	区数			
春林院古墳	円墳		3.75	30 径＝ 葺石外 縁径	8					粘土椀 (割竹形木棺)	葺石（2段）	剣、鏃、針状鉄製品 壺形土器、壺形埴輪
瓢塚古墳	前方後円墳	5区型	4.75	62	13	38	8	24	5	粘土部	周濠 葺石（2段？） 円筒埴輪列 石堤	獸形鏡、勾玉、管玉 刀子柄残欠 壺形埴輪
行人塚古墳	前方後円墳	5区型	3.5	45.5	13	28	8	(17.5)	5	不明	周濠 葺石（？）	不明
各和金塚古墳	前方後円墳	2.5区型	5	67.5	13.5	55	11	25	5	河原石積壁 穴式石室 (箱式木棺？)	周濠、外堤 後円部二段築成 葺石、石列、裾 石、円筒埴輪列	短甲(三角板皮綴?) 大刀、剣、鉾、刀子 鏃、滑石製模造品 (大刀、斧等)
吉岡大塚古墳	前方後円墳	2.5区型	5.19	54.5	10.5	41.5	8	(26)	5	不明	周濠(くびれ型) 外堤、後円部二 段築成、葺石、 石列、石堤、円 筒埴輪列	不明

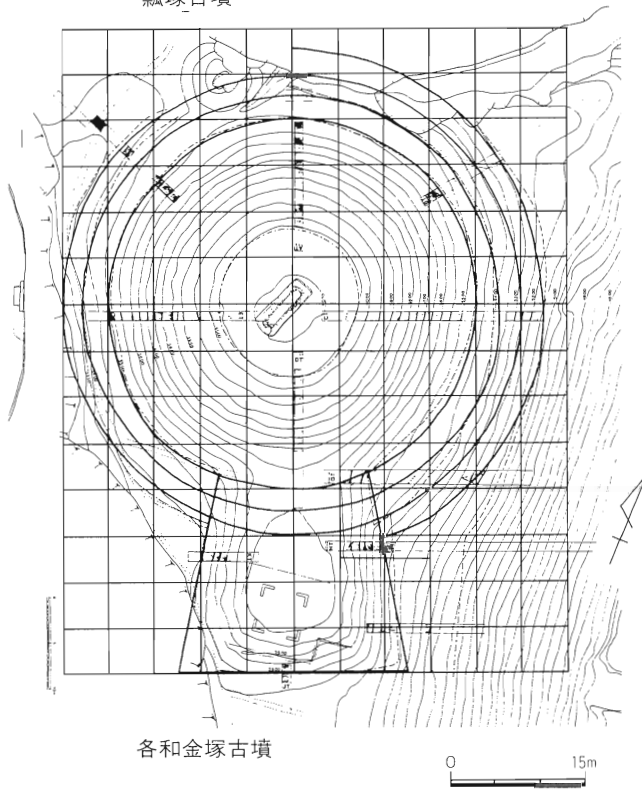
注) 本表における全長・後円部径・前方部幅は、概報等に掲載された墳丘図をたよりに推定復元した数値を記載した。よって調査者の現地計測値による本文中の値とは若干異っている。



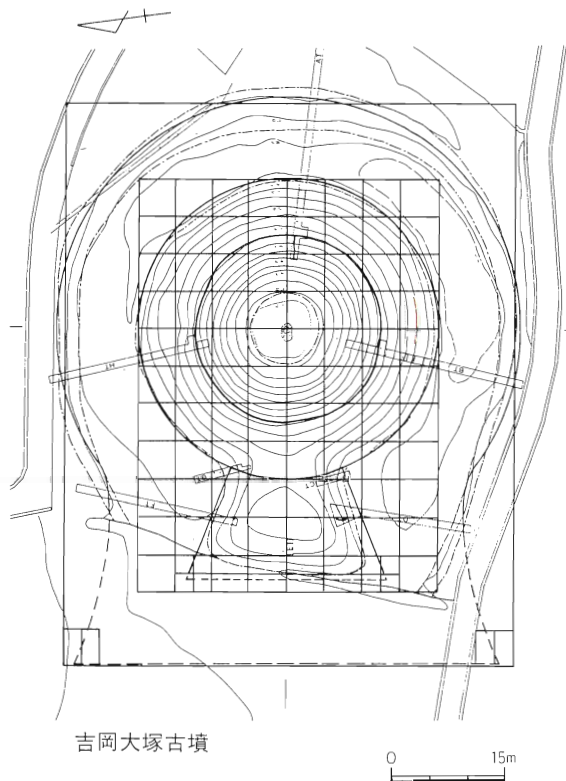
瓢塚古墳



行人塚古墳



各和金塚古墳



吉岡大塚古墳

『瓢塚古墳』(静岡県教育委員会1979) 『各和金塚古墳』(同前1981)  
 『吉岡大塚古墳』(同前1980) 『行人塚遺跡』(掛川市教育委員会1983)  
 による

第23図 築造企画図

特定の地域に集合する中期大型古墳群は、地域社会において専制的な支配権を維持しようとした在地集団（連合体）の首長墓と考えられるが、在地集団の構造は地域として統一され安定したものではなく、支配権をめぐる常にその内に多くの矛盾をかかえていたのではあるまいか。一系列のもとに順次築造されたかにみえる各和原台地の中期古墳群に、2形態の前方後円墳が存在する事実は、こうした在地集団の複雑な内部構造の一端を物語っているように思う。

近年原川遺跡や袋井市坂尻遺跡から和泉期に属する溝状遺構・竪穴住居跡群等が検出されているが（五島他 1983）、掛川市域における古墳時代中期の集落資料は不足しており、立地形態・構造等は不明の状況である。

## 参考文献

- 石部正志 1981 「Ⅲ 超巨大古墳を考える」『巨大古墳と倭の五王』 青木書店
- 川西宏幸 1983 「中期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」『考古学雑誌』第69巻第2号 日本考古学会
- 静岡県 1930 『静岡県史』第1巻
- 小林行雄 1961 「第3章 同範鏡考」『古墳時代の研究』 青木書店
- 内藤晃編 1966 『春林院古墳』 春林院古墳調査委員会
- 平野吾郎他 1979 『瓢塚古墳—測量調査報告書—』 掛川市教育委員会
- 松本一男 1983 『行人塚遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会
- 平野吾郎・渡辺康弘 1981 『各和金塚古墳—測量調査報告書—』 掛川市教育委員会
- 岩井克允 1974 「付載 各和金塚古墳について」『水垂二ツ池古墳群』 掛川市教育委員会
- 植松章八他 1980 『吉岡大塚古墳—測量調査報告書—』 掛川市教育委員会
- 内藤晃 1966 「古墳文化の地域的特色—東海」『日本の考古学』Ⅳ 河出書房
- 久永春男他 1970 『高代山古墳群』 掛川市教育委員会
- 五島康司他 1983 『昭和57年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡第3次調査—』 袋井市教育委員会

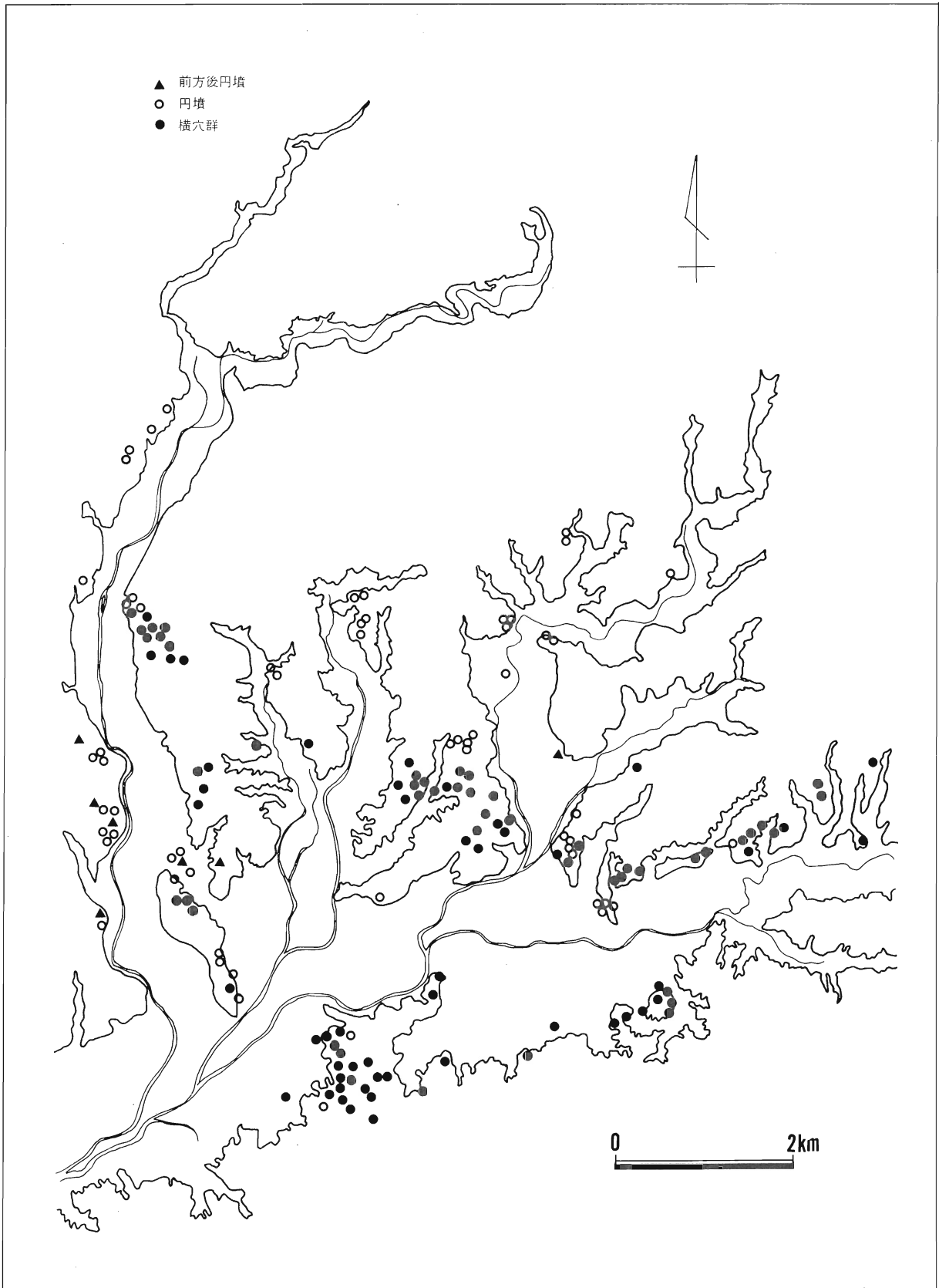
## 第2節 古墳時代後期

掛川市下の古墳時代後期の状況については、既に平野吾郎（平野吾 1980）氏の論考があり渡辺（渡辺 1983 a）も平野氏の論旨を追認したことがある。本稿ではこれまでの成果を再度まとめると共に、同時代の墓制である横穴式石室墳（以下石室墳）と横穴群の分布に特に注目して古墳時代後期の掛川市域を素描したいと思う。

### 1. 分 布

河川流域ごとに掛川市下の地域区分を行ない、古墳群と横穴群の分布を概観してみよう。

- ①原野谷川流域：右岸の和田岡丘陵上には、5世紀代に比定されている各和金塚古墳（平野吾ほか 1981）、吉岡大塚古墳（植松ほか 1980）、瓢塚古墳（平野吾ほか 1979）、行人塚古墳（松本 1982）が分布しており和田岡古墳群を形成している。またこの丘陵を下って現権山古墳、宇佐八幡神社古墳といった後期の前方後円墳が和田岡古墳群に連続して分布しており、原野谷川中流域を掌握した首長の系譜を認めることができる。従ってこれら首長を支えたこの地域の開発が、5世紀代には進んでおり生産が



第24図 遺跡分布図

安定していた事がわかる。

これに対し後期群集墳の分布は、和田岡丘陵上に谷房ヶ谷古墳群をはじめ群小古墳群の分布を認めることができるが、既に消滅した古墳も多く、内容は不明である。これら後期の小円墳は上流域の幡鎌古墳まで分布域が広範であるが、大きな群集性を示さず、前方後円墳とは明瞭な相称分布を示していない。

横穴群は和田岡丘陵の上流側に久保山横穴を認めることができる程度であり、これに対し下流側には東遠江でも屈指の大横穴群である袋井市菅ヶ谷横穴群（95基）が、南から進入する谷の奥端に形成されている（吉岡 1983）。附言すれば、前方後円墳や群集墳が台地縁辺に築かれているのに対し、横穴は谷の内奥部に占地するという傾向が強く、見られる対象としての墓、即ち権威の示現機能は横穴の場合、高塚古墳よりも低く押えられていると言えよう。それよりも横穴の絶対数の大きさと高い密度こそが横穴の性格を特徴づけるものであると考えられる。上記の菅ヶ谷横穴群は確かに和田岡古墳群と近接するが、丘陵に湾入する谷が相異しており、造墓集団の系譜関係は異っていると言えよう。

以上の原野谷川右岸域に対して、左岸には和田岡の前方後円墳に対峙するように、やはり5世紀代の前方後円墳と考えられる岡津奥ノ原古墳が存在し、岡津丘陵上には直葬墳であり6世紀初頭に比定される西岡津古墳（嶋 1968）が存在した。

横穴式石室を有する古墳である長福寺1号墳が上流域に存在する。この古墳については後述するように掛川市下でも数少ない石室墳であり、6世紀後半に比定され、横分布域のさらに外側に位置している。また右岸の台地上には古墳が散満に分布するようであるが、特に下流側の岡津丘陵上には前の西岡津古墳と共に調査された向山1・2号墳（大谷 1968 a）が存在したが、共に直葬墳であり6世紀前半に比定されている。

横穴群は比較的密度の高い分布傾向を示すが、長福寺1号墳の下流側に近接して長福寺下、古銭、宮坂の各横穴群が分布する。中でも宮坂横穴群<sup>註2</sup>には後で言及するが、既に消滅したものが多く詳細は不明である。また岡津丘陵には岡津横穴群A・B群が存在したが、これらも東名高速道路の建設に伴って調査され概要が公にされている（平野和 1968、大谷 1968 b）。A群は8基、B群は16基の横穴群で構成されている。他に宮坂横穴群と岡津横穴群との間に堂前横穴群、甚佐々谷横穴群等の分布をみるが内容は詳かでない。

原野谷川左岸での古墳と横穴群のあり方は対岸の和田岡古墳を中心にして、古銭、宮坂の横穴群分布域が上流側に、下流川には岡津横穴群が分布し、さらに宮坂横穴群の上流側に石室墳である長福寺1号墳とその対岸に幡鎌古墳が存在している。また直葬墳については散在しており、強い集中化傾向を示さないようである。こうした和田岡古墳群を中心とした相称分布が、勿論大胆な図式である事は承知しているが、遺跡の内容が明確にできていない現在、上述の分布傾向は認容されてよいと思われる。

②垂木川流域：上流域には不動ヶ谷古墳群をはじめ小円墳群の分布をみるが、横穴群の分布は皆無である。これに対し中流域では当地方でも屈指の大横穴群である飛鳥横穴群が位置している。また支流の家代川中流域には別所横穴群（松本 1983）が位置しており、横穴群分布域に含まれる小円墳の実態は不明であるがその数は僅かであり、上流域と中流域での高塚墳と横穴相互の相称分布は明瞭に把握できる。

③倉真川流域：上流域には前方後円墳と考えられる下山古墳（内藤 1966）をはじめ、後期の石室墳である平塚古墳が分布している。下流域には後期の小型前方後円墳と考えられる天王山5号墳を主墳とする天王山古墳群（遺考研 1968）が位置し、6世紀後半代の直葬墳で構成されている。同じ丘陵の上流側には水垂二ツ池古墳（岩井 1968）が連っている。またこれら古墳群が位置する対岸の、右岸

丘陵には、不動ヶ谷古墳（岩井 1978）や西谷田古墳（岩井 1978）等の直葬墳、6世紀前半代の礫郭墳である次郎丸遺跡 SRDT 1 遺構（岩井 1978）が分布している。

右岸には藪田横穴群や谷通横穴群等の横穴群の分布をみることができ、これらの横穴群は飛鳥横穴群と一連の横穴群としてまとめることができるかと思う。

こうした倉真川流域での分布の特徴は、この地域が高塚墳の分布域であり、横穴の分布が下流域にしかみられない点にある。換言すれば広範な地域相互の横穴群と高塚墳の相称分布が完徹されている点を大きく評価せねばなるまい。

④**逆川流域**：倉真川との合流点よりも上流域の右岸では、古墳群と横穴群が散満に分布している。小地域に分けてみると、大ヶ谷横穴群と妙見山古墳群とは倉真川に向かって分岐するそれぞれ別の丘陵に占地しているのがわかる。従って横穴群と古墳群とは相称分布をなしているが、内容が不明であり造墓集団の動向まで推測するのは不可能である。

このような右岸の様相に対し、原野谷川の合流点までの左岸地域には、横穴群が広範に分布し、一大密集地をつくっている。倉真川との合流点までの上流域には、久保横穴群や南坪横穴群といった小規模の横穴群が散在しているが、この合流点付近には、東遠江でも最古と考えられる横穴が位置していた。

山麓山横穴（久永ほか 1977）と宇洞ヶ谷横穴（向坂ほか 1971）がそれであるが、両者は共に6世紀中頃に比定され、特に後者は全長8mを測り、内部には長さ4.5m、幅3mの巨大な石棺を造り付けている。副葬品には、変形神獸鏡1面をはじめ銀製空玉や単竜環頭式銀莊飾大刀や金銅莊大刀を含み、大量の馬具・鉄製品や須恵器がある。このような規模と内容が豊かな横穴を、渡辺は和田岡古墳群に直接連なる当地方の首長墓であると推測した事がある（渡辺 1983 a）。

その下流域には本村横穴群（宮本ほか 1968）、大谷代横穴群（渡辺（1983 b））といった領家の大横穴群地帯が形成され、袋井市地藏ヶ谷横穴群（平野和 1965）等へ連続している。

こうした横穴群の顕著な分布に対して、古墳群としては見るべきものが少ないが、本村横穴群が占地する同一丘陵上には本村古墳（向坂 1968）が存在した。二基の直葬墳からなり、共に6世紀初頭の年代が与えられている。より下流域に形成された袋井市大門山古墳群をはじめとする大規模な群集墳と対照的な様相を示しており、古墳の内容も袋井市内の群集墳には多く横穴式石室が採用されているのに対しても好対照となっている。

以上に概述してきた古墳群と横穴群の古墳時代後期における掛川市下の分布を再度整理してみると、次のような墓域の限定性とでも呼び得る性格が看取できよう。

1. 前代の和田岡丘陵の前方後円墳群と谷房ヶ谷古墳群や長福寺1号墳を含めた高塚古墳群は、横穴群と明瞭な相称分布を示す。また垂木川中流域から上流域では横穴群の分布がみられず、石室墳である平塚古墳等高塚古墳の分布しか確認できない。従って墓域は墓を支える集団によって継承されていたと考えられる。
2. 一部の直葬墳と横穴群は比較的近接する分布を示し、特に岡津・本村丘陵での両者のあり方は相称分布とは言えず、後述するように同族集内の墓制の変換が想定できる。

こうした墓域の継承は、造墓集団が有していた生産基盤の地理的な広がり限定されていた事を反映していると推察される。

また葬制の面でも横穴と石室墳が封鎖石を開閉して追葬を行うのに対し、直葬墳は土壌の造りかえでこれに対処するのである。このような構造上の相違から、あるいは黄泉の国のイメージも異っていたかも知れないのである。

しかし以上の造墓集団の言及を急ぐ前に、直葬墳や石室墳あるいは横穴群の年代を整理しておきたいと思う。

## 2. 年 代

掛川市下では年代が押えられる古墳群や横穴群の資料は決して多くない。それでも東名高速道路をはじめ、開発に伴う発掘調査で出土した資料によってはあるが、ある程度までそれらの伸長を推測することは可能であると思われる。

年代区分については前稿（渡辺 1983 a）に従うこととし、Ⅰ期：6世紀前半～中頃、Ⅱ期：6世紀後半から7世紀前半、Ⅲ期：7世紀後半から8世紀前半に区分した上で、それぞれの地域ごとに検討してみたいと思う。

**Ⅰ期：**原野谷川流域では、和田岡の前方後円墳から連続する後期の前方後円墳はみられず、首長墓の系譜は不明確なものになってしまう。それでも袋井市内の権現山古墳・宇佐八幡神社古墳といった小型の前方後円墳は和田岡丘陵に存在し、また垂木川左岸の天王山5号墳はⅠ期の前方後円墳と考えられ、引き続き前方後円墳は造営されている。しかし5世紀代の前方後円墳とは比較にならない程に衰退してしまうのである。

Ⅰ期の後葉になると、逆川と垂木川の合流点近くに山麓山横穴と宇洞ヶ谷横穴が成立する。両者から出土した土器を詳細に検討すると前者がTK 10段階、後者がTK 209段階であり、山麓山横穴の方が先行すると考えられる（渡辺 1983 a）。また両者は単独横穴である事と特に前述したように宇洞ヶ谷横穴は規模と内容も前方後円墳の被葬者と何ら遜色なく、前方後円墳の衰退と横穴の台頭への連続を重視して、かつての前方後円墳の被葬者層が沖積地の開発を契機に逆川流域へ進出し、山麓山横穴、宇洞ヶ谷横穴を成立させたと解釈したいと思う。

こうした首長層の墓制の変換と並行して被支配者層の墓制も前代からの直葬墳から横穴へと次第に転換を進めていったと考えられる。

掛川市域には6世紀前半代と考えられる直葬墳は、岡津向原古墳や本村古墳群、水垂二ツ池古墳、あるいは峯山古墳（岩井 1978）等があり、長方形プランを有する土壌内に鉄鏃や直刀を納める程度である。また次郎丸遺跡SRDT 1は礫郭墓であるが、15cmを測る釘が出土しておりやはり6世紀前半代に比定されよう（田中 1976）。この礫郭墓も棺を組み上げた鉄釘とガラス玉程度であり、前代からの系譜を引く直葬墳も発展しておらず群集傾向も示していない。むしろ本村横穴群A群1号横穴や後述する宮坂22号横穴のように既に6世紀中頃には造墓を開始した横穴がみられる点に注目して、特に本村古墳群が6世紀前半代と考えられ、同じ丘陵内に本村横穴群の一部が浸透する事から、直葬墳から横穴への転換が被支配者層の間にも進行していると解釈したいと思う。

Ⅰ期の状況は横穴墓制の成立が引き起した各地域での墓制の転換に最も大きな特色があると言えよう。

**Ⅱ期：**東遠江地域で爆発的に横穴が造営される時期である。しかし掛川市下においてはそれぞれの流域で様相は一様でなく、開発の進捗や旧来からの在地有力者層の横穴墓制という新たな波に対する対処の異なりによって相異している。

①**原野谷川流域：**上流側には後述するように当地方でもしっかりした横穴式石室を有する長福寺1号墳が築かれ、これとほぼ同時期に近隣の古銭、宮坂横穴群が造営されるようになる。特に原野谷川右岸ではこれより下流域に横穴群が分布しているが、岡津A群は7世紀前半から8世紀前半、B群が7世紀前半から後半の時期が想定される。

- ②垂木川流域：群小古墳については不詳であるが、支流の家代川中流域に築かれた別所横穴群は6世紀末葉から7世紀後半代の横穴であり、最近調査された飛鳥横穴群の一部の横穴もこの時期のものである。当地域でも横穴群の盛行はこのⅡ期にあったと考えられる。
- ③倉真川流域：この時期の横穴式石室墳と思われる平塚古墳が上流域に位置しており、箱式石棺を蔵していた事が知られるが、未報告であり内容は不明である。また下流域に属する天王山丘陵上には確実にこのⅡ期の直葬円墳である天王山1・2号墳が存在しており、また対岸には飛鳥横穴群に連続する横穴群の分布がみられるとしても、この流域が横穴分布域に算入されていない事は重要である。
- ④逆川流域：領家一帯にはこの時期大規模な横穴群が形成されているが、中でも本村横穴群A群は6世紀後半でも古い時期に築造が開始され、7世紀中頃まで使用される。また大谷代横穴群は6世紀後半でも古い時期に築造が始められた事が判明している。また造り付けの石棺を有していた城山横穴（向坂1968）もこのⅡ期の横穴である。他の横穴群の内容は不明であるが、この流域での横穴群の盛行もこのⅡ期にあったと考えたいと思う。

以上に概述したⅡ期の横穴群の盛行は、平野氏の論考（平野吾1980）で展開されたように「屯倉」の成立による大規模開発がもたらしたと想像される。大横穴群の分布が示すように、古銭・宮坂横穴群に代表される原野谷川中流域、岡津横穴群に代表される原野谷川下流域、飛鳥横穴群に代表される垂木川流域、領家の横穴群に代表される逆川下流域の開発が特に大規模になされたと推測できる。これに対し倉真川流域の開発は上記の流れに沿ったものではなく、政治的変動に組み込まれなかった地域であると解釈できよう。しかしこうした解釈は集落跡の検出をまって検証しなければならず、速断は控えたいと思う。

Ⅲ期：群集墳は最早築造されなくなり、横穴は新たな築造よりも追葬が主となる時期である。岡津横穴群B群4号横穴は7世紀末葉の良好な資料を出土しており、同A群8号横穴では8世紀初頭の土器を出土している。この時期横穴の小型化が進み、本村横穴群B群1号横穴は長さ80cm程に小型化してしまう。恐らく火葬骨を納めた横穴であろうが、横穴の最終末期に火葬が導入されている現象は伊豆の横穴群の様相と一致しており注目されよう。

以上に述べてきた分布と年代を総合して、以下においては造墓集団の動きに注目してまとめたいと思う。

### 3. まとめ—遺跡の動態と集団関係—

#### a. 平野部の開発と墓制の変化

墓域の選定がその前面に広がる集落・可耕地を受けてなされると考えれば、和田岡丘陵上の前方後円墳の衰退を経て逆川下流域に山麓山横穴、宇洞ヶ谷横穴が成立する事実を、原野谷川中流域を掌握した和田岡古墳群の首長層は恐らく「ミヤケ」の設置を受けて6世紀半ばに逆川流域への開発に着手し、これを果した結果であると解釈できる。それに伴って本横穴群や大谷代横穴群の成立をみたのであり、前述したように前代の直葬墳被葬者層が横穴墓制への転換を果したと考えられる。換言すれば上記の開発が、在地の伝統的な墓制を換える程の大きな力で執行され、在地の労働力を結集させる形で遂行されたと言えよう。また倉真川流域はこうした政治的動向に参画しなかった地域として注目したいと思う。

#### b. 横穴群の展開

群集墳の成立は、共同体の分解過程にあって家父長層の経済的自立を反映しての現象と理解されているが、横穴群の爆発的な増大現象も同一であると解することができよう。掛川市域では群集墳は極めて貧弱であり、6世紀前半代の直葬墳は群集墳<sup>註3</sup>としてまとまることはなく、横穴群に結集したのであり、



有力家族層の経済的自立は「ミヤケ」の設置に伴う首長層の動向と軌を一にして、開発に参加する事で果たされたと思われる。

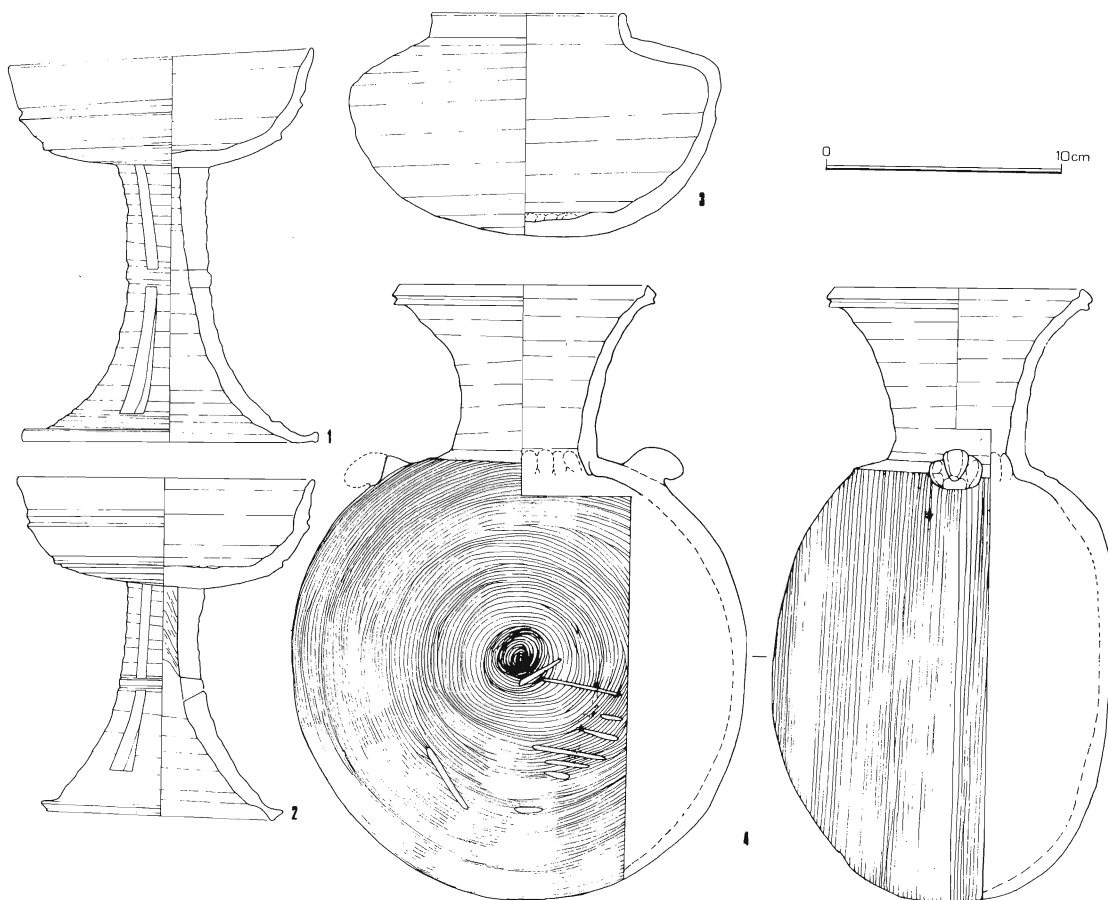
それでは横穴式石室墳の被葬者のこの新たな波に対する対応は如何であったろうか。

これまで述べてきたように掛川市域には、明確な横穴式石室墳としては、原野谷川流域の長福寺1号墳と倉真川流域の平塚古墳しか知られていない。平塚古墳は未報告であり、長福寺1号墳の資料は学術調査によったものではないが、ここでは長福寺1号墳と近隣の宮坂横穴群の出土資料を比較して両者の関係を検討したいと思う。

長福寺1号墳は長福寺の裏山、参道を昇りつめた丘陵平坦地に位置し、長さ6m程の横穴式石室を有する円墳であり、2m程の高さを測る墳丘が残存している。石室は大部分が解体されているが、土器や馬具等鉄製品の一部が長福寺に保管されている。

また宮坂横穴群は昭和53年に市教育委員会の手で調査された17基からなる横穴群である。この宮坂横穴群と長福寺1号墳とは第24図に示したように直線距離にして900mほど離れている。

第25図に長福寺1号墳から出土した須恵器を示したが、1・2は長脚二段透しを有する無蓋の高坏であり、坏身体部に突帯を造り出している。3は短頸壺であり、底部外面を回転ヘラケズリにて整形している。4は提瓶であり、胴部は全面カキ目整形され、口縁端部を断面三角に仕上げている。高坏に関しては小笠町宇洞1号横穴、大東町毛森山欠下峠横穴群B群17-1号横穴、袋井市道ヶ谷横穴群B-2号

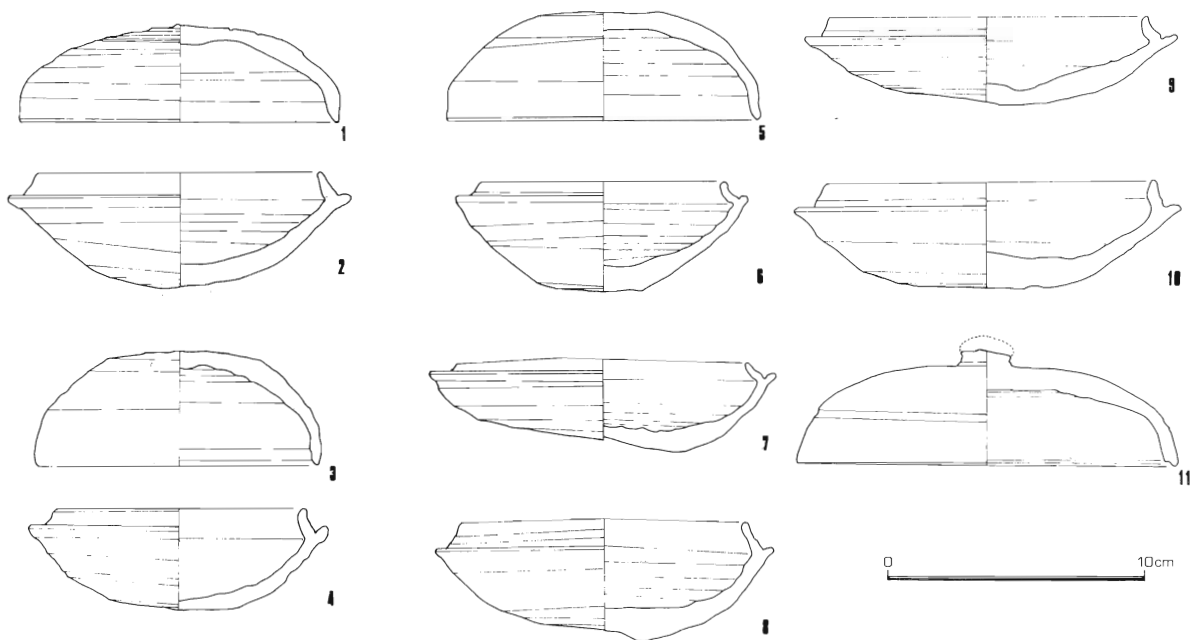


第25図 長福寺1号墳土器実測図

横穴等に類例をみることができる。比較的類例は多いと言えるが、これらに伴出した須恵器坏身から推して遠考研編年第Ⅲ期中葉に比定でき、6世紀後半代でも古式の段階に相当しよう。また短頸壺はカキ目整形段階の掛川市山麓山横穴出土例よりも型式学的には後出であり、高坏の年代と共伴すると考えてよからう。提瓶については本例よりも型式学的に後出であるが、浜岡町中田横穴群出土資料に類例をみることができ、従って本例は7世紀前半代に下るものではないと考えられる。以上の検討から長福寺1号墳は6世紀後半でも古い段階に位置づけられると考えるとよいであろう。

宮坂横穴群出土資料は、第26図に示したように、5・6が22号横穴、7が1号横穴から出土したものである。また8から11までは7号横穴、10号横穴等からの出土をみた須恵器である。5は22号横穴から出土した須恵器坏身であるが口径12.5cmを測り、6も22号横穴から出土した有蓋高坏の坏蓋であり14.7cmを測る口径を有す。特に後者の坏蓋は掛川市宇洞ヶ谷横穴に類例をみることができる。また7は1号横穴から出土した須恵器坏身で、口径9.5cmを測る。他に図示した須恵器から推して宮坂横穴群は遠考研編年の第Ⅲ期中頃から第Ⅳ期前半までの使用が想定される。従って6世紀後半でも古い段階から7世紀前半代までの利用があったと思われる。

これまでの両者の出土資料を比較してみると、長福寺1号墳の使用時期と宮坂横穴群22号横穴の使用時期が重なっているのが判る。厳密には長福寺1号墳の須恵器の方が先行している可能性もあるが、また宇洞ヶ谷横穴と両者が併行関係にある点は重視しなくてはならないであろう。宇洞ヶ谷横穴に首長が埋葬される時期に、長福寺1号墳の被葬者が埋葬され、宮坂横穴群はこの後に活発な造墓がなされるようになるのである。この時期こそが、古墳時代後期の最も重要な画期と言えよう。勿論既に削平されたと



第26図 宮坂横穴群実測図

思われる長福寺2号墳や既に消滅している古銭横穴群・長福寺下横穴群の内容が不明なまま推論することに無理はあろうが、長福寺1号墳の土器は一括品であり、従って追葬はなかったと判断される事から、あるいは長福寺1号墳の被葬者を支えた集団は、「開発」の波に抗し切れず、横穴墓制への転換を余儀なくされたと想像できる。

#### c. 横穴群の衰退

倉真川流域を残して広域に拡大した横穴墓制は、7世紀後半代に急速に衰退してゆく。東遠江地区でも広く確認できる。横穴の小型化という一般的傾向に沿って、第一に横穴は玄室と羨道の区別を不明確にして筒形に変化し、第二に一層小型化して本村横穴群B群1号横穴にみられるように1mに満たないものも出現する。既に7世紀前半には始まる第一の傾向は、謂わば黄泉の国の空間の縮小であり、同時に作業の節約であるが、反面横穴を蔵している山との一体化でもあり、こうした小型化を促した葬送観念の変化も今後は考慮されなくてはならないであろう。確かに小型横穴とは言え、火葬導入段階以前の横穴は追葬がなされるのであり、それまでの家族墓としての機能を有していると言えよう。従って厳密な意味での単葬墓の出現は、火葬の導入を待たねばならなかったのである。

以上古墳時代後期の様相を素描してみた。限定された資料の中で、集落跡の状況が不明なまま論を展開してきたことに危惧を覚えるが、今後資料の新たな検討を生み、古墳時代後期の社会像が彩色を施されながら描き直されることを期待したいと思う。

#### 註

1. 昭和48年に静岡大学によって調査されているが、未報告であり内容は不明である。
2. 石部正志氏は「後期群集墳の盛行は花火のような文化現象であったわけであるが、それは農業協同体関係の解体期の所産であったからである。個々の世帯の家父長が、かれが所属してきた共同体の臍帯から完全には分離できないまでも、日常の経営面で経済的に自立してきたことが、後期群集墳の成立にも廃絶にも投影していたとみられる。」との見解を明らかにしている。

石部正志 「古墳文化論」『日本史を学ぶ1 原始・古代』 有斐閣 1975

3. 類例に掲げた資料は、県教育委員会刊行の『遠江の横穴群』に依る。

#### 参考文献

- 岩井 1968 : 岩井克允『水垂二ッ池古墳発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 1968
- 岩井 1978 : 岩井克允『国道一号掛川バイパス建設用地内埋蔵文化財調査報告書』 掛川市教育委員会 1978
- 植松ほか 1980 : 植松章八ほか『吉岡大塚古墳測量調査報告書』 掛川市教育委員会 1980
- 遠考研 1968 : 大谷純仁ほか 『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』 遠江考古学研究会 1968
- 大谷 1968a : 大谷純仁 「掛川市向山古墳(第1号・第2号)発掘調査概報」 『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1968
- 大谷 1968b : 大谷純仁 「掛川市岡津横穴墳B群発掘調査概要」 『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1968
- 嶋 1968 : 嶋竹秋 「掛川市西岡津古墳発掘調査報告」 『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1968
- 田中 1976 : 田中彩太 「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」 『考古学研究』 第25巻2号 考古学研究会 1976

- 内藤 1966 : 内藤晃 「東海」 『日本の考古学Ⅳ』 河出書房新社 1966
- 久永ほか 1977 : 久永春男ほか 「掛川市の横穴墓」 『昭和52年度日本考古学協会総会研究発表要旨』 1977
- 平野和 1964 : 平野和男 『掛川市城山横穴墳調査報告書』 掛川市教育委員会 1964
- 平野和 1965 : 平野和男 『地藏ヶ谷古墳及び横穴』 『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 日本国有鉄道 1965
- 平野和 1968 : 平野和男 「掛川市岡津横穴墳A群発掘調査概要」 『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1968
- 平野吾ほか 1979 : 平野吾郎ほか 『瓢塚古墳測量調査報告書』 掛川市教育委員会 1979
- 平野吾 1980 : 平野吾郎 「原野谷川流域の古墳群」 『滝口宏先生古稀記念考古学論文集』 早稲田大学出版会 1980
- 平野吾ほか 1981 : 平野吾郎ほか 『各和金塚古墳測量調査報告書』 掛川市教育委員会 1981
- 松本 1982 : 松本一男 『行人塚遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会 1982
- 松本 1983 : 松本一男 「別所横穴墳」 『遠江の横穴』 静岡県教育委員会 1983
- 宮本ほか 1968 : 宮本□□ほか 「掛川市本村横穴墳B群発掘調査概報」 『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1968
- 向坂 1968 : 向坂鋼二 「掛川市本村古墳発掘調査概要」 『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1968
- 向坂ほか 1971 : 向坂鋼二ほか 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1971
- 吉岡 1983 : 吉岡伸夫 「菅ヶ谷横穴群」 『遠江の横穴』 静岡県教育委員会 1983
- 渡辺 1983a : 渡辺康弘 「原野谷川流域の横穴群」 『遠江の横穴』 静岡県教育委員会 1983
- 渡辺 1983b : 渡辺康弘 「大谷代横穴群」 『遠江の横穴』 静岡県教育委員会 1983

# 第6章 奈良・平安時代

## 第1節 奈良・平安時代の遺跡分布

奈良・平安時代の遺跡はごくわずかである。逆川・垂木川と原野谷川の合流点付近に形成された微高地（領家・篠場・梅橋・原川遺跡）で、しばしば奈良・平安時代に属する土器片が採集されていたようであるが、近年発掘調査が行われた原川遺跡と領家遺跡の一部をのぞいて、遺構・遺物の検出状況は明らかでない。掛川市域において、奈良・平安時代の集落構造等を明示する遺跡は、今のところ皆無に等しい。

### 1 主要遺跡の概要

①原川遺跡一遺跡は佐益郡衙跡と推定される袋井市坂尻遺跡に隣接し、原野谷川の形成した自然堤防（微高地）上に立地する。国1バイパス建設に先立ち、1982年から静岡埋蔵文化財調査研究所により発掘調査が行われ、現在も継続中である。包含層中に弥生・古墳時代から奈良・平安時代、中・近世にいたる複数の生活面が存在し、重複する多時期の遺構が調査地全面に広がっていた。1982年度の調査において検出された奈良・平安時代の遺構には、柱穴群、溝状遺構、土壇状遺構、井戸等がある（佐藤、及川 1983）。また 1983 年度、平安時代中ごろの竪穴住居跡も確認された<sup>\*</sup>。出土遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器を主体とするが、比較的多くの青磁、白磁片を含んでおり注目される。

奈良・平安時代に限れば、坂尻遺跡が急激に衰退する平安時代に、原川遺跡はむしろ盛期をむかえている。今後原野谷川を挟んで隣接する坂尻遺跡との関連のなかで、遺跡の性格をとらえていくことも必要であろう。

### 2 ま と め

奈良・平安時代の遺跡分布は、逆川・垂木川・原野谷川の合流点付近に集中している。この地域は佐益群のほぼ中心にあたり、平安時代末に長講堂領・曾我荘が成立した所でもある。

掛川市域における奈良・平安時代の考古学的資料は、現在著しく不足している。今後の資料増加を期待したい。

\* 調査を担当されている羽二生保氏にご教示いただいた。

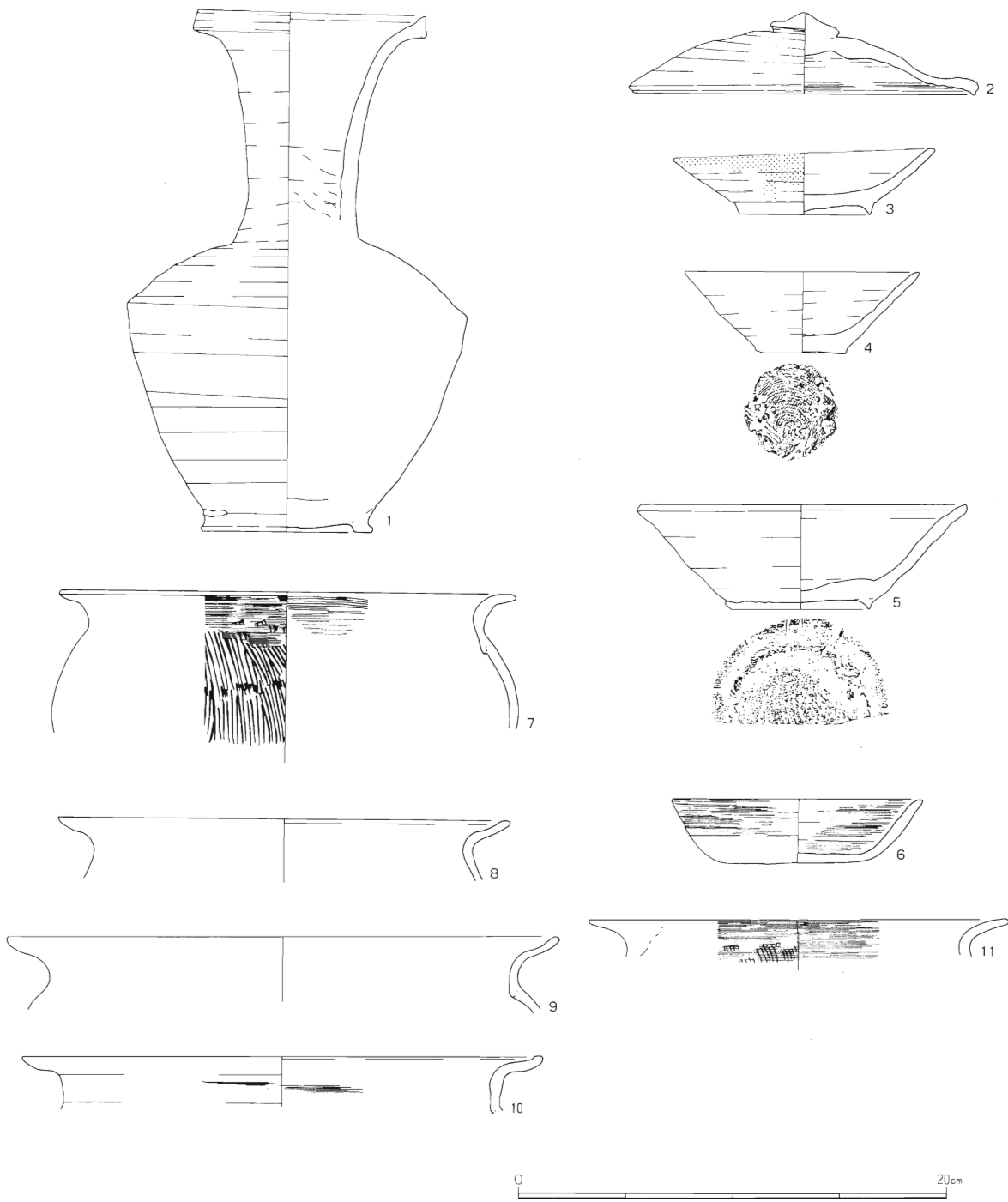
#### 参考文献

岩井克允 1977 「第5章 次郎丸遺跡」 『国道1号掛川バイパス建設用地内埋蔵文化財調査報告書』 掛川市教育委員会

岩井克允 1977 「第12章 峯山遺跡」 『国道1号掛川バイパス建設用地内埋蔵文化財調査報告書』 掛川市教育委員会

佐藤達雄 及川司 1983 『原川遺跡昭和57年度発掘調査概報一袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査一』 静岡埋蔵文化財調査研究所

川江秀孝 1980 「第2章 墨書土器の形態分類」 『伊場遺跡遺物編2』 浜松市教育委員会



2. 萩ノ段古墳出土 3. 萩ノ段遺跡出土 5. 和田B遺跡出土

第24図 遺物実測図

## 掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ

昭和59年3月

編集発行 掛川市教育委員会  
掛川市掛川 1144の1  
TEL (05372) 2 - 2111

印刷所 株式会社 三 創  
静岡市豊田3丁目5番30号  
TEL (0542) 82 - 4031







